

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(121)

中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅲ)

上水流遺跡 2

古墳時代から近世編

(南さつま市金峰町)

2008年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



上空から見た上水流遺跡(北東から万之瀬川下流方向を見る)



① 3号住居出土



② ①の脚部接合面の状況



③ 10号住居出土



礫積遺構検出状況



①中国産青花



②ベトナム陶器

序 文

この報告書は、万之瀬川の河川改修事業に伴って、平成12年度及び15年度から17年度にかけて実施した南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）に所在する上水流遺跡の発掘調査の記録（古墳時代から近世編）です。上水流遺跡の記録としては2冊目となるものです。

本報告でも多くの成果を紹介していますが、その中で特に古墳時代と中世後半～江戸時代前半において重要な発見がありました。

古墳時代では、11軒もの竪穴住居跡が発見されていますが、特にこの竪穴住居跡の中から発見された把手付鉢・器台などの初期の須恵器は新聞報道もなされるなど注目されています。

また、大型溝状遺構からは、17世紀を中心とした大量の陶器・磁器が出土しています。これらの遺物は、中国・東南アジア産のものと、国内産のものに大別されます。その中でも特に、日置市東市来町美山に所在した堂平窯跡で焼かれたとみられる初期の薩摩焼が注目されています。

これらの資料は、県内でも重要な資料の一つです。今後の県内における調査・研究に大きな役割を果たすものとなるでしょう。

本報告書が、県民の皆様をはじめ多くの方々を活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

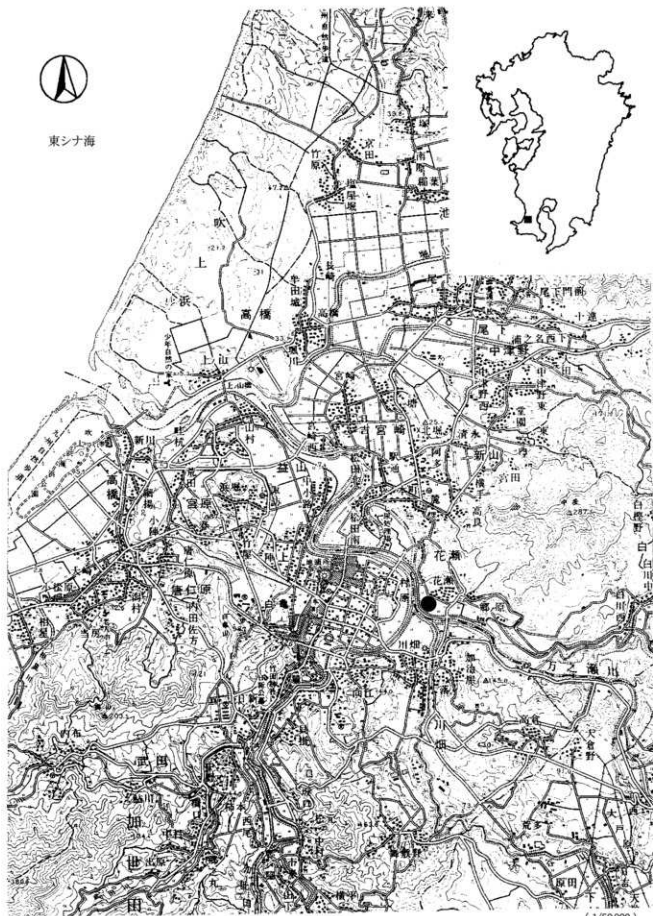
最後に、調査にあたりご協力をいただいた鹿児島地域振興局（旧加世田土木事務所）、南さつま市教育委員会並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 宮 原 景 信



東シナ海



上水流遺跡の位置図

例 言

- 1 本書は、中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う上水流通跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）花瀬に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、県土木部河川課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成12年4月24日～平成13年3月29日、平成15年8月9日～平成16年3月19日、平成16年5月14日～平成17年2月4日、平成17年5月9日～9月28日にかけて実施し、整理作業・報告書作成は平成17年度・平成18年度・平成19年度に実施した。
- 5 遺物番号は、各遺構や包含層別の通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、県土木部が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成、写真の撮影は、各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は、有限会社ふじた、有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
- 9 遺構実測図のトレースは、整理作業員の協力を得て黒川忠広・上床真が行った。
- 10 土器・陶磁器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て溝口学・拔水茂樹・黒川・上床が行った。
- 11 石器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て溝口・拔水が行い、一部は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム、株式会社九州文化財研究所、株式会社アイシン精機に委託し、監修は溝口・上床が行った。
- 12 自然科学分析は、株式会社バリノ・サーヴェイ、株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 13 遺物の写真撮影は、第3章関連を黒川が、その他を上床が行った。
- 14 本書の編集は、上床が担当し、執筆の分担は次のとおりである。

第1章	上床 真
第2章	上床 真
第3章	黒川忠広
第4章	上床 真
第5章 第1節(1)～第3節(2)・第3節(4)～(8)・第3節(10)(11)	上床 真
第3節(3)	拔水茂樹
第3節(9)	溝口 学
第6章	各文頭に記載
第7章	各節末に記載
付編	森村健一・竹中正巳
- 15 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、上水流通跡の遺物注記の略号は「KMZ」、「KZ」である。

本文目次

巻頭図版	第1節 概要	81
序文	第2節 遺物	81
報告書抄録	第5章 中・近世(遺構)の調査	84
例言	第1節 概要	84
目次	第2節 出土遺物の分類	85
第1章 調査の経過	第3節 遺構	109
第2章 層位と調査の経過	第6章 科学分析	212
第3章 古墳時代の調査	第7章 まとめ	226
第1節 概要	第8章 付編	252
第2節 遺構	遺物観察表	259
第3節 遺物	図版	275
第4章 古代の調査		81

挿図目次

第1図 調査範囲	第36図 6号竪穴住居跡内出土遺物実測図⑥	39
第2図 調査終了後の状況	第37図 7号竪穴住居跡内遺物出土状況	40
第3図 西側土層断面図①	第38図 7号竪穴住居跡・7号竪穴住居跡内 出土遺物実測図①	41
第4図 西側土層断面図②	第39図 7号竪穴住居跡内出土遺物実測図②	42
第5図 北側土層断面図	第40図 8号竪穴住居跡内遺物出土状況	43
第6図 遺構配置図①	第41図 8号竪穴住居跡	44
第7図 遺構配置図②	第42図 8号竪穴住居跡内出土遺物実測図①	45
第8図 1号竪穴住居跡内遺物出土状況	第43図 8号竪穴住居跡内出土遺物実測図②	46
第9図 1号竪穴住居跡	第44図 8号竪穴住居跡内出土遺物実測図③	47
第10図 1号竪穴住居跡内出土遺物実測図①	第45図 9号竪穴住居跡内遺物出土状況	48
第11図 1号竪穴住居跡内出土遺物実測図②	第46図 9号竪穴住居跡・9号竪穴住居跡内 出土遺物実測図①	49
第12図 2号竪穴住居跡・2号竪穴住居跡内 出土遺物実測図	第47図 9号竪穴住居跡内出土遺物実測図②	50
第13図 3号竪穴住居跡内遺物出土状況	第48図 10号竪穴住居跡内遺物出土状況	52
第14図 3号竪穴住居跡	第49図 10号竪穴住居跡	53
第15図 3号竪穴住居跡内出土遺物実測図	第50図 10号竪穴住居跡内出土遺物実測図①	54
第16図 4号竪穴住居跡内遺物出土状況	第51図 10号竪穴住居跡内出土遺物実測図② ・住居間接合の状況	55
第17図 4号竪穴住居跡	第52図 10号竪穴住居跡内出土遺物実測図③	56
第18図 4号竪穴住居跡内出土遺物実測図	第53図 10号竪穴住居跡内出土遺物実測図④	57
第19図 4号竪穴住居跡内遺物出土状況①	第54図 11号竪穴住居跡内遺物出土状況・11 号竪穴住居跡内出土遺物実測図①	58
第20図 5号竪穴住居跡内遺物出土状況②	第55図 11号竪穴住居跡・11号竪穴住居跡内 出土遺物実測図②	59
第21図 5号竪穴住居跡	第56図 土坑及び土坑内出土遺物実測図	60
第22図 5号竪穴住居跡内出土遺物実測図①	第57図 P1及びP1内出土遺物実測図①	61
第23図 5号竪穴住居跡内出土遺物実測図②	第58図 P1内出土遺物実測図②・P2, 礎 集積遺構及び各遺構内出土遺物実測図	62
第24図 5号竪穴住居跡内出土遺物実測図③	第59図 器種別出土状況図①(甕形A・B左)	64
第25図 5号竪穴住居跡内出土遺物実測図④	第60図 器種別出土状況図②(甕形A・B右)	65
第26図 5号竪穴住居跡内出土遺物実測図⑤	第61図 器種別出土状況図③(壺形・鉢形左)	66
第27図 6号竪穴住居跡内遺物出土状況	第62図 器種別出土状況図④(壺形・鉢形右)	67
第28図 6号竪穴住居跡(上の硬化面)	第63図 器種別出土状況図⑤(高坏ほか・須恵器ほか左)	68
第29図 6号竪穴住居跡(下の硬化面)	第64図 器種別出土状況図⑥(高坏ほか・須恵器ほか左)	69
第30図 6号竪穴住居跡内出土遺物実測図①	第65図 包含層出土遺物実測図①	70
第31図 6号竪穴住居跡内出土遺物実測図②		
第32図 6号竪穴住居跡内出土遺物実測図③		
第33図 6号竪穴住居跡内出土遺物実測図④		
第34図 6号竪穴住居跡内出土遺物実測図⑤		

第66図	包含層出土遺物実測図②	71	第117図	土坑墓②	125
第67図	包含層出土遺物実測図③	72	第118図	土坑墓③	126
第68図	包含層出土遺物実測図④	73	第119図	土坑墓出土遺物実測図	127
第69図	包含層出土遺物実測図⑤	74	第120図	土坑墓出土古銭①	128
第70図	包含層出土遺物実測図⑥	75	第121図	土坑墓出土古銭②	129
第71図	包含層出土遺物実測図⑦	76	第122図	塚状遺構	130
第72図	包含層出土遺物実測図⑧	77	第123図	塚状遺構出土遺物実測図	131
第73図	包含層出土遺物実測図⑨	78	第124図	大型土坑①	132
第74図	包含層出土遺物実測図⑩	79	第125図	大型土坑②	133
第75図	包含層出土遺物実測図⑪	80	第126図	大型土坑出土遺物実測図①	134
第76図	古代の遺物実測図①	81	第127図	大型土坑出土遺物実測図②	135
第77図	古代の土師器出土分布図	82	第128図	大型土坑出土遺物実測図③	136
第78図	古代の須恵器出土分布図	82	第129図	大型土坑③	137
第79図	古代の遺物実測図②	83	第130図	大型土坑出土遺物実測図④	138
第80図	古代の遺物実測図③	84	第131図	大型土坑出土遺物実測図⑤	139
第81図	中・近世の遺構全体図・地形図①	86	第132図	大型土坑出土遺物実測図⑥	140
第82図	中・近世の遺構配置図・地形図②	87	第133図	大型土坑出土遺物実測図⑦	141
第83図	中・近世の遺構配置図①	88	第134図	大型土坑④	141
第84図	中・近世の遺構配置図②	89	第135図	大型土坑出土遺物実測図⑧	142
第85図	中・近世の遺構配置図③	90	第136図	大型土坑出土遺物実測図⑨	143
第86図	中・近世の遺構配置図④	91	第137図	土坑①	144
第87図	中・近世の遺構配置図⑤	92	第138図	土坑②	145
第88図	中・近世の遺構配置図⑥	93	第139図	土坑出土遺物実測図①	146
第89図	中・近世の遺構配置図⑦	94	第140図	土坑③	147
第90図	中・近世の遺構配置図⑧	95	第141図	土坑出土遺物実測図②	147
第91図	中・近世の遺構配置図⑨	96	第142図	土坑④	148
第92図	中・近世の遺構配置図⑩	97	第143図	土坑⑤	149
第93図	中・近世の遺構配置図⑪	98	第144図	土坑⑥	150
第94図	中・近世の遺構配置図⑫	99	第145図	土坑⑦	151
第95図	中・近世の遺構配置図⑬	100	第146図	土坑⑧	152
第96図	中・近世の遺構配置図⑭	101	第147図	土坑⑨	153
第97図	中・近世の遺構配置図⑮	102	第148図	土坑出土遺物実測図③およびピット内出土遺物実測図①	154
第98図	掘立柱建物跡①	103	第149図	ピット①	155
第99図	掘立柱建物跡②	104	第150図	ピット②	156
第100図	掘立柱建物跡③	105	第151図	ピット内出土遺物実測図②	156
第101図	掘立柱建物跡④	106	第152図	ピット内出土遺物実測図③	157
第102図	掘立柱建物跡⑤	107	第153図	大溝出土遺物実測図①	166
第103図	掘立柱建物跡⑥	108	第154図	大溝出土遺物実測図②	167
第104図	掘立柱建物跡⑦	109	第155図	大溝出土遺物実測図③	168
第105図	掘立柱建物跡16-1 検出ピット ・各ピット内出土遺物	109	第156図	大溝出土遺物実測図④	169
第106図	掘立柱建物跡⑧	110	第157図	大溝出土遺物実測図⑤	170
第107図	掘立柱建物跡⑨	110	第158図	大溝出土遺物実測図⑥	171
第108図	竪穴建物跡	114	第159図	大溝出土遺物実測図⑦	172
第109図	竪穴建物跡出土遺物実測図	114	第160図	大溝出土遺物実測図⑧	173
第110図	炉状遺構①	116	第161図	大溝出土遺物実測図⑨	174
第111図	炉状遺構②	117	第162図	大溝出土遺物実測図⑩	175
第112図	炉状遺構③	118	第163図	大溝出土遺物実測図⑪	176
第113図	炉状遺構④	119	第164図	大溝出土遺物実測図⑫	177
第114図	炉状遺構⑤	120	第165図	大溝出土遺物実測図⑬	178
第115図	炉状遺構⑥	122	第166図	大溝出土遺物実測図⑭	179
第116図	土坑墓①	124	第167図	大溝出土遺物実測図⑮	180

第168図 大溝出土遺物実測図⑥	181
第169図 大溝出土遺物実測図⑦	182
第170図 大溝出土遺物実測図⑧	183
第171図 大溝出土遺物実測図⑨	184
第172図 大溝出土遺物実測図⑩	185
第173図 大溝出土遺物実測図⑪	186
第174図 溝内検出集石①	187
第175図 溝内出土遺物実測図①	188
第176図 溝内検出集石②	189
第177図 溝内出土遺物実測図②	190
第178図 溝断面図	191
第179図 溝内出土遺物実測図③	192
第180図 溝内出土遺物実測図④	193
第181図 溝内出土遺物実測図⑤	194
第182図 溝内出土遺物実測図⑥	195
第183図 溝内出土遺物実測図⑦	196
第184図 溝内出土遺物実測図⑧	197
第185図 溝内出土遺物実測図⑨	198
第186図 溝内出土遺物実測図⑩	199
第187図 溝内出土遺物実測図⑪	200
第188図 溝内出土遺物実測図⑫	201
第189図 礫積遺構	203
第190図 礫積遺構出土遺物実測図	203
第191図 集石遺構	204
第192図 集石遺構出土遺物実測図①	205
第193図 集石遺構出土遺物実測図②	206
第194図 石塔集積・土器埋設遺構・遺物実測図	207

第195図 鍛冶炉・集石と柱痕を伴う土坑	208
第196図 焼土	209
第197図 焼土出土遺物実測図	209
第198図 各遺構出土石製品	210
第199図 各遺構出土滑石製品	211
第200図 分析結果①	221
第201図 分析結果②	222
第202図 包含層出土遺物内訳	228
第203図 14の土器実測図	232
第204図 4の土器実測図	232
第205図 南九州粗痕分布状況	234
第206図 土坑墓b14	237
第207図 本遺跡の各組成	237
第208図 各遺構出土の重要遺構・遺物	237
第209図 各遺跡の炉状遺構	239
第210図 絵巻にみる炉状遺構	241
第211図 花瀬・美山の位置図	243
第212図 本遺跡出土の薩摩焼の分類①	244
第213図 本遺跡出土の薩摩焼の分類②	245
第214図 持鉢松遺跡の各出土遺物組成①	247
第215図 遷座前の内野門のモイドン	249
第216図 持鉢松遺跡の各出土遺物組成②	249
第217図 本遺跡周辺の孫字	251
第218図 上水流遺跡出土の鉄関連遺物	252
第219図 『海東諸国紀』	254
第220図 『河盛家所蔵日本地図屏風』	254

表目次

表1 6号竪穴住居跡内出土礫計測表	31
表2 8号竪穴住居跡内出土礫計測表	43
表3 掘立柱建物観察表(1)	112
表4 掘立柱建物観察表(2)	113
表5 炉状遺構観察表	123
表6 ビット観察表(1)	158
表7 ビット観察表(2)	159
表8 ビット観察表(3)	160
表9 ビット観察表(4)	161
表10 ビット観察表(5)	162
表11 ビット観察表(6)	163
表12 ビット観察表(7)	164
表13 ビット観察表(8)	165
表14 土坑観察表	165
表15 焼土観察表	165
表16 上水流遺跡出土古銭一覧	211
表17 分析試料一覧	212
表18 リン・カルシウム分析結果	213
表19 植物珪酸体分析結果	213
表20 種実同定結果	215
表21 放射性炭素年代測定結果	216
表22 放射性炭素年代測定および樹種同定結果	218
表23 暦年校正結果	218

表24 種実同定結果	218
表25 鹿児島県出土土器の分析データ	222
表26 地形土製品出土遺跡一覧表	236
表27 棒状礫出土遺跡一覧表	230
表28 古市遺跡2号住居内出土礫	231
表29 天草砥石出土遺跡一覧	231
表30 粗痕出土報告書一覧表	234
表31 県内出土の石臼一覧表	236
表32 土坑墓一覧	237
表33 本遺跡出土の薩摩焼の出土傾向	243
表34 発掘されたウメ・モモ等の核一覧表	247
表35 発掘されたモイドン一覧	247
表36 発掘された「塚」	247
表37 古墳時代住居内出土遺物観察表(1)	257
表38 古墳時代住居内出土遺物観察表(2)	258
表39 古墳時代住居内出土遺物観察表(3)	259
表40 古墳時代住居内出土遺物観察表(4)	260
表41 古墳時代住居内出土遺物観察表(5)	261
表42 古墳時代遺構内出土遺物観察表	261
表43 古墳時代遺構内出土石器観察表	261
表44 遺構内出土石製品観察表	261
表45 遺構内出土鉄製品観察表	261
表46 古墳時代包含層出土遺物観察表(1)	261

表47	古墳時代包含層出土遺物観察表(2)……………	262
表48	古墳時代包含層出土遺物観察表(3)……………	263
表49	古墳時代包含層出土遺物観察表(4)……………	264
表50	古墳時代包含層出土石製品観察表……………	264
表51	古代包含層出土遺物観察表……………	265
表52	中・近世遺構出土遺物観察表(1)……………	265
表53	中・近世遺構出土遺物観察表(2)……………	266
表54	中・近世遺構出土遺物観察表(3)……………	267
表55	中・近世遺構出土遺物観察表(4)……………	268
表56	中・近世遺構出土遺物観察表(5)……………	269

表57	中・近世遺構出土遺物観察表(6)……………	270
表58	中・近世遺構出土遺物観察表(7)……………	271
表59	中・近世遺構出土遺物観察表(8)……………	272
表60	中・近世遺構出土遺物観察表(9)……………	273
表61	中・近世遺構出土石製品観察表(1)……………	273
表62	中・近世遺構出土石製品観察表(2)……………	274
表63	中・近世遺構出土石製品・石器・ ガラス製品観察表……………	274
表64	中・近世遺構出土金属製品観察表……………	274

図版目次

図版1	上空から見た上水道遺跡……………	巻頭1
図版2	3・10号住居出土の須恵器……………	巻頭2
図版3	礫積遺構検出状況……………	巻頭3
図版4	中国産青花・ベトナム陶器……………	巻頭4
図版5	大溝検出状況……………	2
図版6	竪穴住居跡検出状況(北から南を撮影)……………	7
図版7	1号竪穴住居跡検出状況……………	10
図版8	2号竪穴住居跡検出状況……………	14
図版9	4の粉痕写真……………	15
図版10	3号竪穴住居跡検出状況……………	16
図版11	3号竪穴住居跡検出状況……………	17
図版12	15出土状況……………	18
図版13	4号竪穴住居跡検出状況(1)……………	19
図版14	4号竪穴住居跡検出状況(2)……………	20
図版15	5号竪穴住居跡検出状況(1)……………	21
図版16	5号竪穴住居跡内遺物出土状況……………	22
図版17	5号竪穴住居跡検出状況(2)……………	23
図版18	6号竪穴住居跡検出状況……………	30
図版19	6号竪穴住居跡内の礫集中……………	31
図版20	6号竪穴住居跡硬化面の状況……………	32
図版21	7号竪穴住居跡検出状況……………	40
図版22	8号竪穴住居跡検出状況(1)……………	42
図版23	8号竪穴住居跡検出状況(2)……………	43
図版24	9号竪穴住居跡検出状況(1)……………	47
図版25	9号竪穴住居跡検出状況(2)……………	48
図版26	6の脚部と皿部の接合状況……………	50
図版27	10号竪穴住居跡検出状況……………	51
図版28	10号竪穴住居跡内遺物出土状況……………	52
図版29	14の粉痕写真……………	55
図版30	11号竪穴住居跡検出状況(1)……………	57
図版31	11号竪穴住居跡検出状況(2)……………	58
図版32	竪穴住居跡検出状況……………	80
図版33	炉状遺構検出状況……………	123
図版34	大型土坑検出状況……………	132
図版35	土坑A検出状況……………	145
図版36	溝内集石1断面(石塔あり)……………	187
図版37	近世集石遺構検出状況……………	204
図版38	石塔集積・土器埋設遺構検出状況……………	207

図版39	鍛冶炉検出状況……………	208
図版40	ビットU8-24出土のヤマトシジミ……………	211
図版41	植物珪酸体・木材……………	214
図版42	植物珪酸体・種実遺体……………	215
図版43	種実遺体……………	218
図版44	14の圧痕部分拡大写真……………	232
図版45	14のレプリカ電子顕微鏡写真……………	232
図版46	4の圧痕部分拡大写真……………	232
図版47	4のレプリカ電子顕微鏡写真……………	232
図版48	圧痕資料1の圧痕部分拡大写真……………	233
図版49	圧痕資料1のレプリカ電子顕微鏡写真……………	233
図版50	圧痕資料2の圧痕部分拡大写真……………	233
図版51	圧痕資料2のレプリカ電子顕微鏡写真……………	233
図版52	圧痕資料3の圧痕部分拡大写真……………	233
図版53	圧痕資料3のレプリカ電子顕微鏡写真……………	233
図版54	11号土坑墓出土女性壮年骨……………	255
図版55	15号土坑墓出土男性壮年骨……………	255
図版56	古墳時代住居跡出土土器①……………	275
図版57	古墳時代住居跡出土土器②……………	276
図版58	古墳時代住居跡出土土器③……………	277
図版59	古墳時代住居跡出土土器④……………	278
図版60	古墳時代住居跡出土土器⑤……………	279
図版61	古墳時代住居跡出土土器⑥及び その他の土器①……………	280
図版62	古墳時代のその他の土器②……………	281
図版63	竪穴建物1号検出状況……………	282
図版64	竪穴建物2号検出状況……………	283
図版65	炉状遺構・大型土坑検出状況……………	284
図版66	ビット・大溝・土坑墓検出状況……………	285
図版67	古代包含層遺物・ 中・近世遺構内出土遺物①……………	286
図版68	中・近世遺構内出土遺物②……………	287
図版69	中・近世遺構内出土遺物③……………	288
図版70	中・近世遺構内出土遺物④……………	289
図版71	中・近世遺構内出土遺物⑤……………	290
図版72	中・近世遺構内出土遺物⑥……………	291
図版73	中・近世遺構内出土遺物⑦・ 上水道遺跡の整理作業員と担当職員……………	292

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護と活用を図るため、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて各開発関係機関との間で協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部河川課（以下、県土木部）は、中小河川改修工事（万之瀬川）の日置郡金峰町内（現南さつま市）における事業計画実施に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について、鹿児島県教育委員会文化課（現文化財課、以下県文化財課）に照会した。これを受けて県文化財課、金峰町教育委員会が平成5年度に分布調査を実施したところ、事業区域内に万之瀬川川底遺跡、松ヶ鼻遺跡、持鉢松遺跡、渡畑遺跡、芝原遺跡、上水流遺跡の6遺跡の所在が判明した。この結果を受けて、県土木部・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）の3者で協議した結果、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし、上水流遺跡の調査は金峰町教育委員会が担当した。確認調査は、平成7年8月1日から12月15日の期間に実施し、その結果、予定地において約13,000㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された。この成果については、金峰町教育委員会に刊行済みである。

これを受けて、12年度（新築堤防部分）・15年度（旧堤防と新築堤防の間）・16～17年度（新築堤防部分以外の部分・旧堤防部分）の本調査を実施した。

なお、平成16年度には調査対象範囲についての協議を県土木部・県文化財課・県埋文センターの3者で行った。その結果、調査範囲の拡大が判明し、調査期間は平成17年度の上半期までとした。

整理作業は、平成17年度の発掘調査終了後に取りかかり、平成19年度まで実施した。現在までの成果としては、平成19年3月には『上水流遺跡1（縄文時代中期後半～弥生時代編）』を刊行している。残りの時代については、平成20年度以降に継続して実施する計画である。なお、事務所改変に伴い、平成18年度中に起因事業主体者が伊集院土木事務所から加世田土木事務所へと変更された。

第2節 調査の組織

平成19年度

起因事業主体 鹿児島県土木部河川課
(加世田土木事務所)

整理主体 鹿児島県教育委員会

整理統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 宮原 景信

整理企画	次長兼総務課長 平山 章 次 長 新東 晃一 主任文化財主事兼 調査第一課長 池畑 耕一 主任文化財主事兼 調査第一課第二調査係長 中村 耕治
整理担当	文化財主事 溝口 学 文化財主事 東郷 克利 文化財主事 森 雄二 文化財主事 抜水 茂樹 文化財主事 富山 孝一 文化財主事 黒川 忠広 文化財研究員 上床 真
整理事務	総務係長 寄井田正秀
整理指導	堺市教育委員会文化課 主 査 森村 健一 早稲田大学理工学研究所 客員准教授 山本 信夫 鹿児島女子短期大学 准教授 竹中 正巳
企画担当者	文化財主事 中村 和美 文化財主事 関 明恵
報告書作成検討委員会	平成19年12月17日 所長ほか14名
報告書作成指導委員会	平成19年12月14日 次長ほか6名

第3節 調査の経過

調査の経過については、昨年度刊行した『上水流遺跡1』に掲載済みであるので、今回は割愛した。

第4節 整理作業の概要

上水流遺跡の整理作業は、平成12年度から平成17年度の発掘調査中に、遺物の水洗・注記作業を並行して行い、本格的な整理作業を平成17年度から実施した。作業は、県埋文センターで、他の万之瀬川流域の遺跡群と同時進行の形で行った。刊行については、当初は3分冊の予定であったが、様々な事情から、縄文時代前期、縄文時代前期末から縄文時代中期前半、縄文時代中期後半から弥生時代、古墳時代から近世の4分冊に計画を組み直して、平成18年度の縄文時代中期後半から弥生時代後期編に続いて平成19年度に古墳時代から近世編を刊行することとした。なお、このうち近世の包括層出土遺物については次年度の縄文時代前期編に組み込んで報告する予定である。

第2章 層位と調査の概要

上水流通跡は、万之瀬川の中流の川岸近くの自然堤防上に立地する遺跡である。本遺跡でみられる地層は、河川堆積物及びそれらの上に堆積する腐蝕土である。砂質の土壌については、「砂質土」と「砂」に分類した。河川による氾濫堆積層などを含んでいるので、遺跡内において必ずしも安定している状況ではなかった。例えば、Va層では同一包含層の中で黄褐色砂質土層（粘質土）と灰白色砂層とが何層にもわたって互い違いに堆積している様子が観察される地点もみられた。また、他の堆積土（砂）についても、ほとんどが数回にわたるとみられる沖積土（砂）であるので下に示す層位と若干異なる様相を呈する地点もある。火山灰に関しては、Ⅲb層中に開闢岳起源とされる「灰ゴラ」（南九州市須賀町水成川での¹⁴C年代分析結果では3620±140年BP）がみられるほかには、明確な火山灰層はみられない。なお、この灰ゴラに関しては晩期土器の編年に関わる重要な鍵層となる。しかし、本遺跡では安定的には堆積しておらず、土器型式を上下で区別するだけの様相ではなかった。いずれにせよ、灰ゴラが万之瀬川下流域まで降灰していたことが判明した点は今後の調査を考える上で重要な事項となる。

今回の報告書では、Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲa'層が対象となる。ただし、一部については、Ⅲa層にも入り込んでいる遺物もみられたが、これらの遺物についても今回の報告の対象とした。層位は以下の通りである。

Ⅰ 層	水田耕作土及び近世・近代の盛土 (旧堤防の造成盛土も含む)
Ⅱ 層	暗褐色腐植土 古代～近世
Ⅲa' 層	明黄褐色土 弥生時代～古墳時代
Ⅲa 層	黄褐色土 縄文時代晩期
Ⅲb 層	暗茶褐色土 縄文時代晩期 (ブロック状の灰ゴラを含む。)
Ⅳ 層	赤（黄）褐色土 縄文時代中期後半～後期
Va 層	黄褐色砂質土 縄文時代中期前半 (粘質土～灰色砂との互層となる地点あり)
Vb 層	黄白色砂質土 縄文時代前期後半 ～縄文時代中期初頭
Ⅵ 層	淡白色砂質土 縄文時代前期



①南側から見た検出途中の状況



②北側から見た検出途中の状況

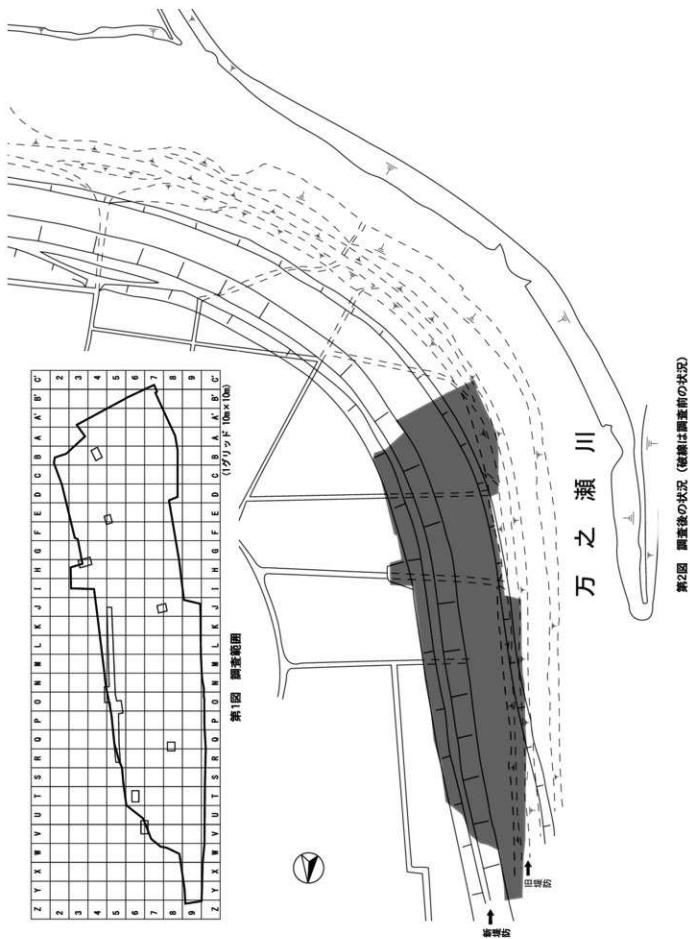


③南側から見た底面の帯状硬化面検出状況

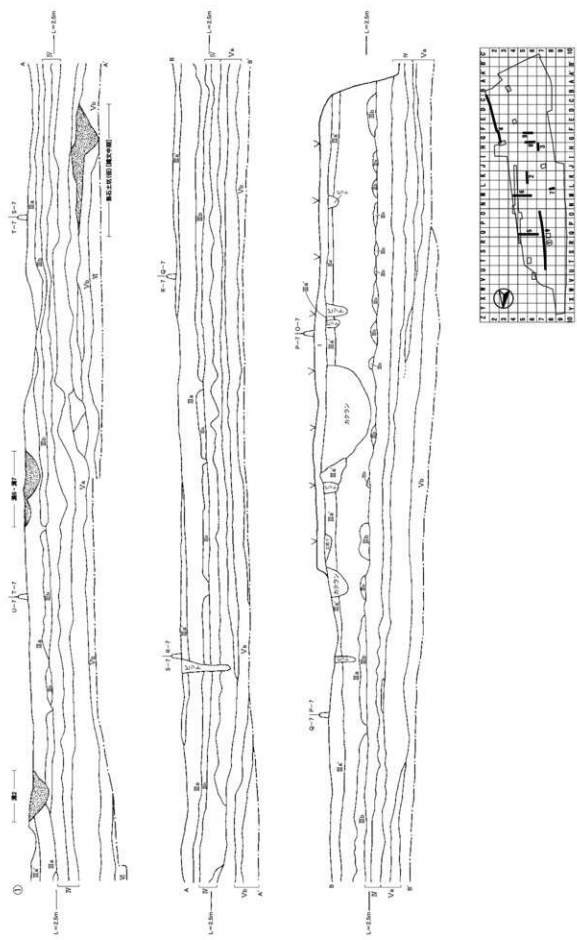


④南東側から見た大溝内石列の検出状況

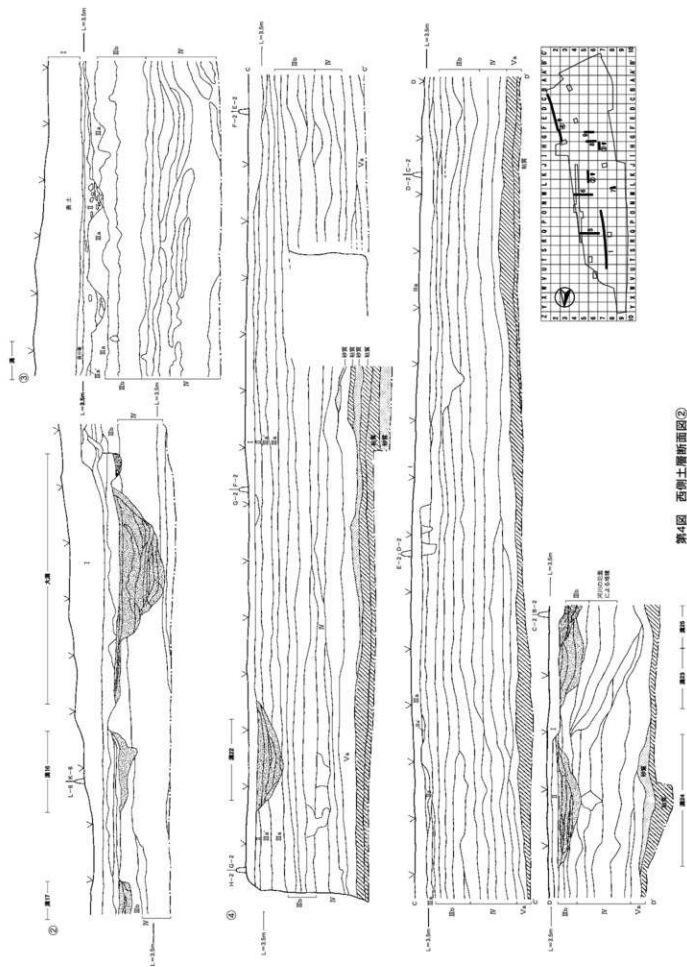
図版5 大溝検出状況



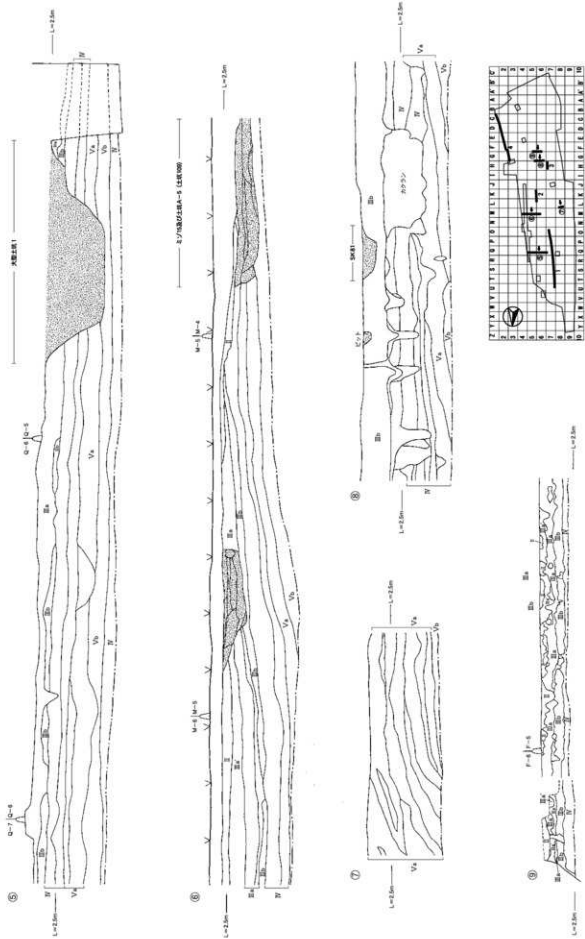
第2図 調査後の状況（破線は調査前の状況）



第3図 西側土層断面図①



第4图 西天山断面②



第15圖 北側土層断面図

第3章 古墳時代の調査

第1節 概要

古墳時代の調査対象となる層位は、Ⅲa'層、Ⅲa層であるが、一部Ⅲb層でも出土している。最も遺物量が多いのはⅢa'層である。

包含層での遺物出土状況は、Ⅲa'層を中心に遺物の出土が見られた。包含層での状況としては、小破片が多い。これらに関しては、区一括で取り上げを行い、比較的大きめの破片に関しては番号を付けて取り上げを実施した。なお、報告に際しては、弥生時代終末に位置づけられている中津野式土器段階も前後の関連性からここに報告をする。

遺構検出は、Ⅲa層で行った。その結果、竪穴住居跡11軒をはじめとする遺構が検出できた。竪穴住居跡は、調査区でも北側に集中する傾向が見られる。しかし、近現代の河川にかけての落ち込みにより、多くの竪穴住居跡のプランが消失してしまっていた。個別の遺構についての調査方法は、各遺構ごとに紹介するが、基本的に埋土は現地であらゆるいにかけて微細遺物の検出に努めている。床面及び、ピットの確認については最終的には半裁や断ち割りなどで最終面の確認を行った。ただし、竪穴住居跡周辺で検出されたピットに関しては、中世以降のものと厳密に区別することが出来なかったため、次章以降において一括して掲載している。

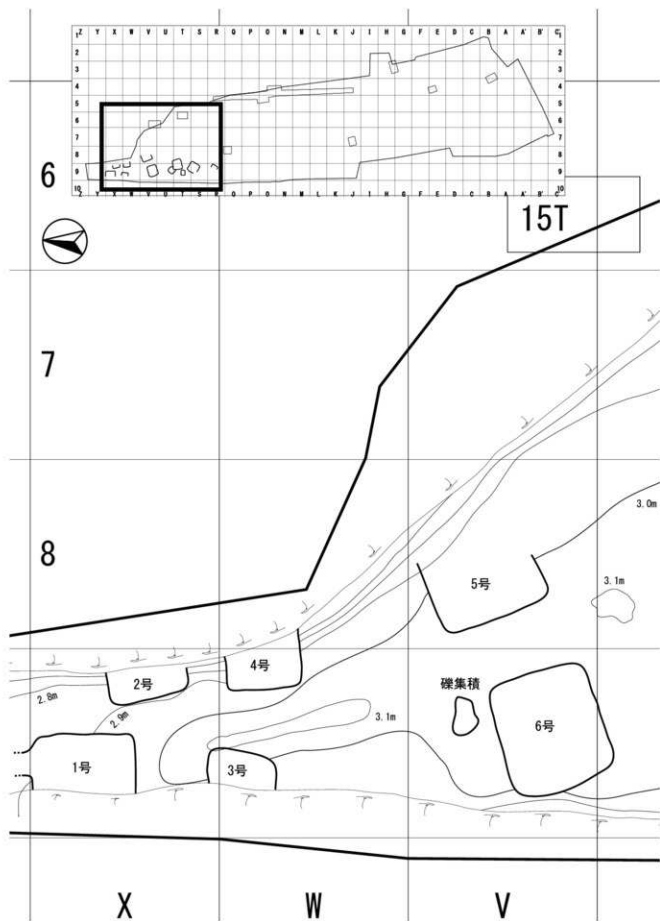
この他に、ピット内に廃棄若しくは埋納と思われる状態で土器が集積しているものが見られた。P1内からは、薄手の甕とともに在地の土器が出土している。詳細は、各遺構・遺物の報告にゆずるが該期の編年に有効な資料となるであろう。

包含層の概要としては、中津野段階から東原段階にかけての資料は少ないが、辻堂原から笹貫段階の遺物がまとまって出土している。平面的な

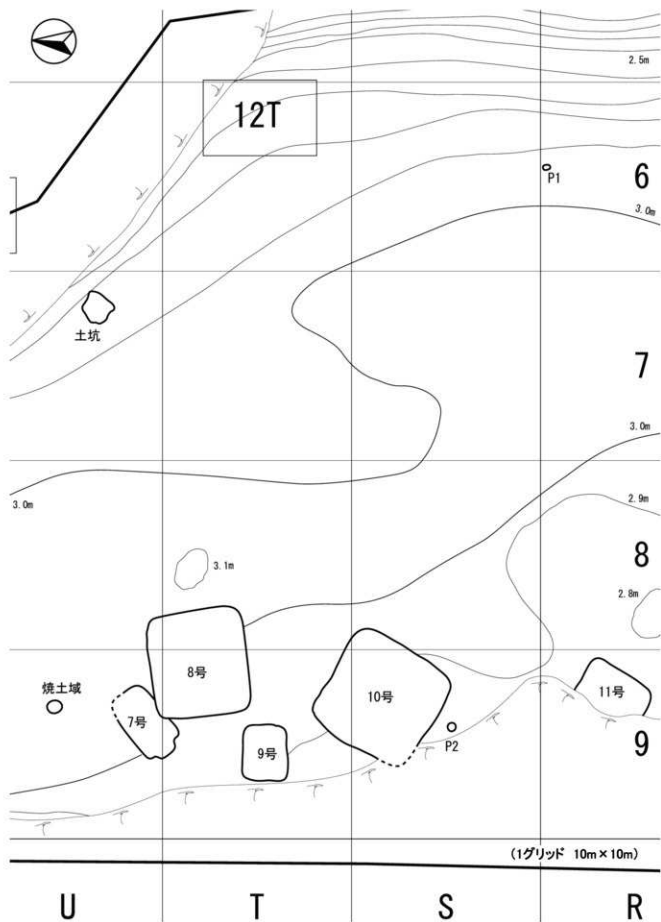
広がりとしては、O～Y区にかけて集中する。これは、竪穴住居跡の検出された範囲と大部分が重なっている。この重なりは、竪穴住居跡検出前に包含層遺物として取り上げたものの中には含まれようが、やはり竪穴住居周辺に該期の遺物が広がっているものと理解したい。この他に、J・K-4区とB・C-4～6区に集中が見られる。この中には、完形品の甕形土器が単体で出土している。これらの多くは、遺構を伴わずに土器単独で出土している。これらの完形品が、O～Y区の破片密集といった出土状況とどのような関係にあるのか、今回の調査では明らかにすることは出来なかった。また、古墳時代の須恵器はK-4区に集中する傾向が見られた。



図版6 竪穴住居跡検出状況（北から南を撮影）



第6図 遺構配置図①



第7図 遺構配置図②

第2節 遺構

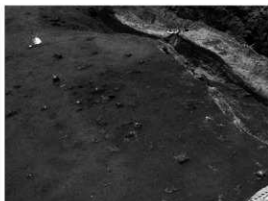
(1) 竪穴住居跡

① 1号竪穴住居跡

X-9区のⅢa'層上面で検出された。当初は、多量の小破片遺物が出土し、これを除去して精査を行った結果、方形のプランが検出された。ただし西側は、近世の落ち込みにより半分程度が崩落しており、最終的なプランは確認できていない。調査は、中央に埋土観察ベルトを設定して中央部分から床面を確認していった。床面を確認していく過程で、掘り下げていくと床面直上に固い土がブロック状に散在しており、その土をさらに掘り下げていくと、床面全体に硬化面が広がっているのが確認できた。硬化面を剥ぎ取っていくと床面約50~60cmの幅で灰ゴラの層が壁面に残存していることが確認できた。この状況から、住居は床面を造る段階で灰ゴラ層を掘り抜いたと考えられる。最終的に調査終了した段階で、この住居は検出面から灰ゴラの深さ37cm、検出面から床面までの深さ45cmと、二段掘りの形状を呈していることが判明した。

また、南側には土坑状のプランも認められた。この土坑からは、小片遺物が折り重なるような状態で出土した。なお、ピットの検出は硬化面を剥ぎ取った段階と、2段階の掘方を検出した段階との2回行った。その結果、上層で10基、下層で3基が確認出来た。

竪穴住居内から出土した遺物は総点で3,324点あり、接合作業を経てこの内34点を図化した。総点内訳は、甕1,599点、壺180点、高坏199点、埴230点、鉢13点、小破片他1,103点である。また、モモ核が1点出土している。



①検出状況

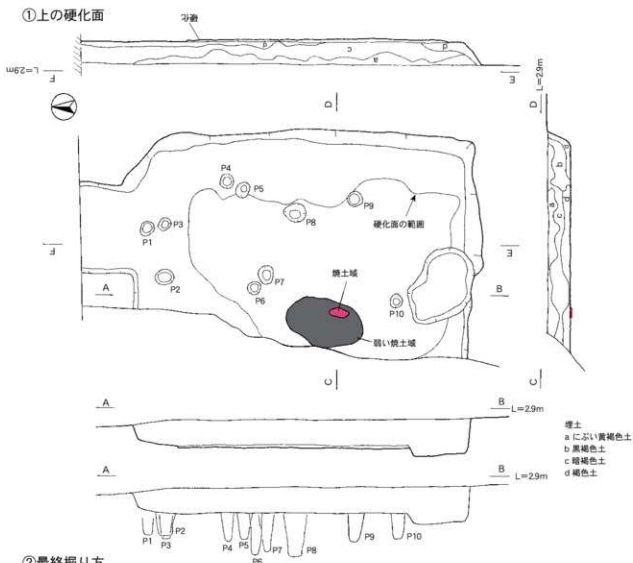


②埋土の状況

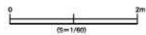
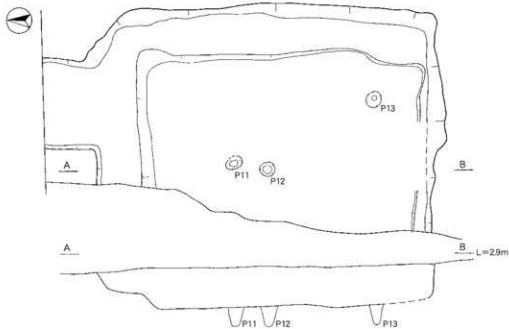
図版7 1号竪穴住居跡検出状況



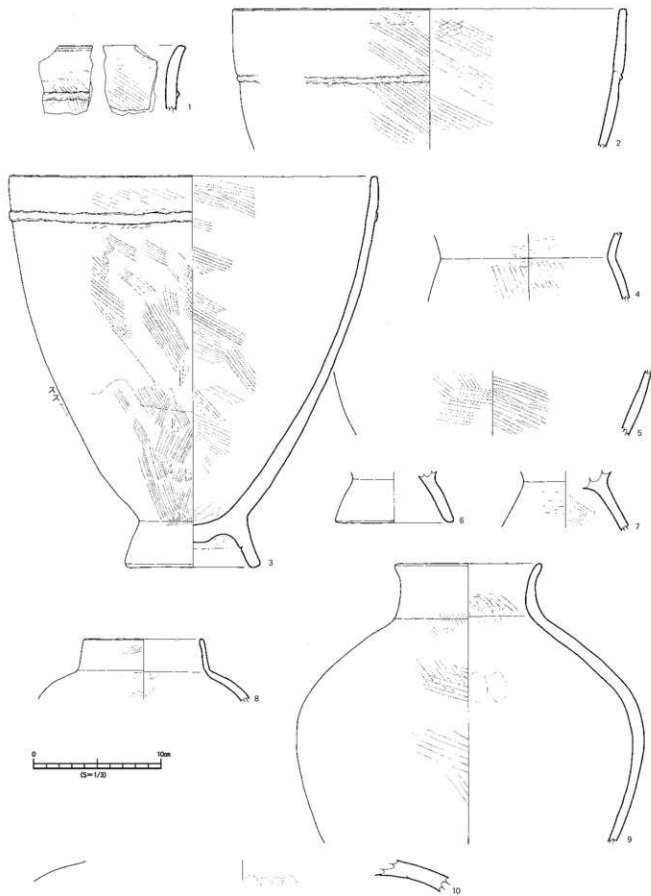
第8図 1号竪穴住居跡内遺物出土状況



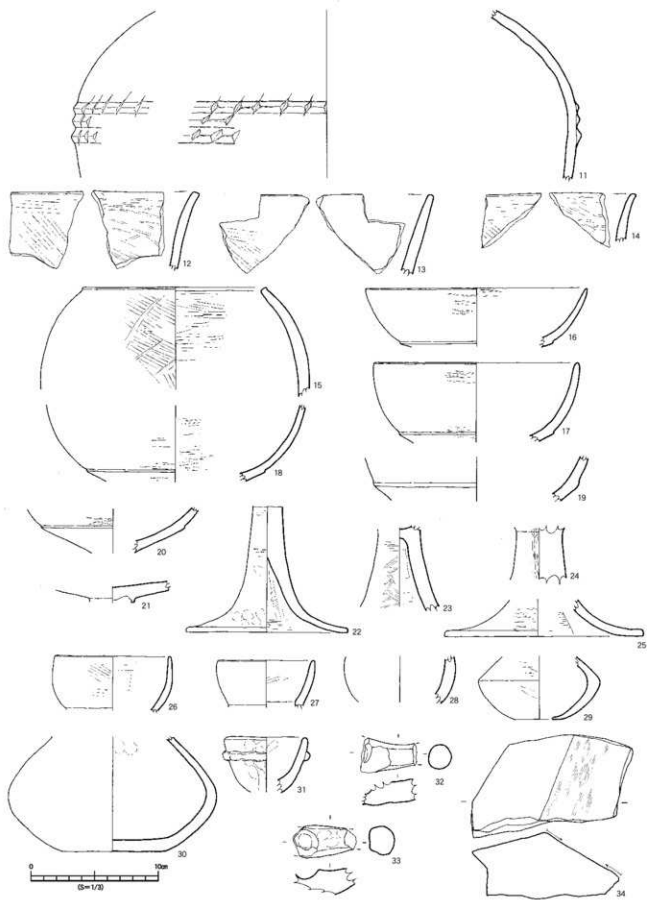
②最終掘り方



第9図 1号竪穴住居跡



第10图 1号竖穴住居跡内出土遺物実測図①



第11图 1号竖穴住居跡内出土遺物実測図②

② 2号竪穴住居跡

X-9区のⅢa層上面で検出された。東側を近世の水田耕作により削平を受けている。全体像を検出することは出来なかったが、残された西側の状況などから、最終的なプランは、4m×4m程度のプランを想定した。なお、検出面から床面までの深さは約40cmであった。

埋土観察ベルトを残しながら掘り下げ、硬化面が検出された段階で埋土の記録を行い、その後全体的に床面を検出した。床は、中央部分が硬化しており、中央付近に2カ所硬化面が赤化している部分があり、周辺の硬化面は炭化物が浸食して硬化面の表面を覆っている。最終的には、ミニトレンチで硬化面の厚さを記録した後に硬化面を剥がして柱穴を検出して調査を終了している。この作業によりP1～P4が検出された。

遺構内遺物は438点で、接合作業を経てこの内の12点を図化した。総点内訳は甕371点、壺7点、高坏54点、小破片その他6点である。なお、埋土中には生粘土も出土している。時期判断が出来る資料は少なく、口縁部が直行するが、口縁部上端がわずかに外反する1のような資料が認められる。12は、手捏ね土器であるが、匙形土製品の底部である可能性も考えられる。特筆すべき遺物としては、甕外面に粉痕が見られる資料が出土している（第13図4）。甕の胴部下半の資料であろう。

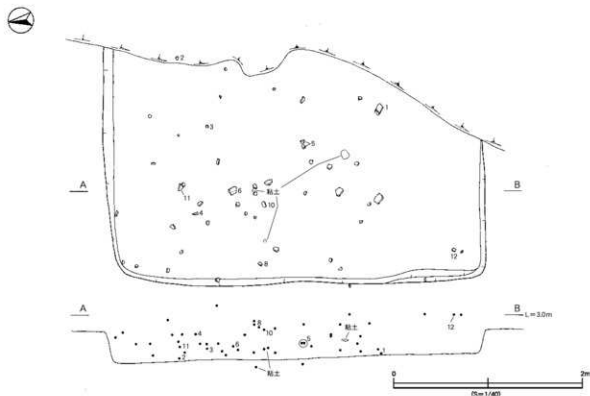


①検出状況

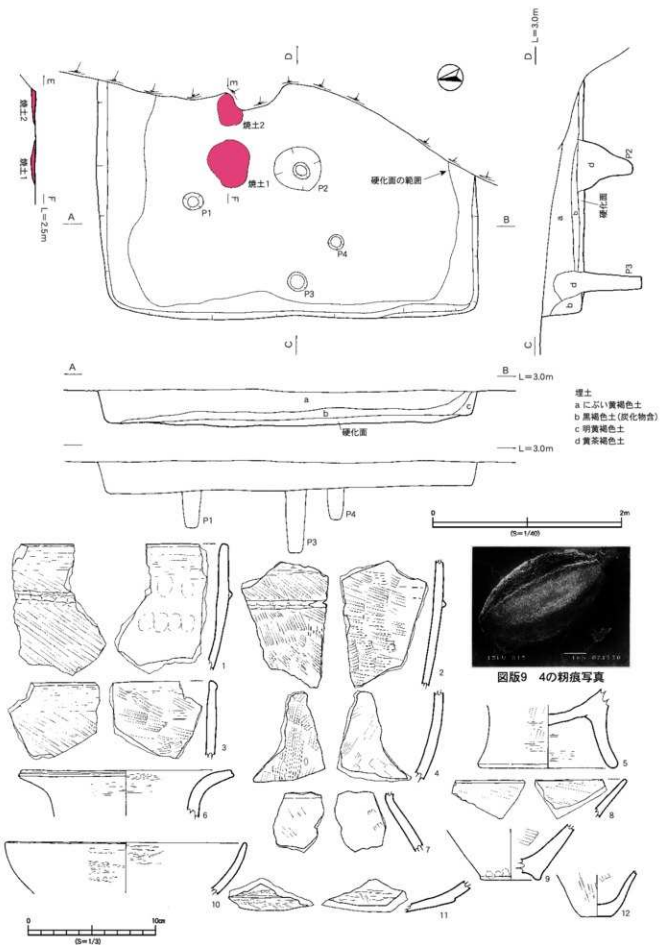


②完掘状況

図版8 2号竪穴住居跡検出状況



第12図 2号竪穴住居跡内遺物出土状況



第13図 2号竪穴住居跡・2号竪穴住居跡内出土遺物実測図

③ 3号竪穴住居跡

W・X-9区でⅢa層上面で検出された。西側を近世の崩落により大きく消失している。全体像を検出することは出来なかったが、残された東側の状況などから、最終的なプランは、約4m×4mのプランを想定した。なお、検出面から床面までの深さは約30cmであった。

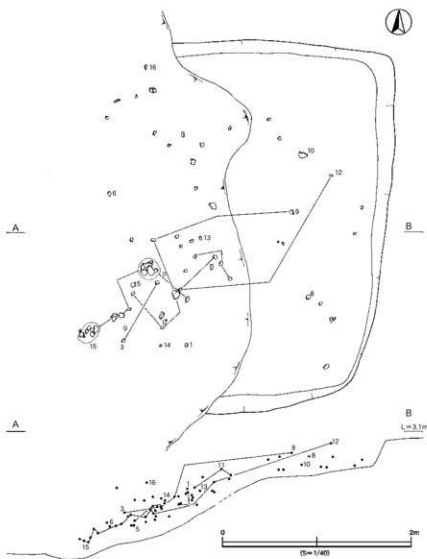
埋土観察ベルトを残しながら掘り下げ、硬化面が検出された段階で埋土の記録を行い、その後全体的に床面を検出した。床は、中央部分が硬化していたが、中央付近にわずかに炭に由来する黒色土が堆積しているが、赤化などは認められない。ミニトレンチで硬化面の厚さを記録した後に硬化面を剥がして柱穴検出を試みたが、明確に柱穴を検出することが出来なかった。なお、竪穴住居跡は近世の崩落により床面が崩落していた。これは、硬化面を含めた埋土全てが同様に落ち込んだ為であり、本来は平坦な床面を有する竪穴住居跡であったことを物語る。つまり、崩落部分であってもこの住居内遺物として判断することが可能であると言うことである。これを前提として、遺物の整理作業を行った。

遺構内遺物は637点で、接合作業を経てこの内の16点を図化した。内訳は甕526点、壺は3点、高坏51点、埴28点、須恵器18点、小破片その他11点である。遺物の接合状況は、9や12などのように平坦部分と崩落部分とが接合している状況が認められる。

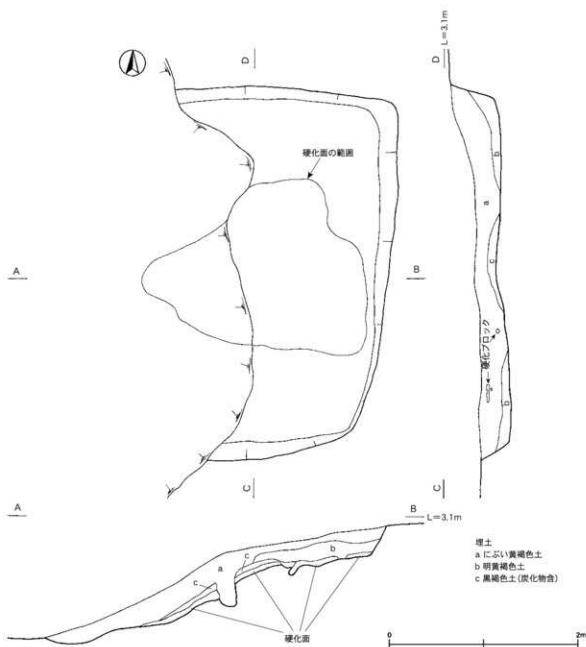
1は、口縁部が直行するが上端部分がわずかに反る。2は、口縁部がわずかに内傾している。15・16は、須恵器である。15は器台で、脚部を欠損する。16は甕であると考えられる。



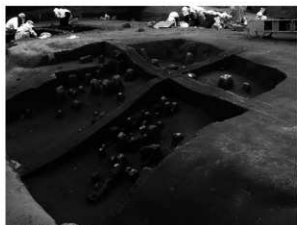
図版10 3号竪穴住居跡検出状況



第14図 3号竪穴住居跡内遺物出土状況



第15図 3号竪穴住居跡

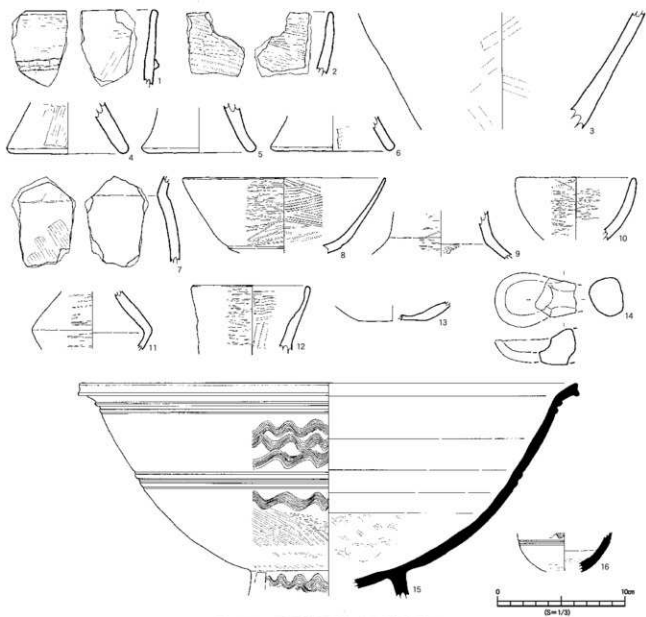


①遺物出土状況



②埋土の状況

図版11 3号竪穴住居跡検出状況



第16图 3号竖穴住居跡内出土遺物実測図



图版12 15出土状況

④ 4号竪穴住居跡

W-8・9区でⅢa層上面で検出された。東側を近世の水田耕作により削平を受け、全体像を検出することは出来なかった。

埋土観察ベルトを残しながら掘り下げていく過程で、北側の壁面付近に赤色粒子がまとまって検出されている。分析の結果は、第7章に示したとおりで、意図的な散布である可能性が考えられる。埋土の記録は、硬化面が検出された段階で行い、その後全体的に床面を検出した。床は、中央部分が硬化しており、中央付近に1カ所硬化面が赤化している部分があり、周辺の硬化面は炭化物が浸食して硬化面の表面を覆っている。この段階で、南側に浅い土坑が検出された。最終的に、ミニトレンチで硬化面の厚さを記録した後に硬化面を剥がして柱穴を検出して調査を終了している。この作業によりP1～P7が検出されたが、P4やP6は硬化面剥ぎ取り以前にプランを検出している。検出差が時期差なのかははっきりとしない。

遺構内遺物は、732点で接合作業を経てこの内の13点を図化した。総点内訳は甕572点、壺2点、高坏8点、埴17点、小破片その他133点である。なお、埋土中には生粘土も出土している。

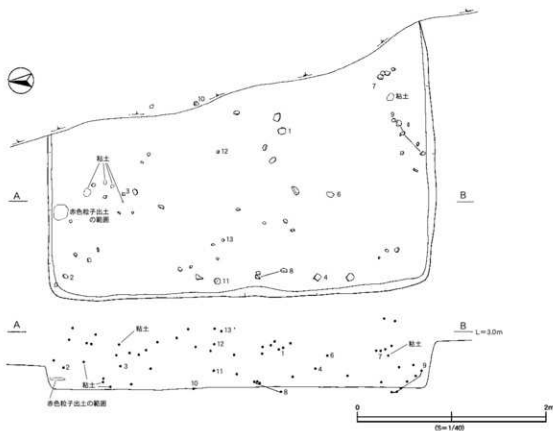


①検出状況

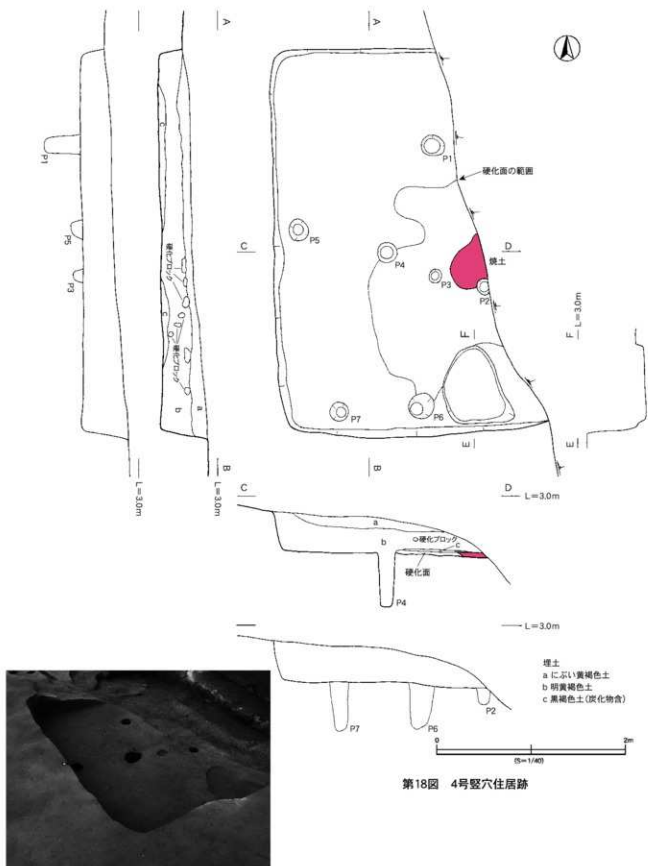


②赤色顔料出土状況

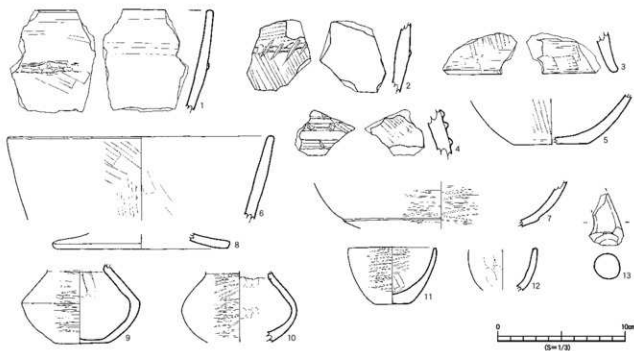
図版13 4号竪穴住居跡検出状況(1)



第17図 4号竪穴住居跡内遺物出土状況



図版14 4号竪穴住居跡検出状況 (2)



第19図 4号竪穴住居跡内出土遺物実測図

⑤ 5号竪穴住居跡

V-8区でⅢa層上面で検出された。上面の一部には近世溝状遺構が重なる。また、北側を近世の水田耕作により削平を受け、東側の一部は12年度調査区にかかり、全体像を検出することは出来なかった。当初は、2基の竪穴住居跡の切り合いを想定したため、ベルトと住居跡の軸とズレが生じている。遺物の取り上げは、小破片についても可能な限り番号を付けてトータルステーションを用いて取り上げを行っている。また、大きめの破片については、別に実測図化に努めた。なお、埋土に関しては現場でふるいにかけて微細遺物の検出などに努めた。床面の検出は、中心部分でミニトレンチなどを設定し、先行して硬化面を探っていた。面的に硬化面が検出された後に、床面精査を行い柱穴と思われる部分を検出した。硬化面の範囲を記録等を行ったあとで、硬化面を剥ぎ取り再度柱穴等の確認作業を行った。その結果、柱穴は8基検出された。この4基の底面には、白色粘土がやや硬化した状態で敷きつめられていた。このことから、柱穴の配置も考慮し、主柱穴はP1, 2, 4, 5の計4基を想定した。硬化面は、中央部分が最も厚い。また、住居跡中央部分には炭化物等の広がりが見られる。

5号竪穴住居跡内から出土した遺物は、3,837点で接合作業を経てこの内の62点を図化した。総点内訳は、甕2,121点、壺59点、高坏177点、埴104点、鉄製品1点、小破片その他1,375点である。第20図には、全点出土状況と掲載遺物の出土状況を掲載した。埋土中から満遍なく出土している様子がわかる。また、第21図には接合点数の

多かった6点の遺物について出土状況を掲載した。1~20は裏で、口縁部が直行ないしわずかに内湾する資料が多



①遺物出土状況

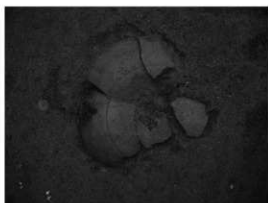


②鉄製品62出土状況

図版15 5号竪穴住居跡検出状況(1)



①29

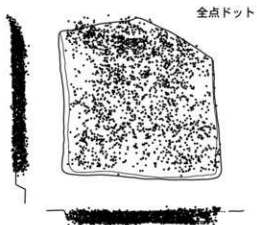


②38

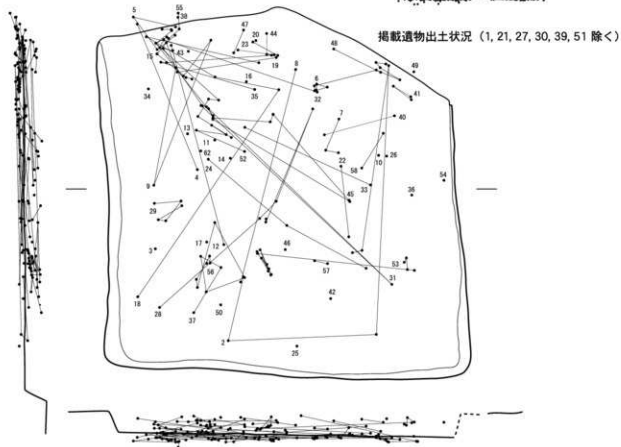


③53

図版16 5号竪穴住居跡内遺物出土状況

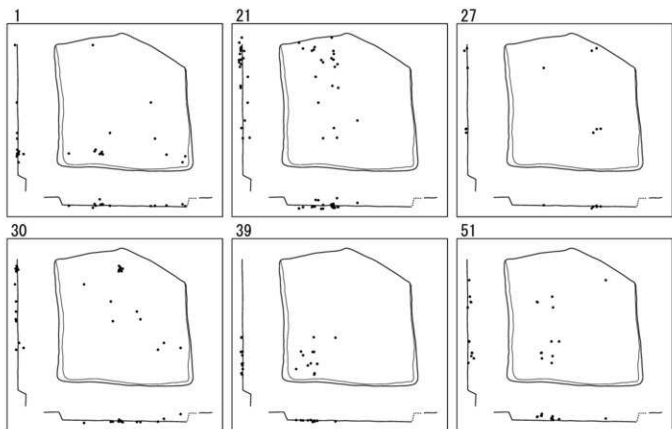


全点ドット



掲載遺物出土状況 (1, 21, 27, 30, 39, 51 除く)

第20図 5号竪穴住居跡内遺物出土状況①



第21図 5号竪穴住居跡内遺物出土状況②



①床面の状況



②柱穴検出状況

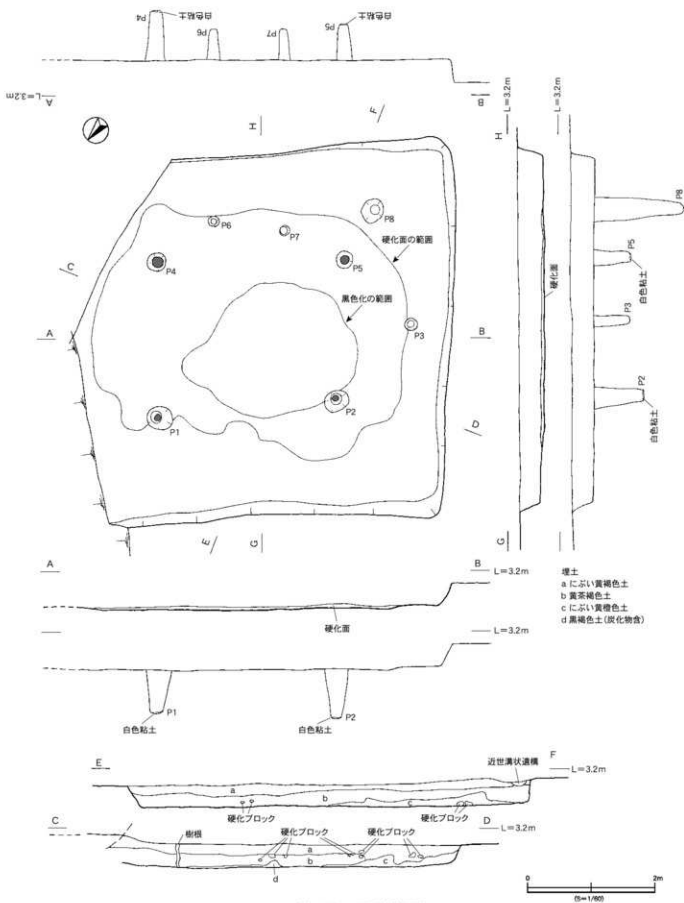


③柱穴半載状況

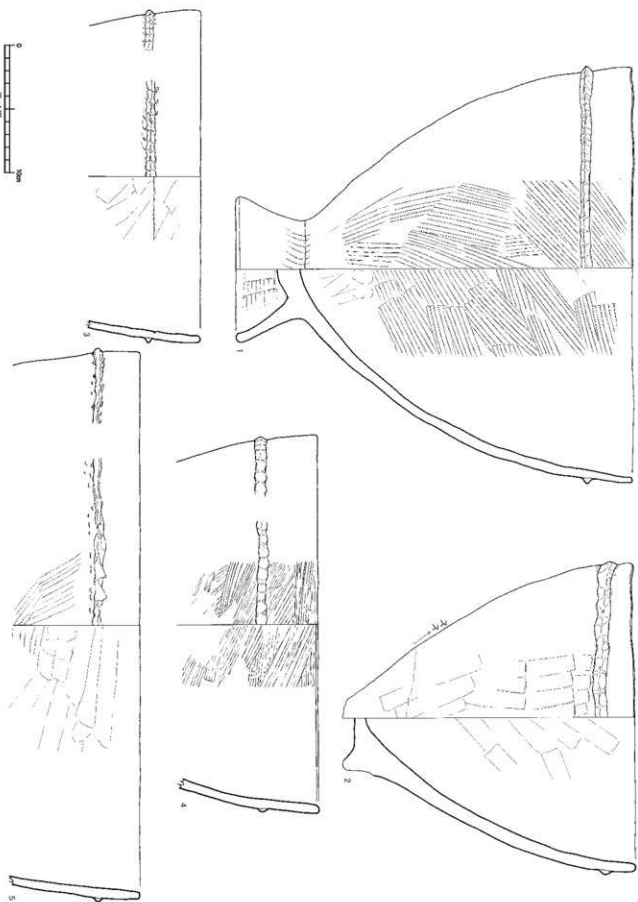


④柱穴完掘状況

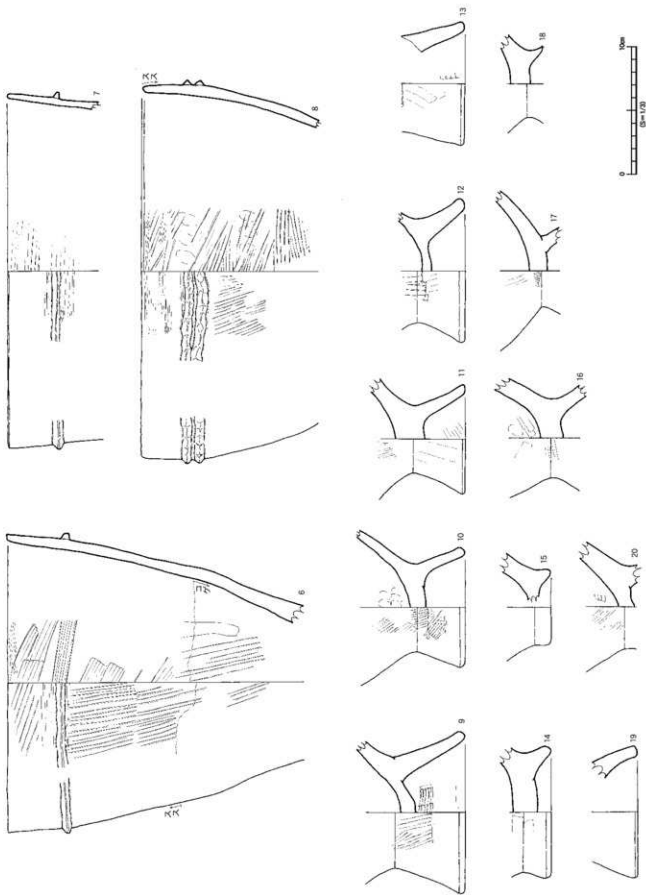
図版17 5号竪穴住居跡検出状況(2)



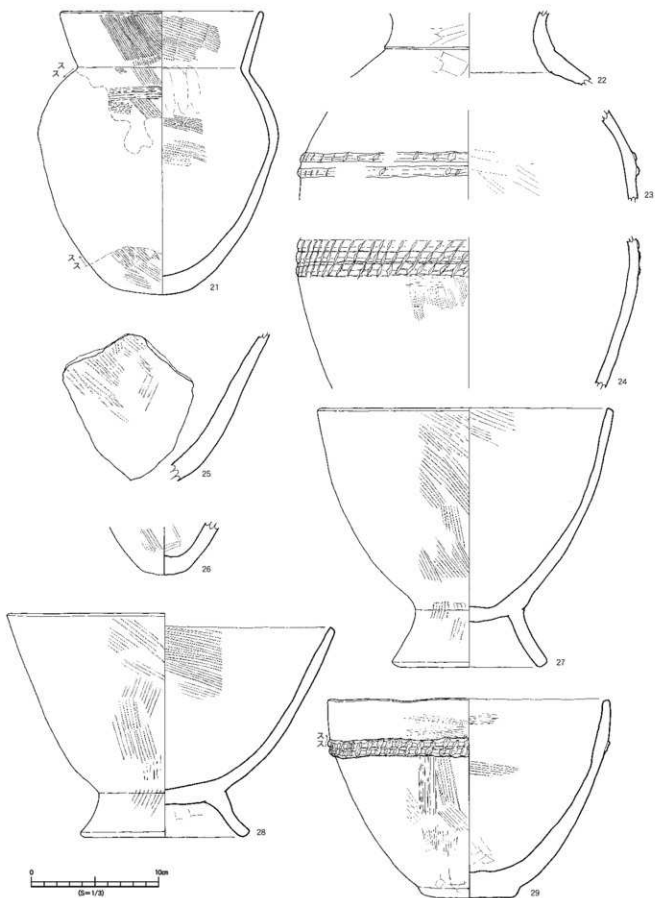
第22図 5号竪穴住居跡



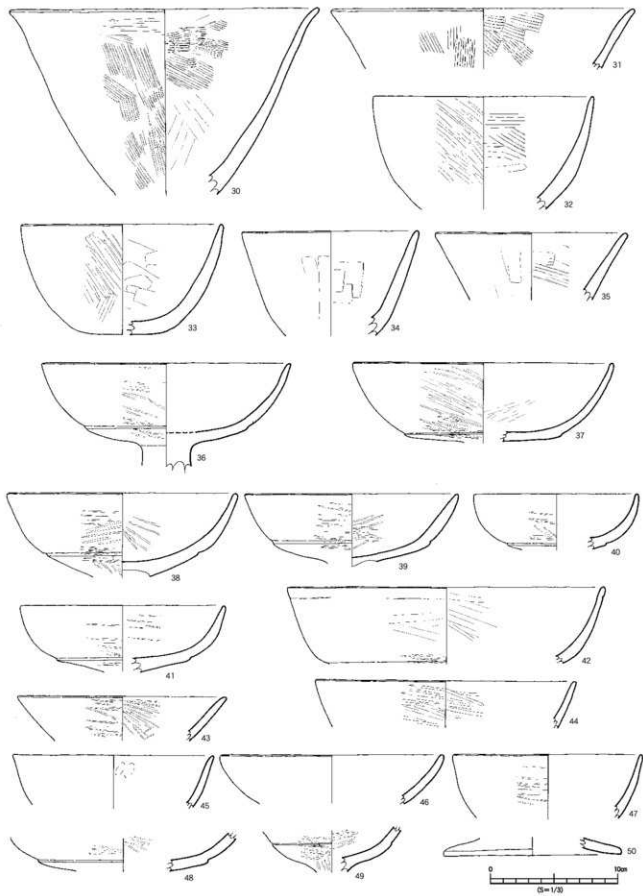
第23图 5号窑穴住居跡内出土遺物実測図①



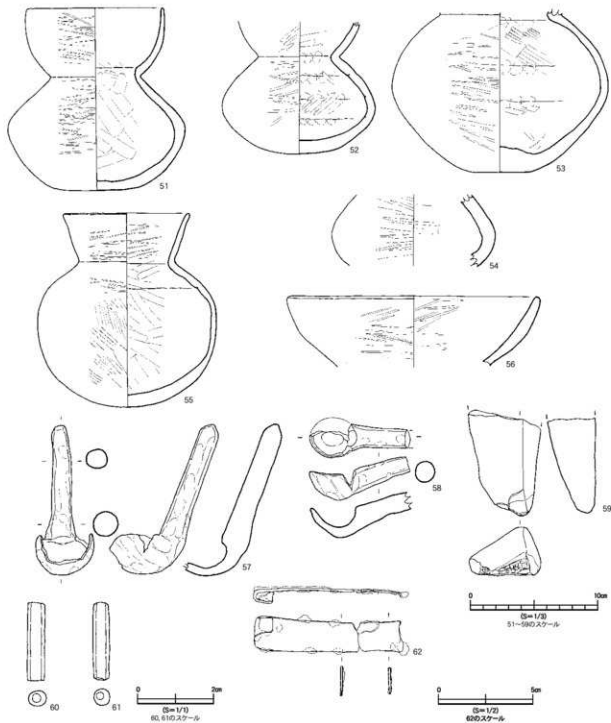
第24图 5号竖穴住居跡内出土遺物実測図②



第25图 5号竖穴住居跡内出土遺物実測図③



第26图 5号竖穴住居跡内出土遺物実測图④



第27図 5号竪穴住居跡内出土遺物実測図⑤

い、突帯の貼り付けは、指で突帯の上下を挟むように行われ、結果断面形が三角形状を呈している。ただし、摘み痕やその際器面に爪が触れた痕跡などをそのままに残している資料も多い。21は丸底甕である。器面に剥落が目立つ。29は、脚を有しない鉢であるが、器壁が厚く重量感がある。52は、二次焼成を受けているのか、あるいは指宿色なのであろうか、桃色に変色している。粘土紐の積み上げ痕が内面に顕著に残されている。57は匙形土

製品である。匙部の先端を欠くがほぼ完形品である。62は、図版15-②の状態出土した鉄製品である。いわゆる摘鎌で、折り返しの状態を見ると、刃部が比較的に長い状況が考えられる。

⑥ 6号竪穴住居跡

U・V-9区のⅢa'層において検出された。検出上面には、近世溝状遺構が重なる。プランは5.9m×5.4mの方形であり、比較的大型である。軸は、ほぼ東西南北と一致しており、平面形は略方形である。特筆すべきは、硬化面と炭化物のシミが2面検出されたことであろう。これは、2時期にわたって生活が営まれていたためと考えたが、上下間で遺物は接合する。このため、極めて短期間の時間差しかないと考えられる。

上の硬化面は、遺構検出面から約20cm下で検出されている。硬くしまり、酸化鉄斑を見る。土器のほか炭化種子などが出土した。南側の壁に沿うようなかたちで、溝状の掘り込みがみられた。この遺構の底部付近で高坏の破片が多く出土した。

下の硬化面は、上の硬化面より約50cm下方で検出されている。特徴的なものは、生粘土塊が4箇所から出土したことである。中央付近は炭化物のしみ込みが特に濃く、掘り鉢状の堆積を見せるとともに焼土も検出されている。また、南側には楕円形を呈した長軸約95cm深さ約30cmの土坑がある。遺構内から土器片と生粘土が出土している。また、土坑と隣接する地点で数個の礫が出土している。床面の南側でまとまって出土しているが、被熱の痕跡や敲打痕がわずかに認められる資料等が含まれている。いずれも棒状で表面はスベスベとしている。これらについて、礫の計測は表1に示している。

ピットは9基検出できた。このうちP1, 3, 8の底面には白色砂質土が突き固められるようにして堆積していた。この状況は、隣接する5号竪穴住居跡と同様である。6号竪穴住居跡内から出土した遺物は、5,061点で接合作業を経てこの内の90点を図化した。内訳は壺1,130点、壺30点、高坏140点、埴86点、小破片その他3,675点である。また、モモ核が1点出土している。1から42は裏である。突帯は積み上げによる断面三角形状を呈する資料が多いが、中には、2のようにヘラ状工具によるキザミ



②遺物出土状況



③床面検出状況1



④床面検出状況2



①検出状況



⑤完掘状況



第28図 6号竪穴住居跡内遺物出土状況

表1 6号竪穴住居跡内出土礫計測表

番号	重量(kg)	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備考
1	0.36	7.9	6.9	4.4	欠損
2	0.78	13.6	7.6	7.3	欠損
3	0.54	14.8	9.2	4.2	欠損
4	0.06	5.1	4.8	5.0	欠損
5	0.20	12.5	5.0	4.0	
6	0.35	15.7	4.3	3.2	欠損
7	0.50	14.2	6.7	4.0	
8	0.52	16.8	5.3	4.6	敲打痕
9	0.40	13.2	6.1	3.9	
10	0.57	14.0	6.2	4.6	
11	0.40	16.0	5.1	3.7	
12	0.87	15.5	11.7	3.2	敲打痕
13	0.46	14.2	6.4	4.4	敲打痕
14	0.65	18.8	6.5	4.1	
15	0.64	16.3	6.1	4.3	
16	0.57	18.7	6.1	4.9	
17	0.34	15.8	5.4	4.7	

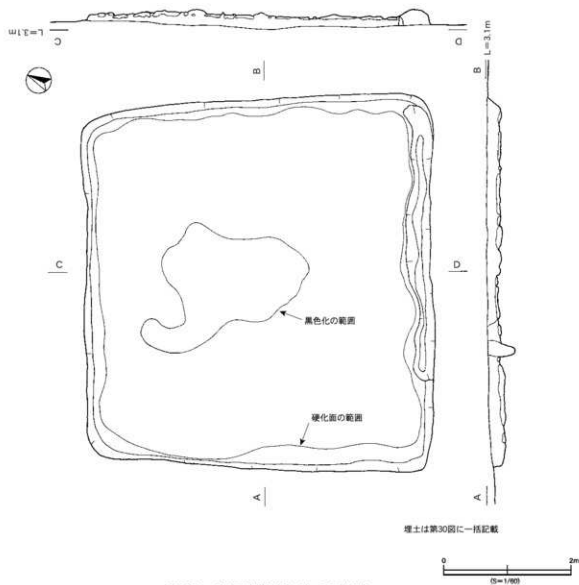


図版19 6号竪穴住居跡内の礫集中

を有する資料もある。1・4は、突帯貼付の始まりと終わりとはわずかにズレている。11は粘土接合部分に突帯を貼り付けている状況が観察出来る。25・26は口縁部から胴部にかけての資料である。形状から丸底を呈するものと思われる。64~66は高坏であるが、皿部下の段が確認出来ない。73~75は埴でも小型の部類に属する。86は、棒状礫で先端部が敲打により平坦面が形成され、被熱に

より赤化している。88は、全体的に摩滅しており、側面には長軸に直行する擦痕が稜線部分に観察される。89は、砂岩製の砥石である。礫の各面に研ぎ面が観察出来る。

①上の硬化面



第29図 6号竪穴住居跡（上の硬化面）



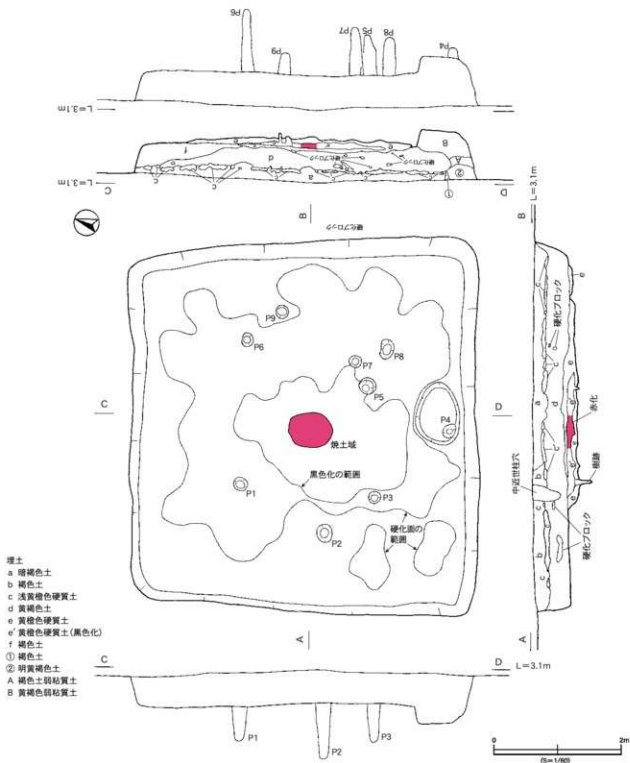
①中央部分



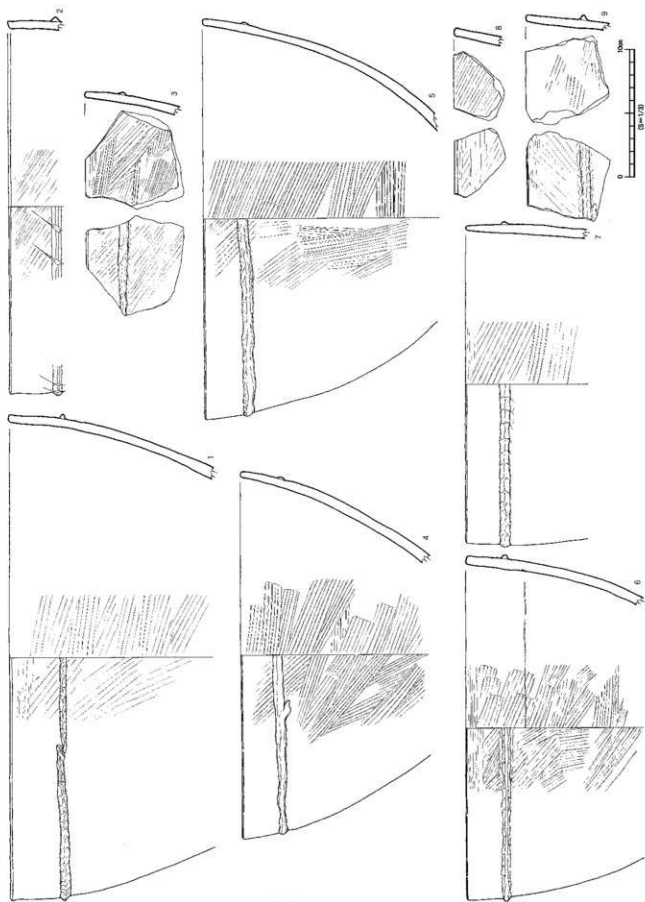
②断面A-Bライン

図版20 6号竪穴住居跡硬化面の状況

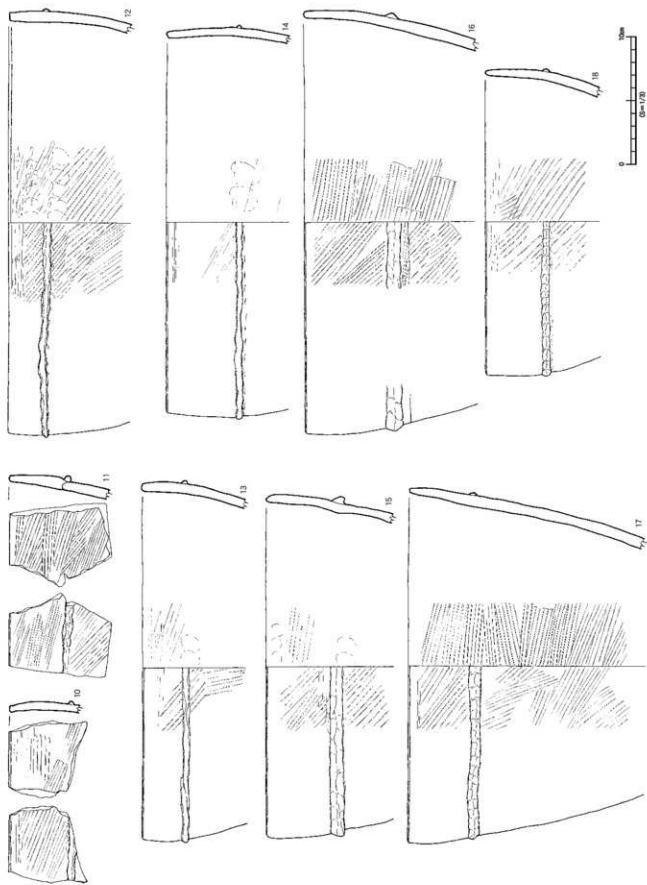
①下の硬化面



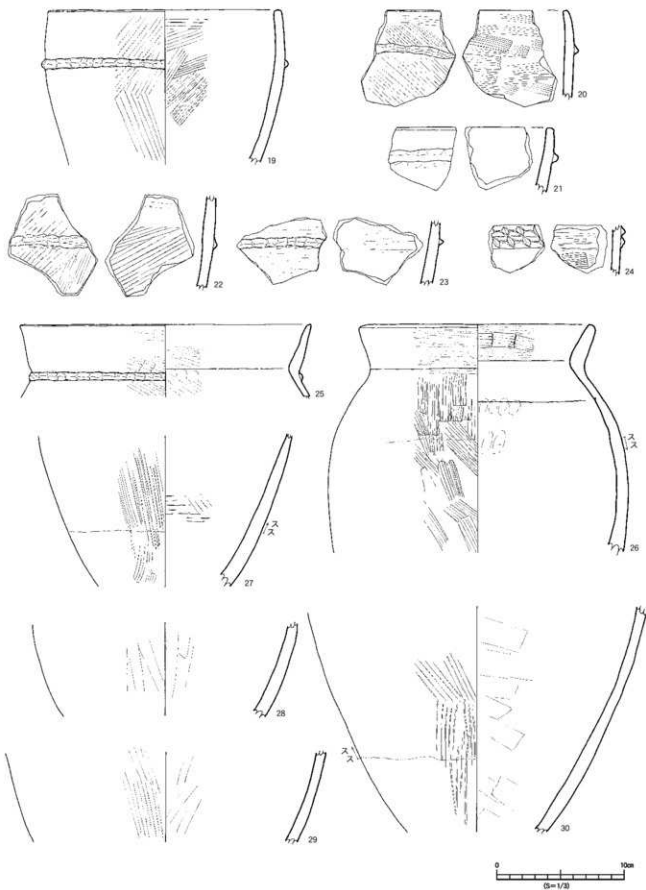
第30図 6号竪穴住居跡(下の硬化面)



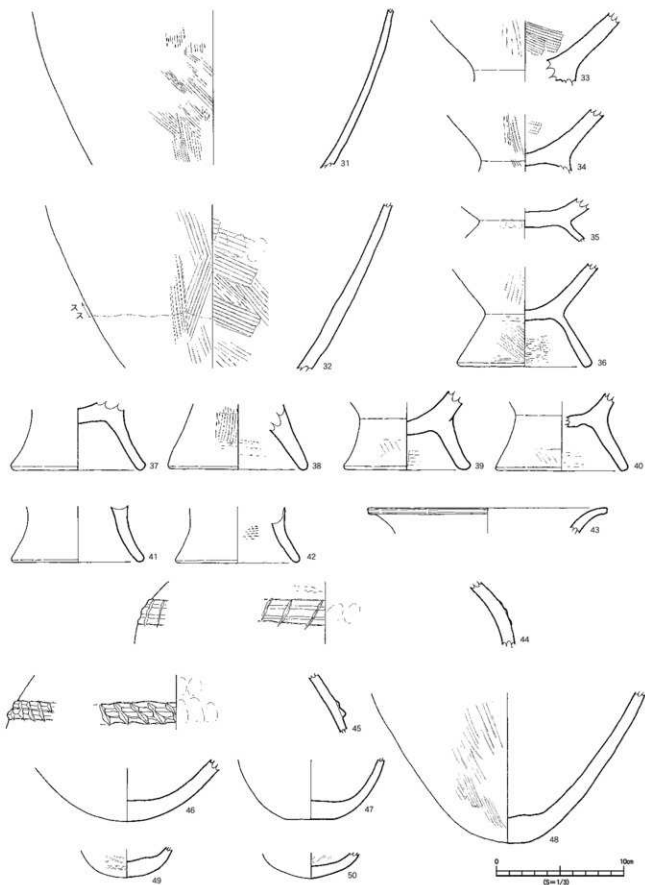
第31图 6号竖穴住居跡内出土物実測図①



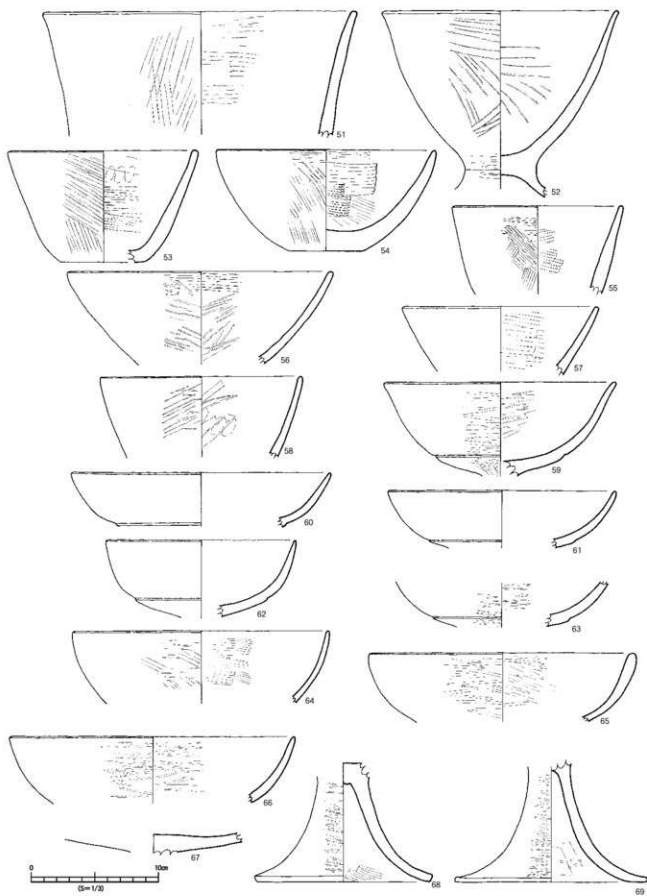
第32图 6号竖穴居跡内出土物実測图②



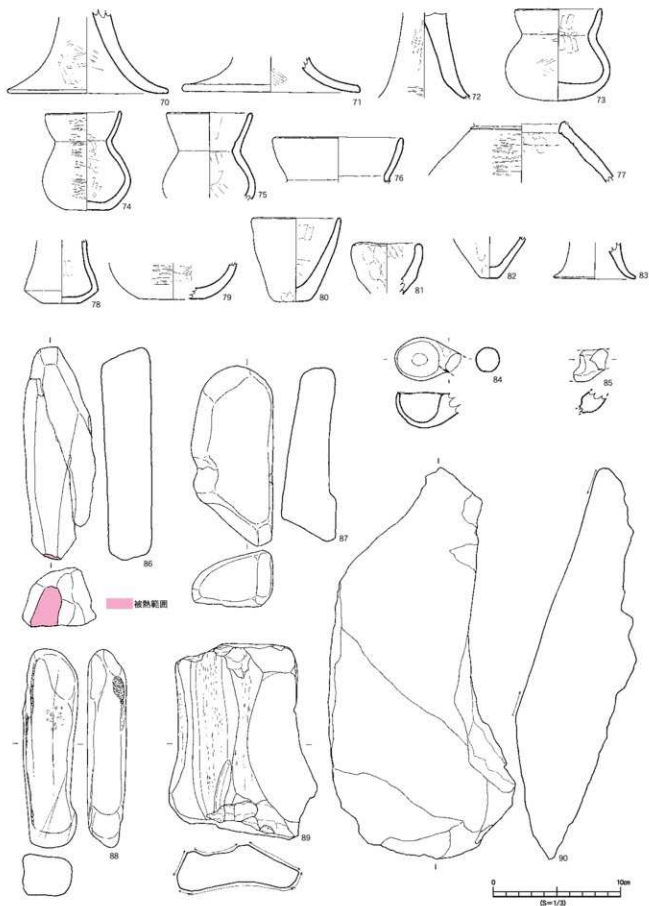
第33图 6号竖穴住居跡内出土遺物実測図③



第34图 6号竖穴住居跡内出土遺物実測図④



第35图 6号竖穴住居跡内出土遺物実測図⑤



第36图 6号竖穴住居跡内出土遺物実測図④

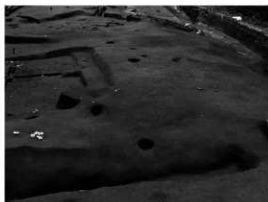
⑦ 7号竪穴住居跡

T・U-9区でⅢa層上面で検出された。北側の一角が近世・近代の溝状遺構に、南東側の一角が8号住居跡に切られているので完全な形では残っていない。最終的なプランは、3m×2.4mで床面の深さは検出面から約20cmであった。床面は、北東側が堅く締まっている様子が確認されたが、この部分以外ではそれほど硬化していない。そのため、ベルトに沿うかたちでミニトレンチを設定して再度床面の確認を行った。この作業により、下には他の硬化面はないことが判明した。また、住居跡床面東端には埋土中に炭化物がみられる土坑が検出された。この中には、礫が4点入りしており、被熱を受け、かつ敲打痕を有していた。

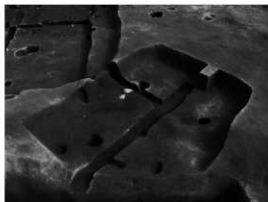
硬化面の範囲の記録を行った後に、硬化面を剥ぎ取り柱穴などの確認作業を行った。その結果、柱穴とみられるビットが4基検出された。竪穴住居跡のプランやビットの配置等から判断して、これらが主柱穴であると考えられる。

遺物は、検出面で小破片の状態で出土した。この遺物については、一括取り上げを実施した。この中には、甕・高坏・甗（小型丸底壺）などの一部も出土している。

7号竪穴住居跡内から出土した遺物は、140点で接合作業を経てこの内の5点を図化した。時期判断が行える資料は少なく、断定出来る状況にはないが、1のように口縁部が外反して、工具痕で外面に稜線を作り出しつつ上方へ掻き上げる特徴から他の住居跡内資料より先行するものと思われる。この点は、8号竪穴住居跡との切り合い関係からも違和感はない。

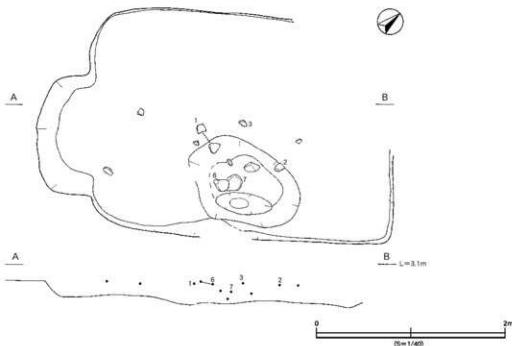


①検出状況

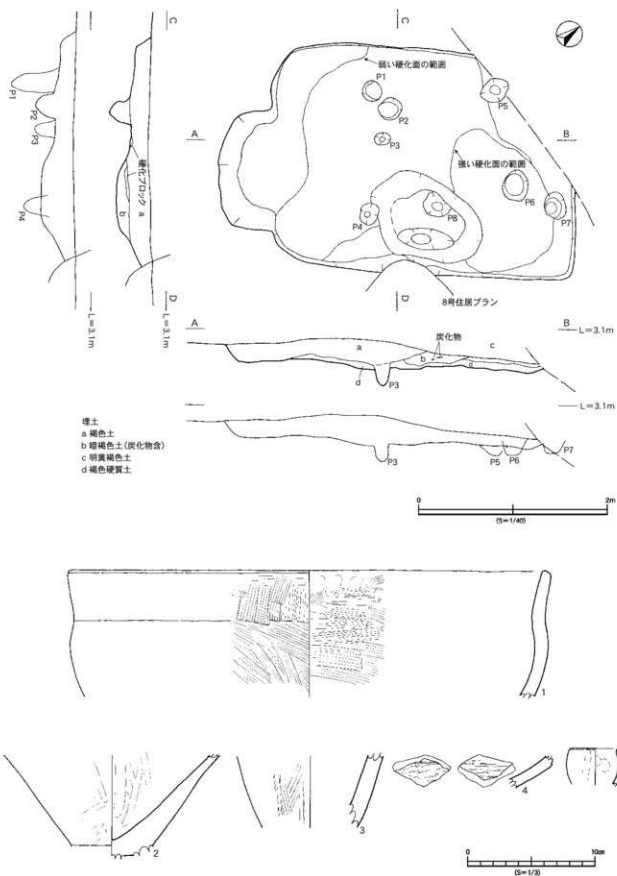


②完掘状況

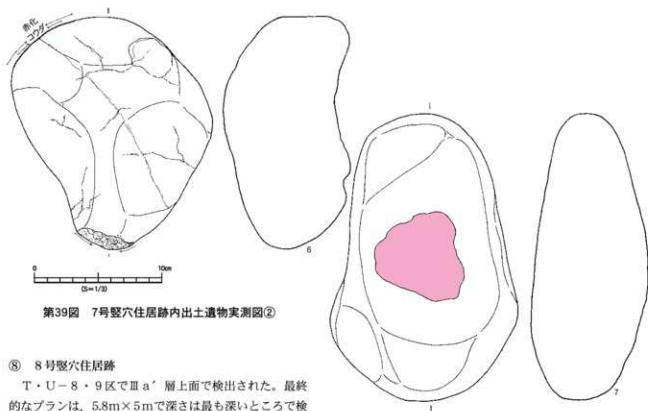
図版21 7号竪穴住居跡検出状況



第37図 7号竪穴住居跡内遺物出土状況



第38図 7号竪穴住居跡・7号竪穴住居跡内出土遺物実測図①



第39図 7号竪穴住居跡内出土遺物実測図②

⑧ 8号竪穴住居跡

T・U-8・9区でⅢa'層上面で検出された。最終的なプランは、5.8m×5mで深さは最も深いところで検出面から45cmであった。また、西側には幅30cmほどのやや高い張り出しがある。張り出しと床面の段差は約10cmであった。

遺物は小破片の状態で多量に出土し、これらは土層ベルトで区画された4つの区画で一括取り上げを実施した。この中には、甕・高坏・埴（小型丸底甕）などの一部もある。床面は、検出面から約20cm掘り下げた段階では確認できず、ベルトに沿うかたちでミニトレンチを設定して再度確認を行った。この作業により、硬化面の存在と広がり が判明した。また、床面の広がりについても明らかとなった。

硬化面の状況は、中央部分が最も厚く硬化しているが、床面のほとんどは硬化面が占めている。また、住居跡中央部分には小型丸底甕とともに焼土や炭化物などがみられ、火を使用した痕跡が顕著に残されていた。硬化面の範囲の記録を行った後に、硬化面を剥ぎ取り、柱穴などの確認作業を行った。その結果、柱穴とみられるものが7基検出された。竪穴住居跡のプランやピットの配置等から判断して、これらが主柱穴であると考えられる。

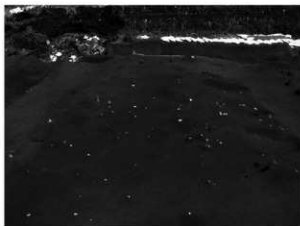
ベッド状遺構にも、中央部よりは弱い硬化面がみられた。ここでも硬化面の剥ぎ取りを行った。その結果、硬化面の下から鉄片が出土している。竪穴部の拡張などを想定して、調査を行ったが竪穴住居跡との関係は掴むには至らなかった（第44図35・36）。

床面南側端には、80cm×80cm、床面からの深さ25cmの土坑が検出された。ただし、中近世のピット2基に切ら

れているため、完全な状態ではない。この中には、ほぼ完形の11と11個の饅の他に、生粘土塊・高坏・埴（小型丸底甕）などの一部が入っていた。この中で、特に粘土塊については、水を加えると溶けてしまうため、未焼成の生粘土であろうと思われる。

なお、住居跡内北西側のコーナーは7号住居と切り合っており、8号が7号を切っていた。

8号竪穴住居跡内から出土した遺物は、2,147点で接合作業を経てこの内の34点を図化した。内訳は甕534点、壺24点、高坏157点、埴43点、鉢78点、小破片その他1,311点である。



図版22 8号竪穴住居跡検出状況(1)

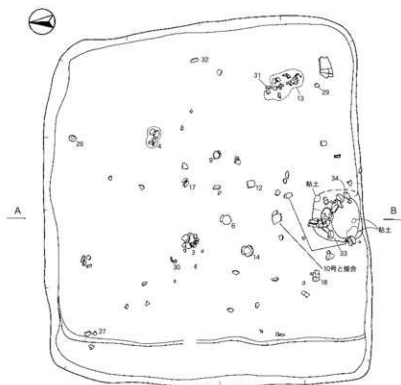
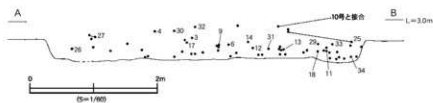


表2 8号竪穴住居跡内出土礫計測表

番号	重量 (kg)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	備考
1	0.58	17.7	6.9	4.5	
2	0.36	12.4	5.8	4.3	
3	0.58	14.7	6.2	5.0	
4	0.66	14.2	8.4	4.6	
5	0.38	13.8	4.6	3.4	敲打痕
6	0.10	7.4	3.3	3.4	敲打痕
7	0.71	16.1	7.7	5.6	
8	0.60	12.3	9.4	5.5	
9	0.63	11.8	6.8	5.7	敲打痕
10	0.76	13.6	6.6	5.9	
11	0.48	13.1	6.4	5.0	敲打痕
12	0.83	13.8	7.2	5.7	



第40図 8号竪穴住居跡内遺物出土状況

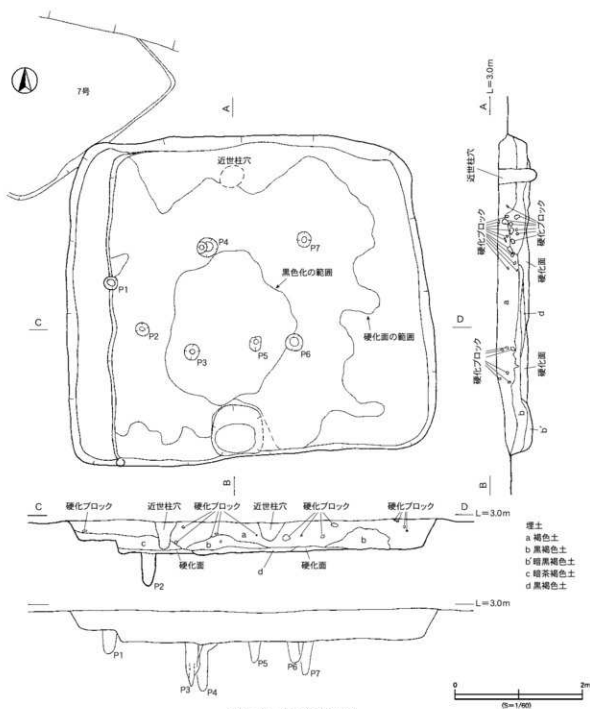


①床面の状況



②土坑内の礫

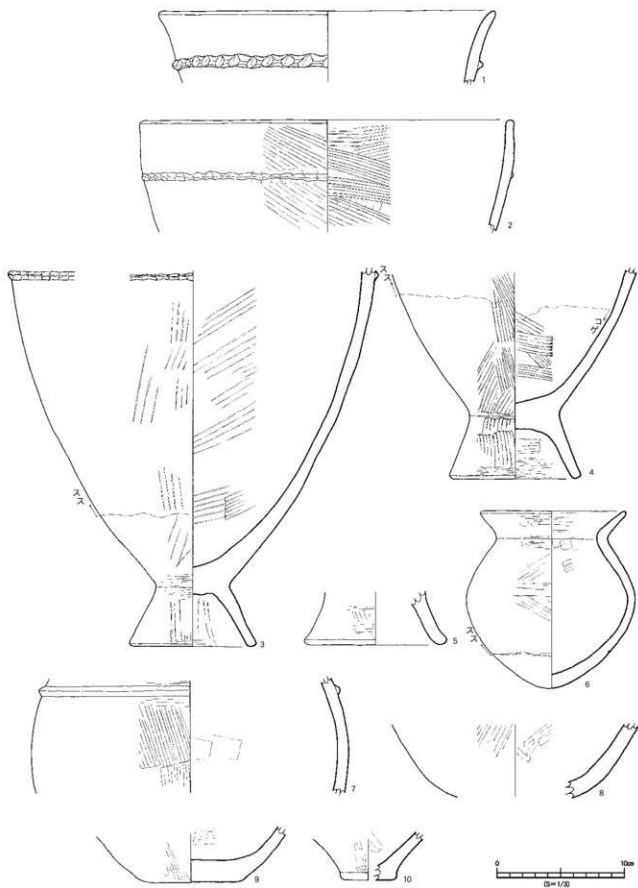
図版23 8号竪穴住居跡検出状況 (2)



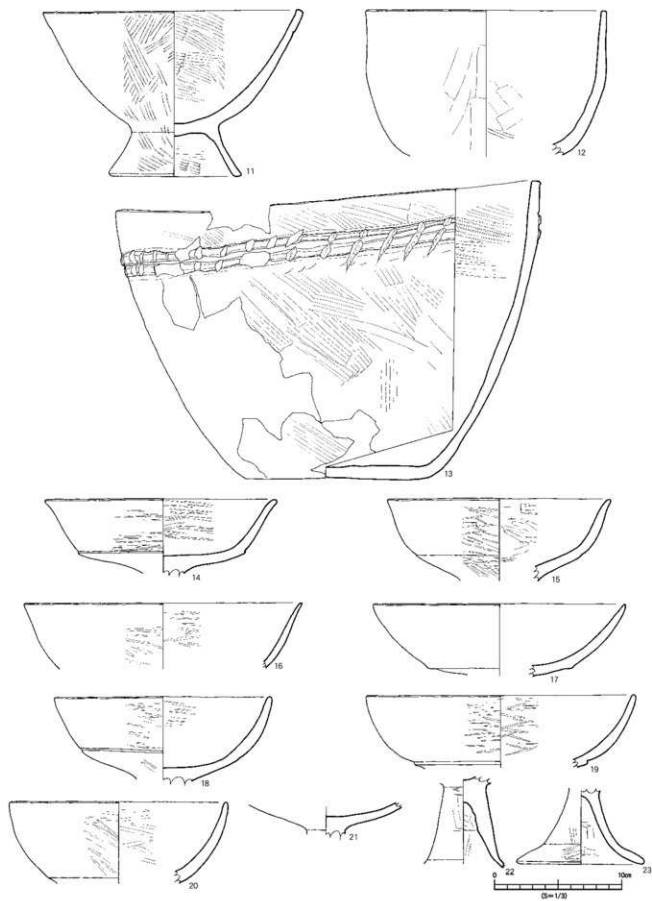
第41図 8号竪穴住居跡

1は口縁部が外反する資料で、内面の稜は認められない。4は、外面のスズと内面のコゲとのラインが一致している。6が、竪穴住居跡中央部分から出土した。口縁部を部分的に欠くが、ほぼ完形品に近い。底部形態は丸底で、粘土の接合面を外面に残し、この部分から上位にはスズが明瞭に付着している。13は、大型の鉢形である。二条の突帯を一度に刻んでいる。14は、口縁部が外反する高

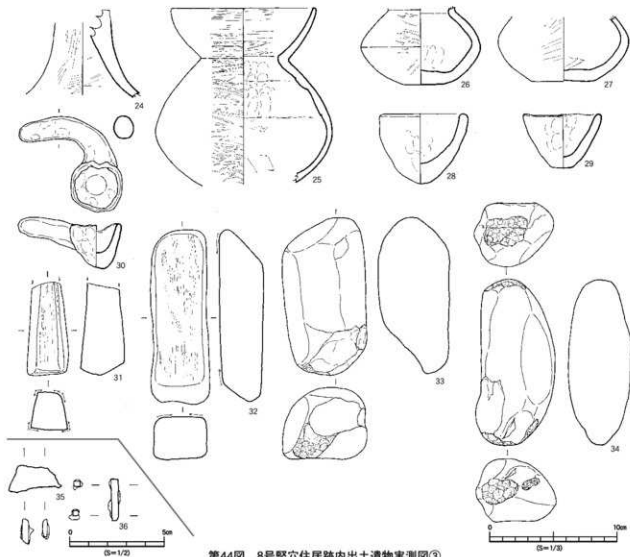
環である。14・17に関しては、皿部の段が明瞭に残されているが、15・20に関しては沈線も不明瞭である。30は埋土中から出土した匙形土石品である。握手部分が湾曲しており、特徴的な形状を呈している。31は砥石である。4面共に明瞭な光沢を有している。縦断面の形状を見ると、約半分を欠損してはいるが、中央にむけて急激に薄く、使い込んでいる様子がうかがえる。



第42图 8号竖穴住居跡内出土遺物実測図①



第43图 8号竖穴住居跡内出土遺物実測図②



第44図 8号竪穴住居跡内出土遺物実測図③

⑨ 9号竪穴住居跡

T-9区・Ⅲa層上面で検出された。最終的なプランは、2.1m×2.6mで深さは検出面からおよそ30cmであった。埋土はⅢa'層に該当する。検出面で、中央部分に炭化物の広がりが認められた。調査は、中央に土層ベルトを設定して中央部分から床面を確認していった。床面は、特に中央部分にかけて硬化面が確認できた。硬化面の状況は、中央部分が最も厚く硬化している。

中央炉は、40cm×30cmプランの土坑内に、甕1を埋設していた。炉としての使用も想定出来る。なお、甕1の口縁部は、破砕して甕の内部へ落ち込んでいた。また、炭化物を含んだ黒褐色土は、この炉を中心に広がっている。柱穴は、4基検出された。P1・3・4は床面から20cm程度掘り込まれている。

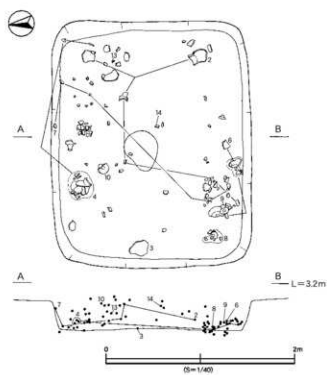
竪穴住居跡内から出土した遺物は、512点で接合作業を経てこの内の15点を図化した。特筆すべきは、図版25-①のように、床面付近で高坏がまとまって出土した点であろう。これらは接合し、2点の完形品と4点の欠損

品となった。出土遺物の総点内訳は、甕369点、壺23点、高坏100点、埴10点、小破片その他10点である。

1は、やや器高の低い甕で指頭痕が多く残されている。突帯は、指を器面に押しつけるように貼り付けている。2は、胎土中に茶粒を多く含んでおり、他の土器片と異なる。



図版24 9号竪穴住居跡検出状況 (1)



第45図 9号竪穴住居跡内遺物出土状況



②遺物出土状況



③床面の状況



①高坏出土状況

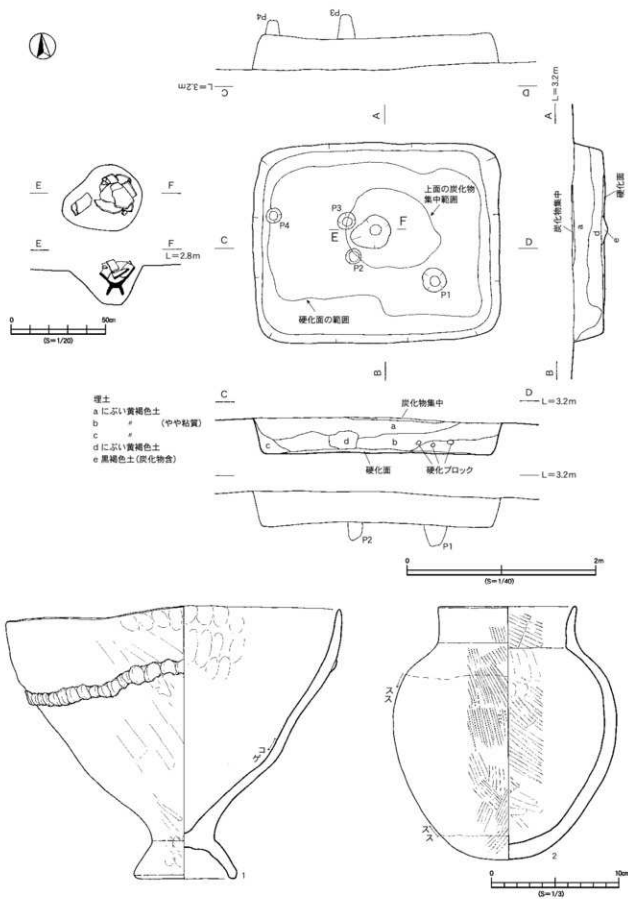


④4の出土状況

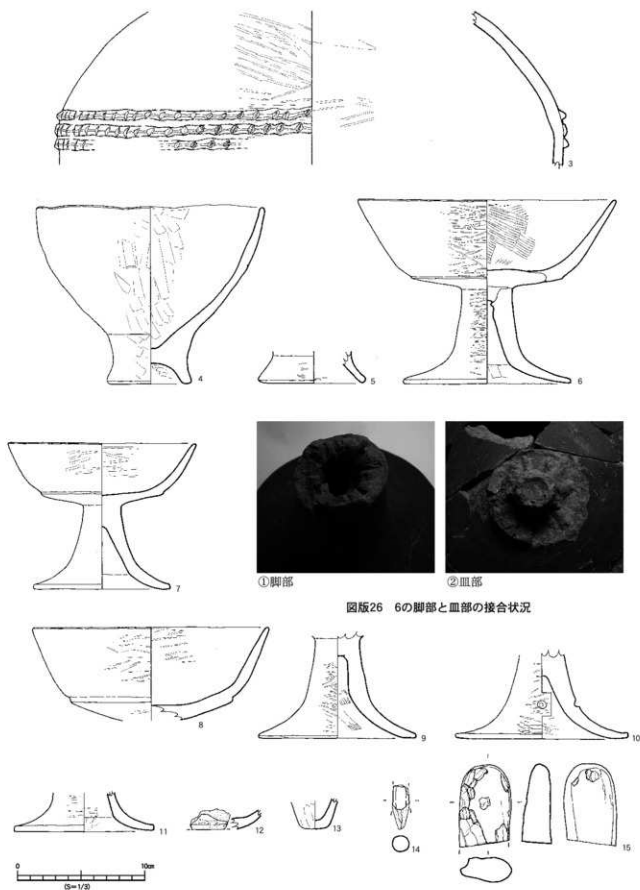


⑤中央出土の土器

図版25 9号竪穴住居跡検出状況 (2)



第46図 9号竪穴住居跡・9号竪穴住居跡内出土遺物実測図①



①脚部

②皿部

図版26 6の脚部と皿部の接合状況

第47図 9号竪穴住居跡内出土遺物実測図②

㊦ 10号竪穴住居跡

S・T-8・9区でⅢa層上面で検出された。最終的なプランは、6m×5.5mで深さは検出面から30cmであった。当初は、川にかけての落ち込みの可能性も考えられたために、土層ベルトは調査区に沿って設定し、掘り下げを進めていった。この過程で、遺物は小破片の状態で多量に出土し、これらは土層ベルトで区切られた4つの区画で一括取り上げを実施した。この中には、41の一部も出土している。床面等の確認は、ベルトに添うかたちでミニトレンチを設定して行った。この作業により、硬化面がわかり、床面と硬化面の広がり判明した。硬化面の状況は、中央部分が最も厚く硬化している。埋土中にも硬化したブロックが上下層を問わずに点在しており、竪穴外から流入していることがうかがえた。これが、床面の張り替えや上層構造、あるいは周提帯など、如何なるものにより生じたのかは捉えることが出来なかった。また、住居跡中央部分には焼土や炭化物等が見られ、特に、赤化はコンパクトに認められた。硬化面の範囲を記録等を行ったあとで、硬化面を剥ぎ取り、柱穴等の確認作業を行った。その結果、柱穴と思われるものは14基検出され、竪穴住居跡のプランなどから判断して、主柱穴はP3、4、9、11の計4基を想定した。

なお、住居跡西側のコーナーは近世の落ち込みによってわずかに崩落している。

10号竪穴住居跡内から出土した遺物は、一括遺物も含めて1,288点で接合作業を経てこの内の42点を図化した。総点内訳は、甕1,085点、壺15点、高坏60点、埴形62点、須恵器1点、小破片その他65点である。

1は、口縁部が直直し端部が反るタイプである。4については、内湾しつつ端部が反っている。7は、突帯が上下に見られるが、2条突帯というよりは、突帯の接合が上下にズレている可能性の方が高い。14については、種子圧痕が図版29のとおり確認されている。16~18は同一個体と思われるが、16・17については第51図のとおり



②遺物出土状況



③埋土の状況



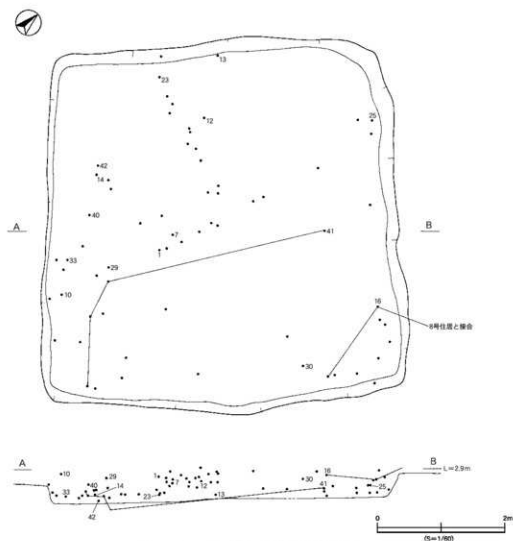
④完掘状況



①検出状況



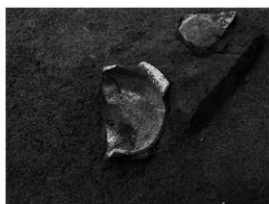
⑥人物対比



第48図 10号竪穴住居跡内遺物出土状況



①33

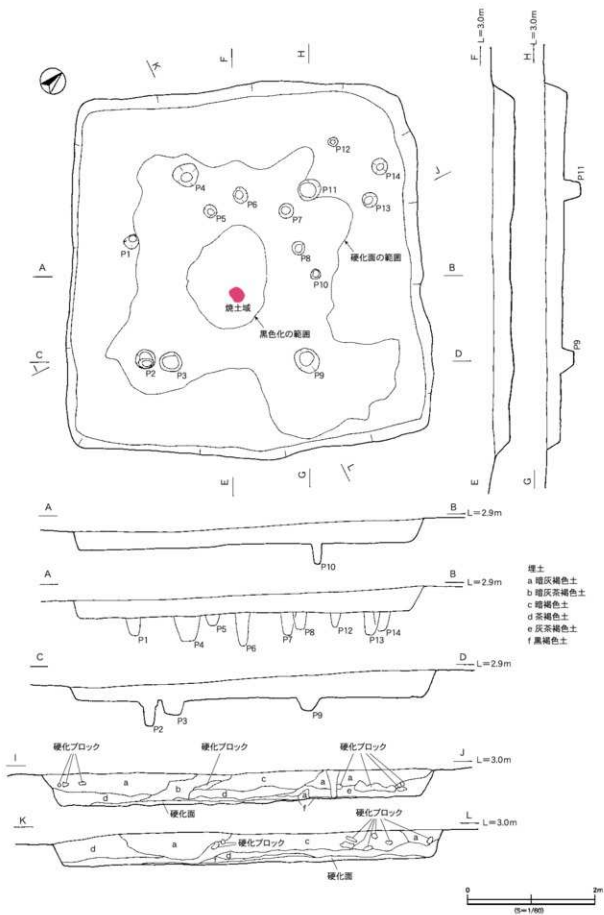


②41

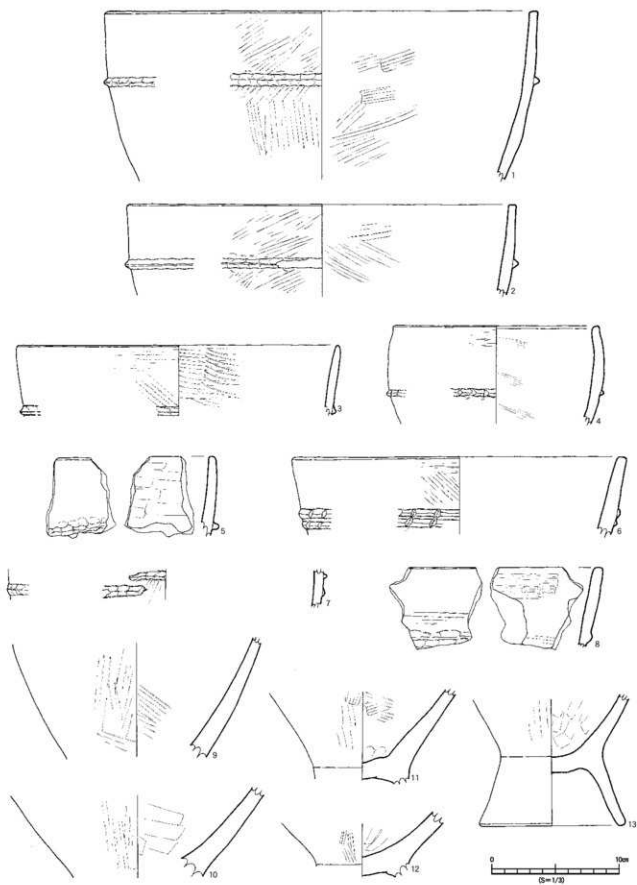
図版28 10号竪穴住居跡内遺物出土状況

8号と遺構間接合されている。23は皿形を呈する。包含層資料と比べると、やや厚手であるが、入念なヘラミガキが施されている。色調についても白色が強い。28は高坏の脚であるが、やや裾部が広い。33は、床面で潰れた状態で出土した完形品である。40は紡錘車の可能性が考えられる。41は、須恵器の取手付き鉢である。図版2に

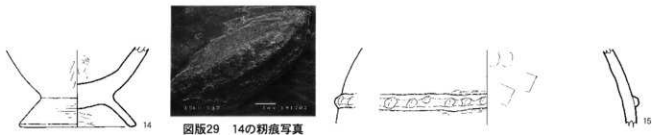
示してあるように、断面が暗紫色を呈する特徴が見られる。



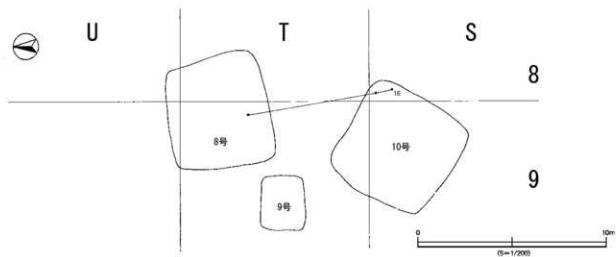
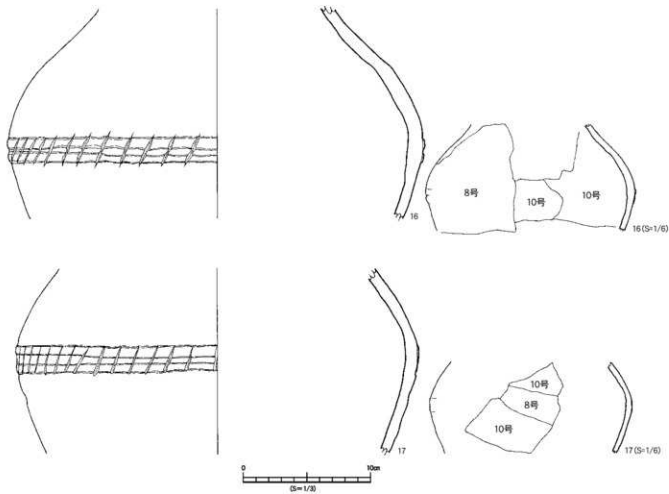
第49図 10号竪穴住居跡



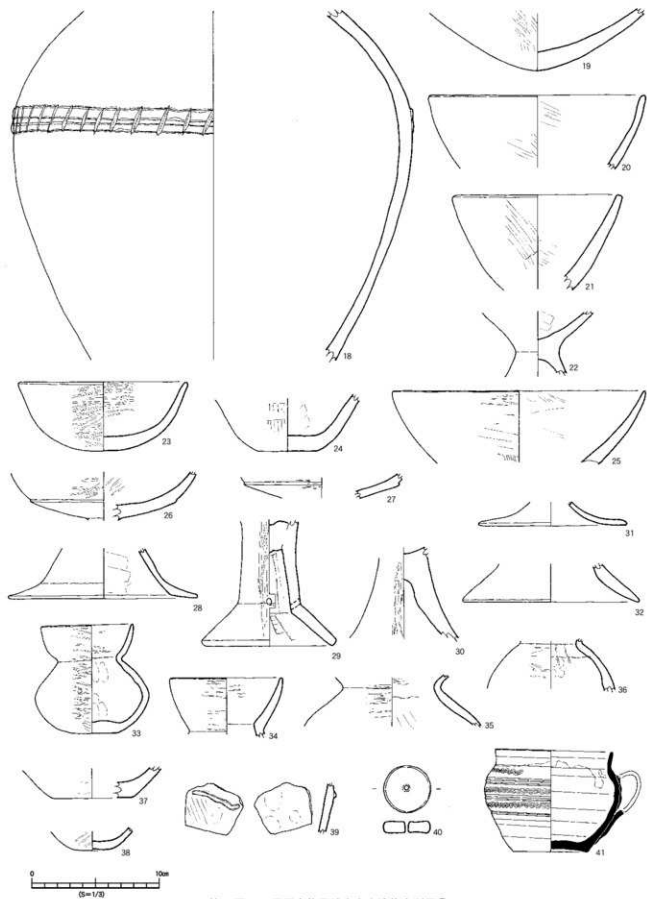
第50图 10号竖穴住居跡内出土遺物実測图①



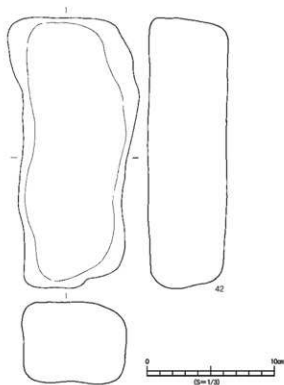
図版29 14の粉痕写真



第51図 10号竪穴住居跡内出土遺物実測図②・住居間接合の状況



第52圖 10号竪穴住居跡内出土遺物実測図③



第53図 10号竪穴住居跡内出土遺物実測図④

④ 11号竪穴住居跡

R-9区・Ⅲa層中で検出された。プランの半分以上が近世の落ち込みによって崩落しており、最終的なプランは確認できていない。唯一残存している東側の辺と後述する焼土・炭化物の範囲から、3.7m×3.7m程度のプランではないかと想定される。検出面はⅢa層であるが、他の住居跡と比べてⅢb層に近いレベルで行ったため、竪穴住居跡の深さは検出面から20cmであった。調査は、中央に土層ベルトを設定して中央部分から床面を確認していった。床面は、特に中央部分にかけて硬化面が確認できた。硬化面の状況は、中央部分が最も厚く硬化している。

また、東側には埴形土器（第54図1）の完形品が確認され、土坑状のプランも認められた。この土坑は、床面の硬化面を切り込むように感じられた。検出時には土坑が確認されなかったために、ほぼ同時期のものであると判断した。しかし、今回の調査ではより緻密な同時期性や切り合い関係などを示すことが出来なかった。この土坑内には、完形品で埴形土器が2点、高環の坏部1点の3点が重なって出土した。周辺の遺物の状況などから、これらの遺物は意図的に埋納されたものであると判断し、これらの性格を掴むために、土坑内の土と竪穴住居跡の土とを比較分析した。また、埴形土器内部の土に関しても、リン・カルシウム分析、ウォーターフローテーション

ンによる種子の検出、植物珪酸体分析等を行った。しかし、性格を掴む分析結果は残念ながら得られなかった（第7章参照）。

11号竪穴住居跡から出土した遺物は、183点で接合作業を経てこの内の11点を図化した。その内訳は、甕165点、壺3点、高環4点、埴形2点、小破片その他9点である。

1～3は土坑内出土資料である。当初1が横倒しの状態で検出され、ややズレた直下に2が、さらに3が各々接するように出土した。1については、口縁部内面に埋土が充填していたが、胴部内はほぼ空洞の状態であった（図版30-③）。



①遺物出土状況

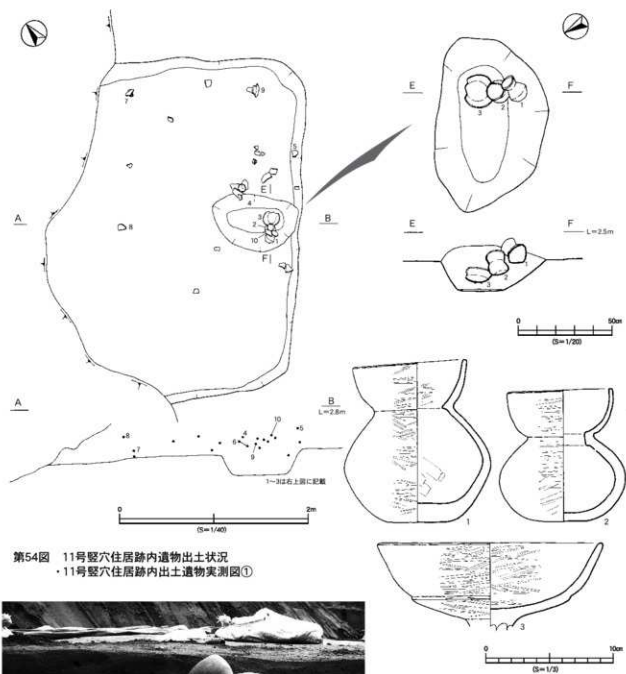


②完掘状況



③1内部への流入土

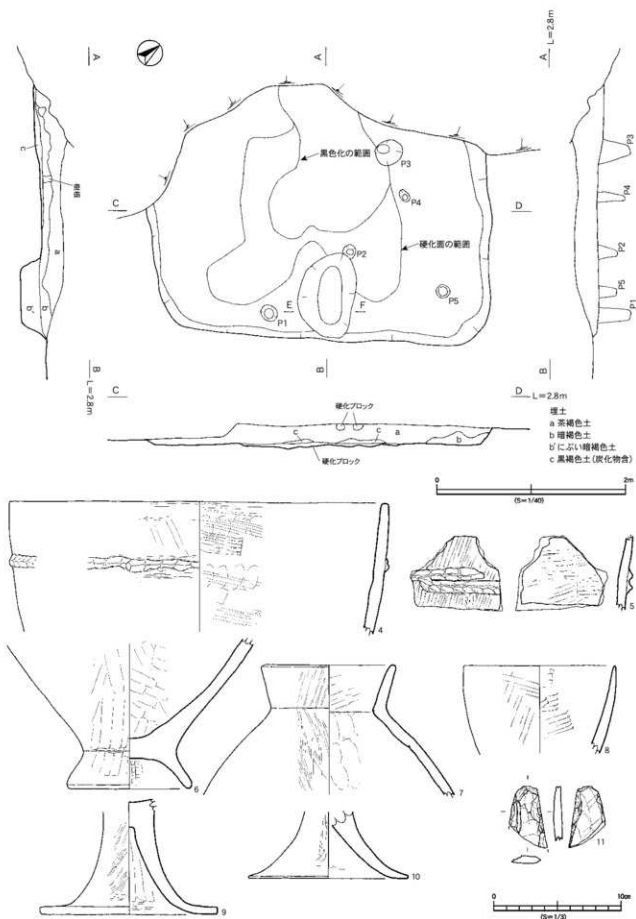
図版30 11号竪穴住居跡検出状況（1）



第54図 11号竪穴住居跡内遺物出土状況
・11号竪穴住居跡内出土遺物実測図①



図版31 11号竪穴住居跡検出状況 (2)



第55図 11号竪穴住居跡・11号竪穴住居跡内出土遺物実測図②

(2) 土坑

U-7区で1基が検出された。1は口縁部が直行するが、突帯上部外面がわずかに膨らんでおり内湾状を呈している。2は埴形の胴部片である。

(3) 土器埋納ピット

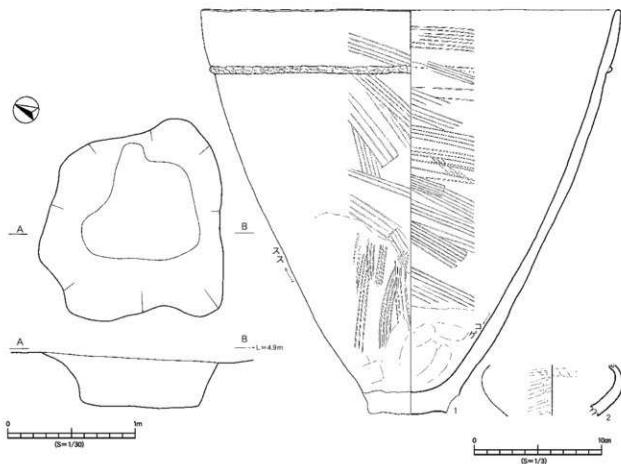
R-6区(P1)とS-9区(P2)で2基検出された。P1からは、1から8を図化した。遺物は、ピット検出と同じレベルで確認され、ピットの中位から下位にかけて遺物は出土していない。1は口縁部が直行する。2は、口縁部が外反し、胴部で屈曲して丸みのある胴部から丸底の底部へと移行する器形を呈する。外面には、入念なハケスが施され、内面にはケズリ痕が明瞭に残される。また、内面には粘土組の接合痕も観察される。P2からは、1から3を図化した。ピット検出レベルとほぼ同じレベルで遺物も確認された。ここに図化した3点は、いずれも検出面で確認されたものである。1は口縁部が外反し、口縁部下に段を有する。

(4) 焼土

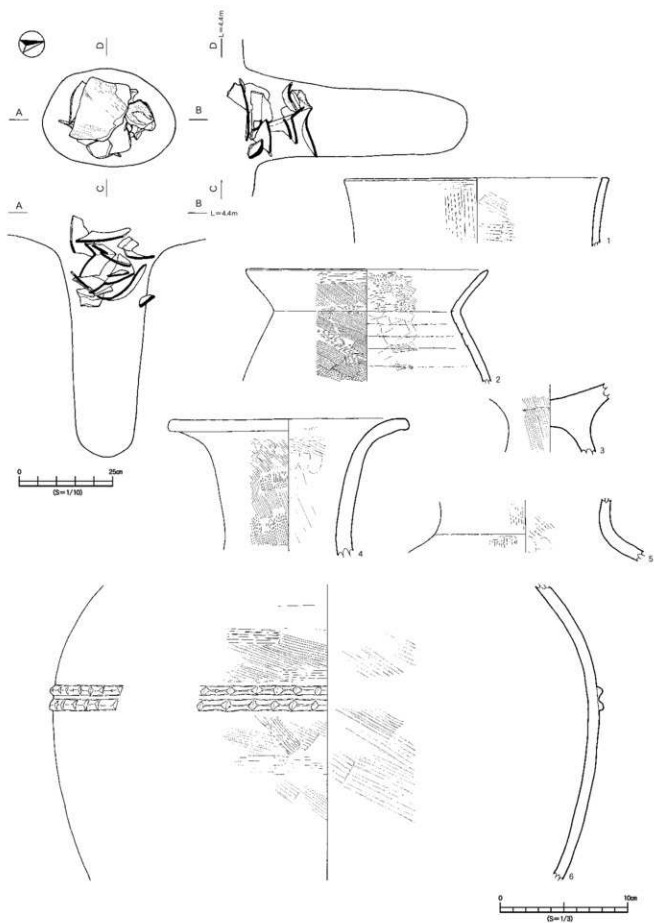
6号と7号竪穴住居跡間のU-9区で検出された。

(5) 礫集積状遺構

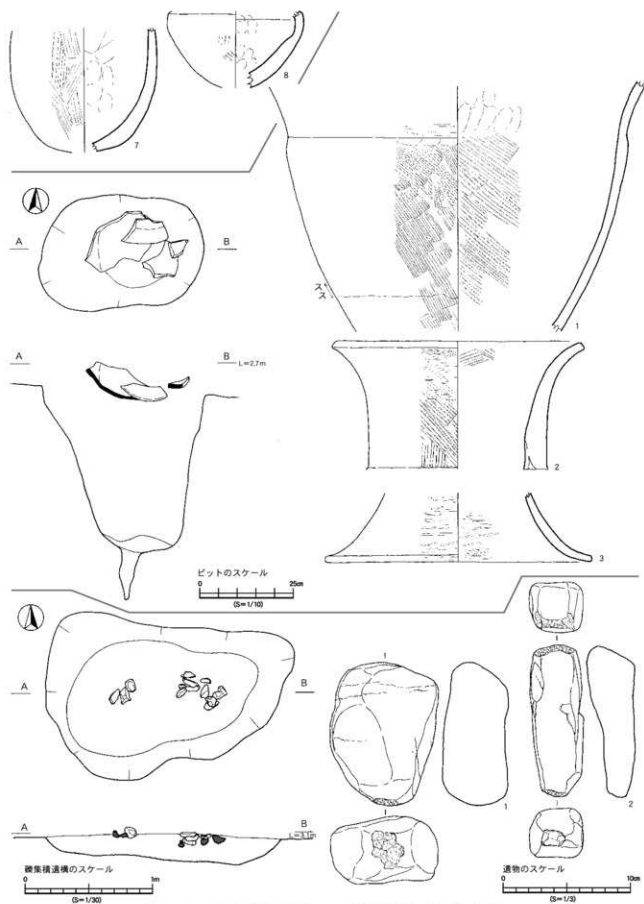
U・V-9区のⅢa'層において検出された。6号竪穴住居跡の北側約1mの所で検出した。不定形の土坑は長軸約2mで掘り込みは約25cmを測る。ごく希に炭を含む黄褐色の埋土の上面に礫が東西方向二箇所に分かれて13個あった。遺構の用途や性格は不明であるが、6号竪穴住居跡と8号竪穴住居跡の床面でも同様な礫の集積みられたことから関連性があるものと思われる。これら棒状礫の内、敲打痕が認められる資料があり、この内2点を図化した。この他に時期判断が出来るような遺物等は出土していないが、検出された層や周辺の状況などから竪穴住居跡と同じ時期であると判断し、ここに掲載した。



第56図 土坑および土坑内出土土器実測図



第57图 P1及P1内出土物实测图①



第58図 P1内出土遺物実測図②・P2, 被集積遺構内出土遺物実測図

第3節 遺物

(1) 甕 (第65図1～第70図52)

総点で5,251点が出土し、この内52点を図化した。章立ての関係から時期的に先行する1から4についてもここに掲載している。

脚部を有するものをA類、丸底を呈するものをB類と大別した。なお、A類に関しては口縁部が外反するものや直行するもの、あるいは内湾するものなどがあり、底部の形態に関しても脚部内面がU字状を呈するものや平坦なもの、逆U字状を呈するものなど細分が可能である。これらの観点で出土状況を吟味したが、明確な分布の差などを掴むことが出来ず、本報告ではこれらを一括して掲載している。

出土状況は、第59・60図にA・B類を掲載した。竪穴住居跡周辺部とJ・K-4区、B～D-4～6区という3つの集中域が認められる。

5・6は口縁部が外反し、胴部との境に突帯をめぐらせて屈曲し、胴部は膨らんで脚部へと至る器形を呈する。8は、胴部内外面にスズ等の痕跡が認められ、両者の境界線はほぼ一致している。9は、口縁部が強く外反する。口縁部内面にはコゲの範囲が横位にめぐる。10の胴部はやや丸みを呈する。16も9と同様の痕跡を残すが、底部に近い部分に認められる。23・26は1条突帯であるが、粘土紐の接合が上下に高さを違えているため、部分的に2条突帯を呈する。29・30は口縁部が内湾するタイプで、突帯を有しない。30～36は胴部片である。37～49は底部片である。底部は脚内面が平坦なもの、U字状を呈するもの、逆U字状を呈するもの3種類がある。

50～52は丸底になる一群(B類)である。51の外面の稜線ははっきりとしない。

(2) 壺 (第70図53～第72図75)

総点で、638点が確認されこの内23点を図化した。53から75が該当する。頸部がやや長いもの(53～55)と、外反して短いもの(56～61)、胴部・底部片(62～75)とに分けられる。

53は頸部との粘土接合面で剥離している。56は、胴部最大径よりやや上位に突帯をめぐらせる。57は口縁部がやや湾曲して外反する。口唇部がわずかに丸みを帯びている。62は2条突帯がめぐる。75は灰褐色系の色調で、調整がやや鋭い工具により調整されている。

(3) 鉢 (第72図76～第73図97・103～105)

総点で、56点が確認されこの内24点を図化した。脚部を有するもの(76・104・105)、平底のもの(77～79)、不安定な底部のもの(80)とに分けられるが、83～85はこの3者には属さない可能性がある。加えて、時期的には弥生時代後期の可能性が考えられる。

76は、わずかに欠損するがほぼ完形品である。当初は、方形の黒褐色プラン内であったため、遺構及び遺構内物の可能性も考えられたが、結果的には遺構ではなかったためにここに掲載した。口縁部は外反し、口唇部は外へ張り出して平坦面を有する。頸部は縦位の調整が強くは入り、胴部との境に工具痕のアタリを強く残す。胴部はわずかに膨らんで窄まり脚部へと至る。調整は幅の狭い工具痕を細かく残している。77から79は平底を呈する小型の鉢である。80は完形品で出土した丸底の鉢である。85は胴部下段を有して膨らむ。86・87は口縁部が内湾気味に丸みを帯びる。

(4) 高坏 (第73図98～102・106～116)

総点で452点が出土し、この内16点を図化した。98から103、106から116が該当する。皿部と脚部とが接合する資料は見られない。また、赤色顔料塗彩の資料が多いが、これらが剥落しているものや2次焼成を受けているものなどもある。また、内面が著しく摩耗しているものもあり、単に祭祀とは言いつけられない状況の資料もある。

(5) 埴 (第74図117～133)

総点で203点が出土し、この内17点を図化した。117から133が該当する。117は時期的に先行する可能性がある。119は頸部に粘土の接合面が見られる。119・120の胴部は丸みを呈するが、121から123は丸みを帯びつつも稜線が入る。131は大型のもので、あるいは壺形に分類した方がよいのかも知れない。

(6) 皿形 (第74図134～138)

総点で9点が確認され、この内5点を図化した。134は、内外面を丁寧に研磨した薄手の土器である。底部はわずかに平坦である。

(7) 土製品 (第74図139～154)

総点で25点が確認され、この内16点を図化した。この中には、手捏土器や小形土器を含み、匙形土製品もここに分類した。

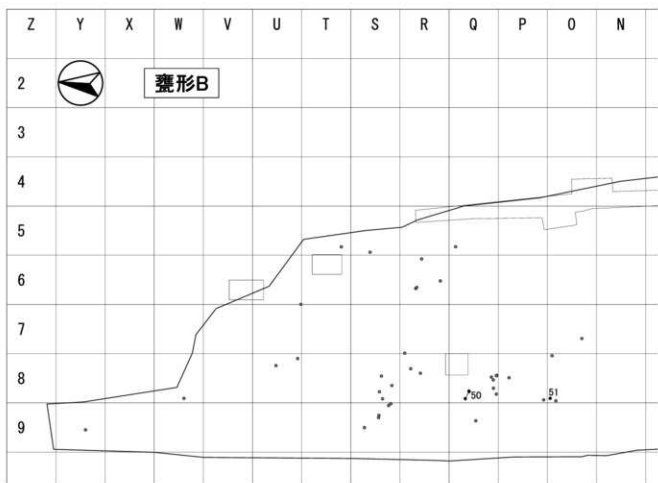
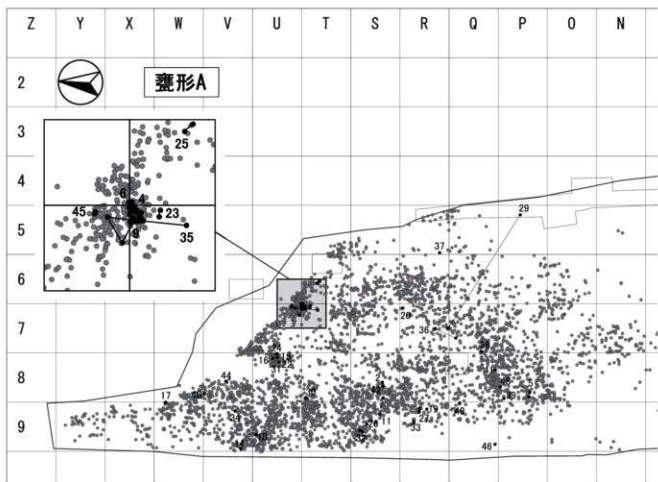
139から142は脚部を有する。143から148は平底を呈し、149は底部が尖る。

(8) 須臾器 (第75図155～159)

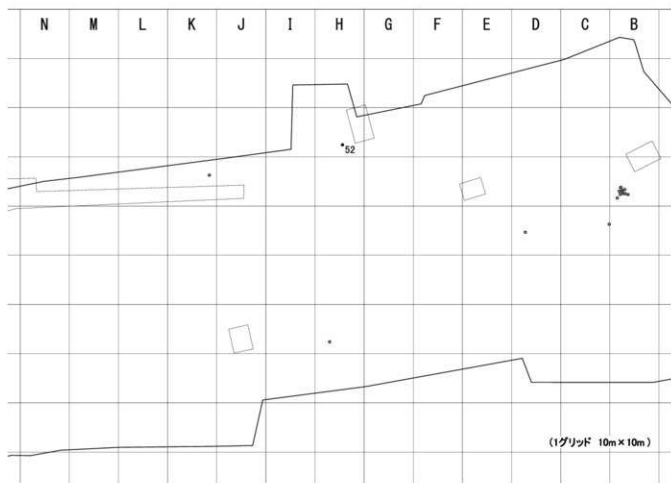
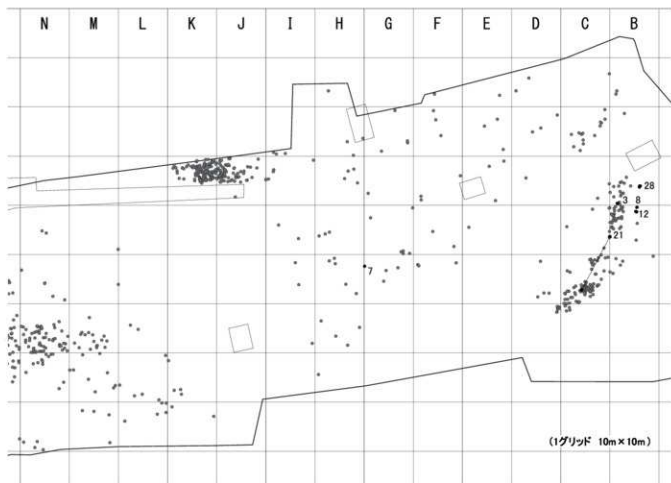
5点全てを図化した。草の冒頭で述べたとおりK-4区に集中する。158は薄手の資料である。

(9) 石製品 (第75図160・161)

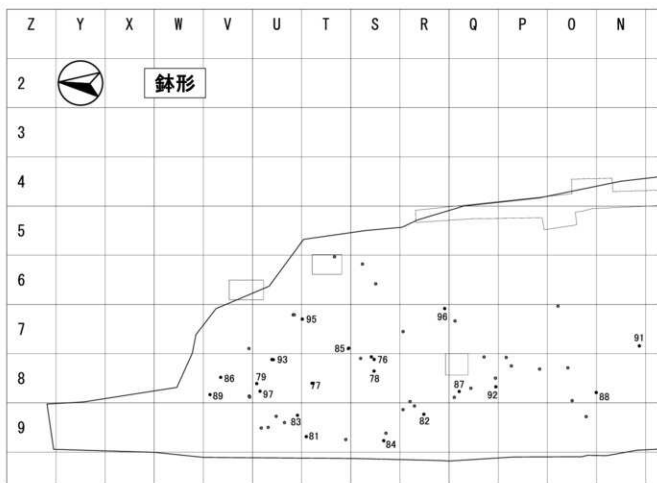
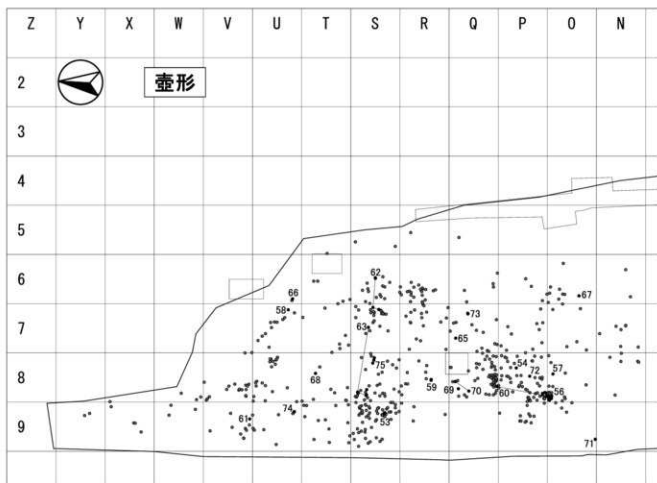
勾玉が2点出土している。



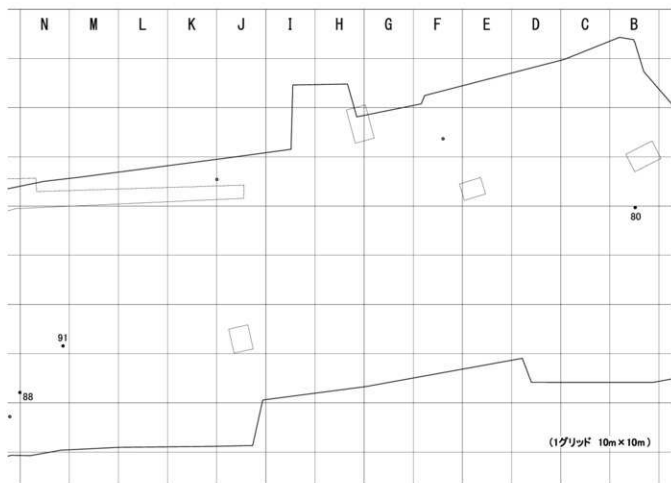
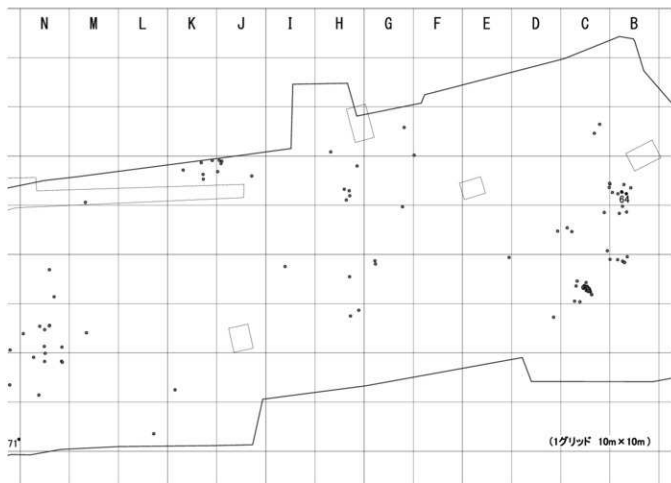
第59圖 器種別出土状況①（壺形A・B左）



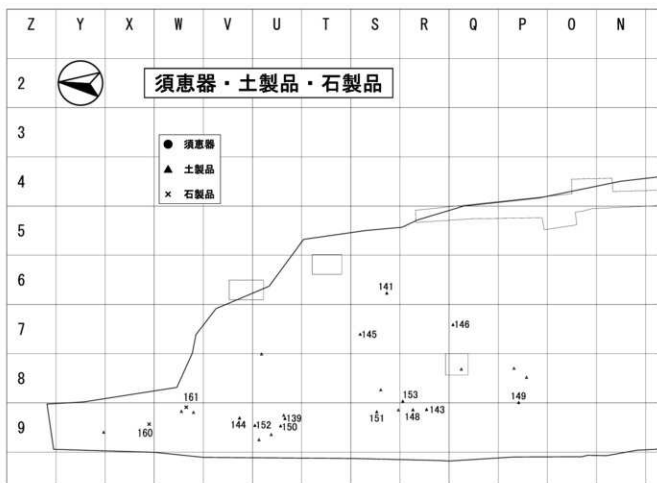
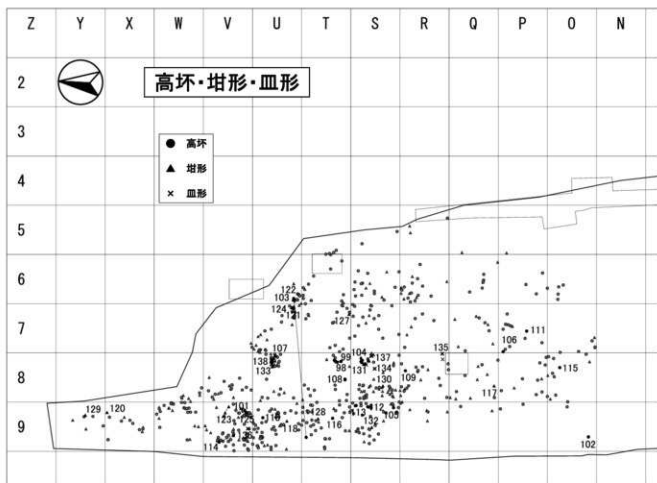
第60図 器種別出土状況図②(壘形A・B右)



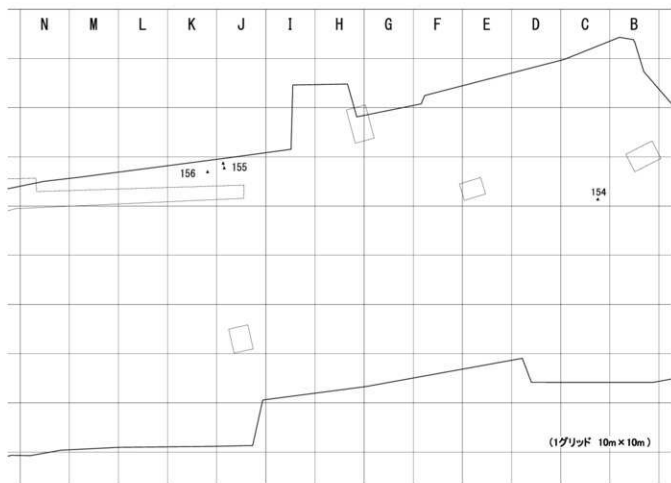
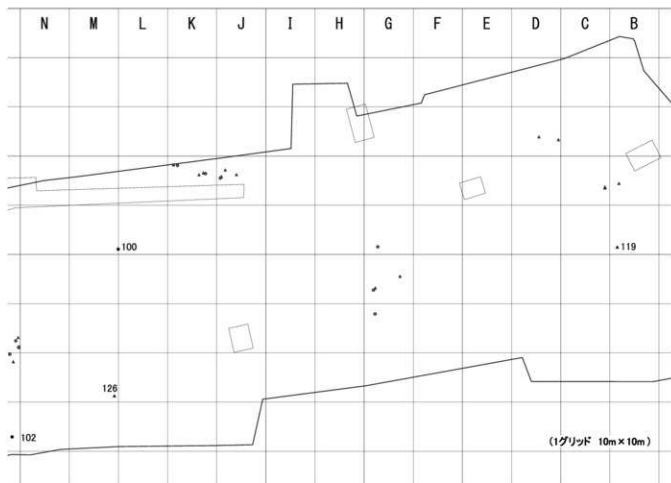
第61図 器種別出土状況図③(壺形・鉢形左)



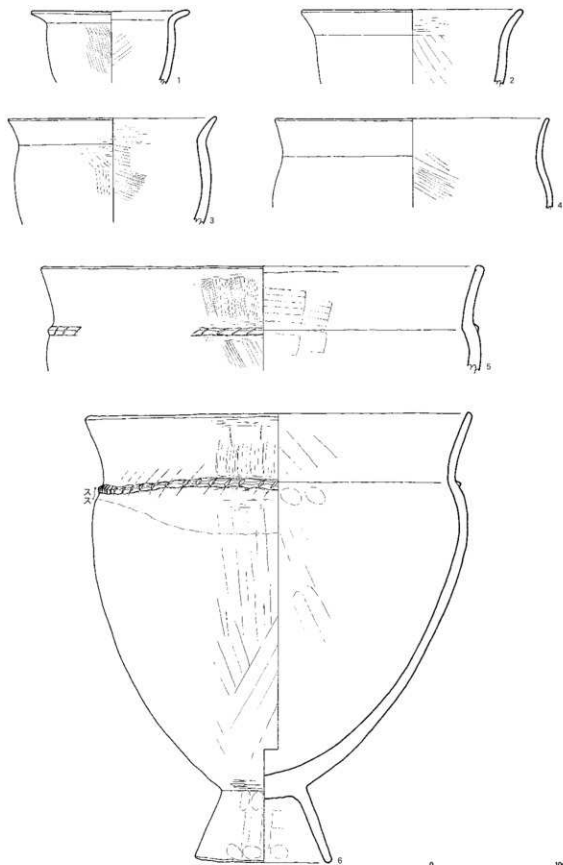
第62図 器種別出土状況図④ (壺形・鉢形右)



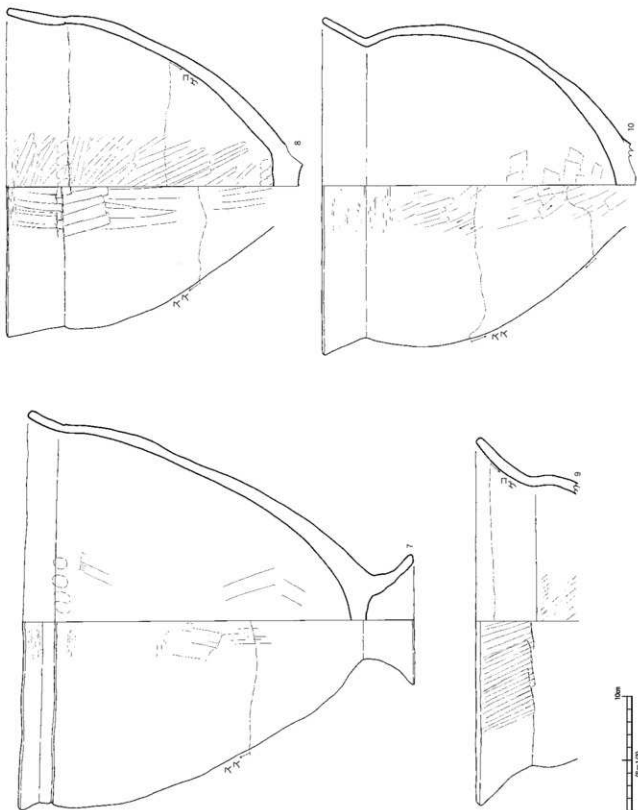
第63図 器種別出土状況図⑤ (高坏ほか・須恵器ほか左)



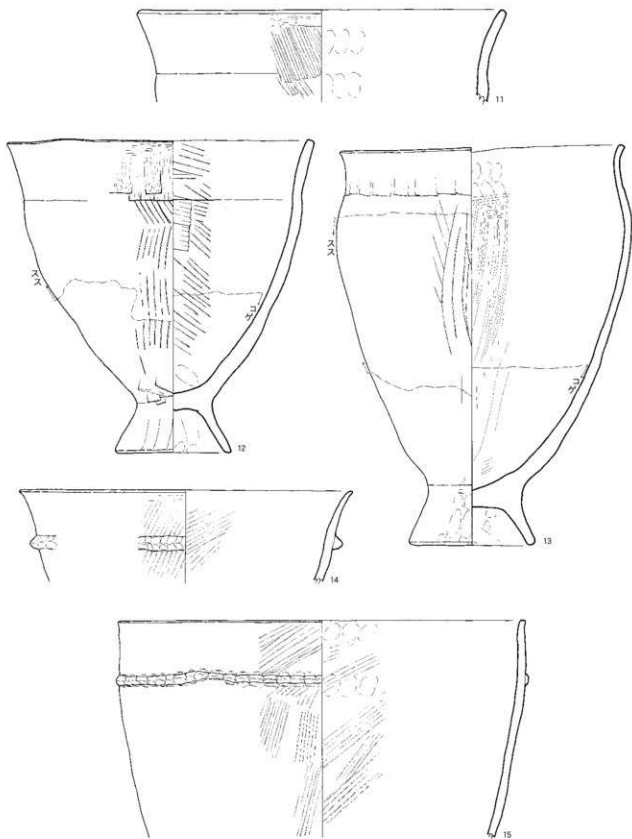
第64図 器種別出土状況図⑥ (高环ほか・須恵器ほか右)



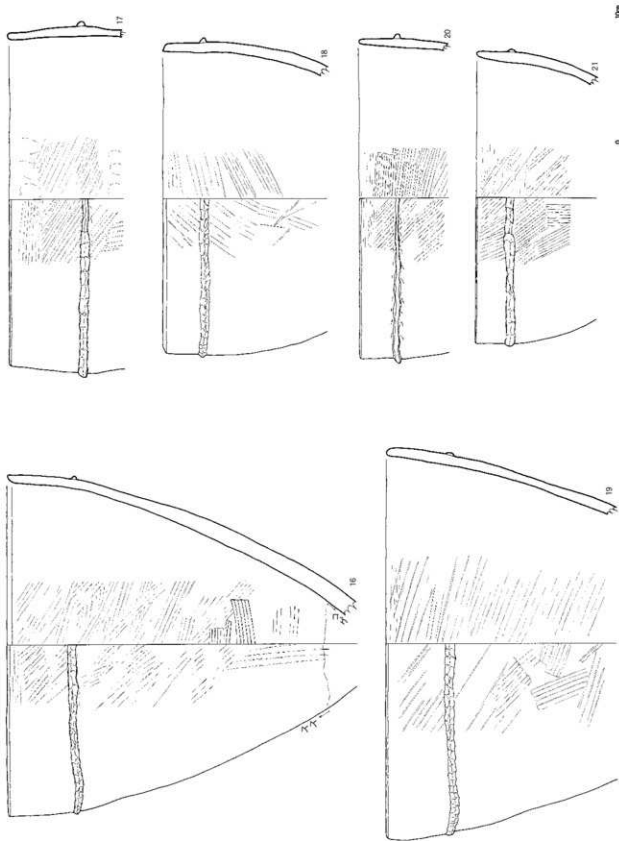
第65図 包含層出土遺物実測図①



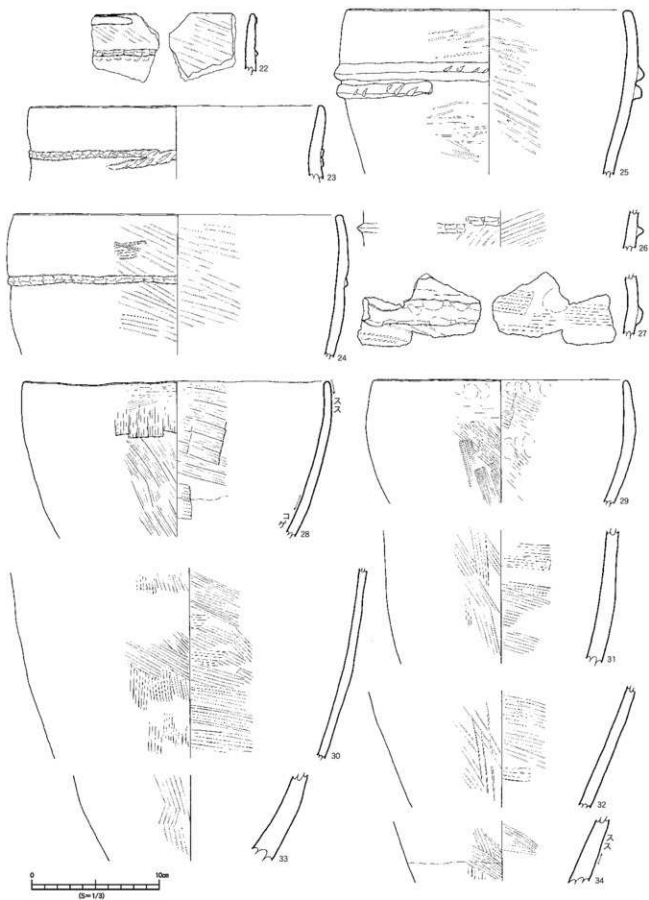
第66图 包信墓出土陶器剖面图②



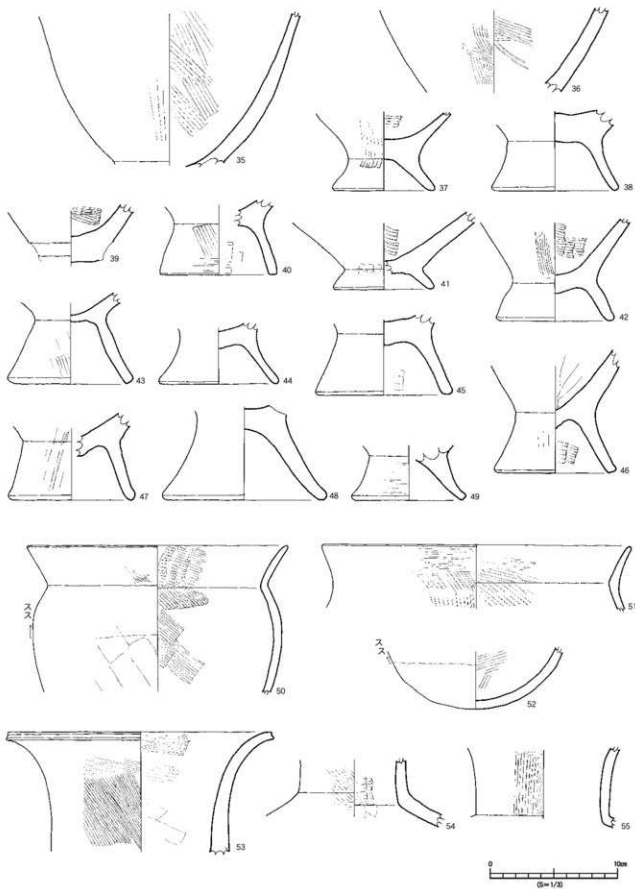
第67図 包含層出土遺物実測図③



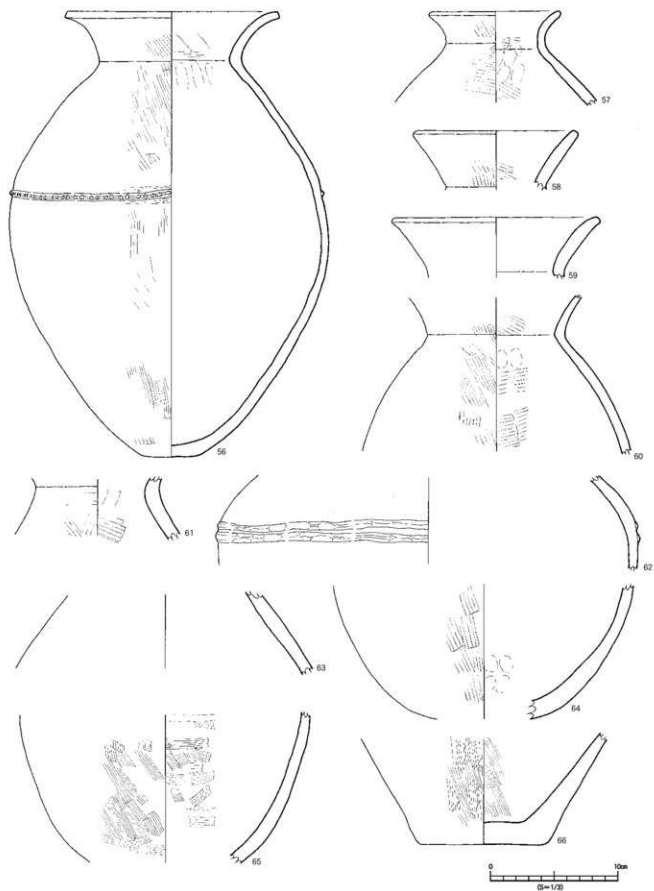
第68图 包信墓出土青铜剑剖面图④



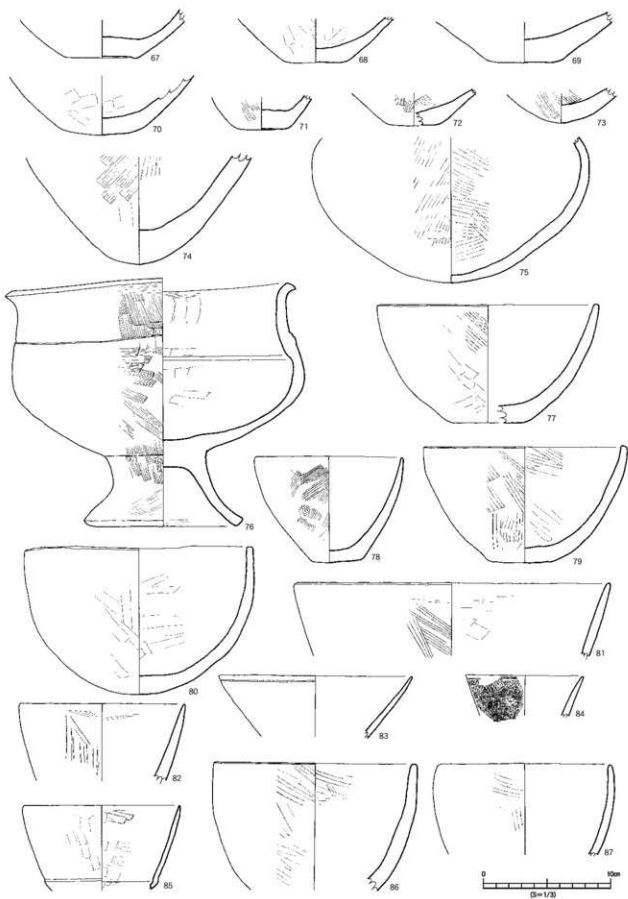
第69図 包含層出土遺物実測図⑤



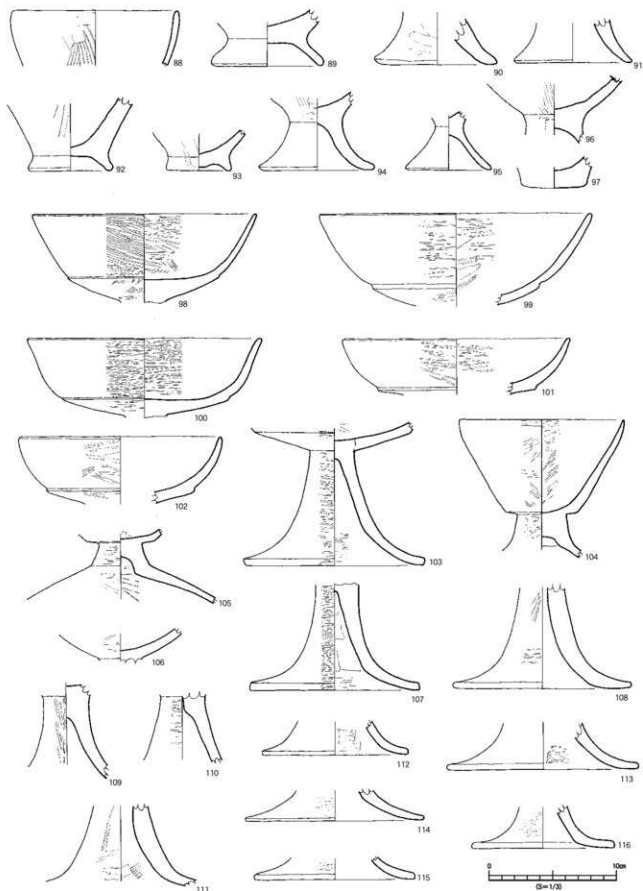
第70図 包含層出土遺物実測図⑥



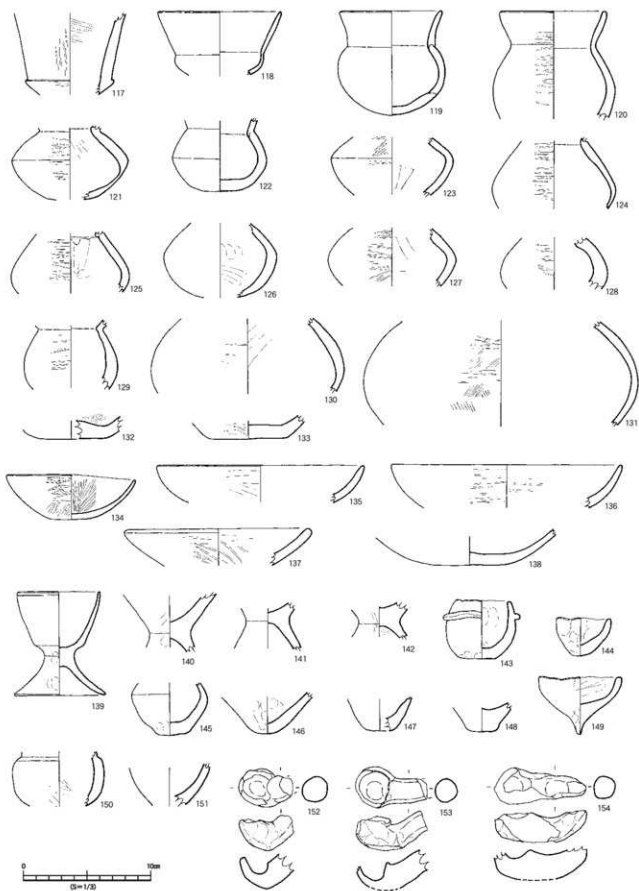
第71圖 包含層出土遺物実測図⑦



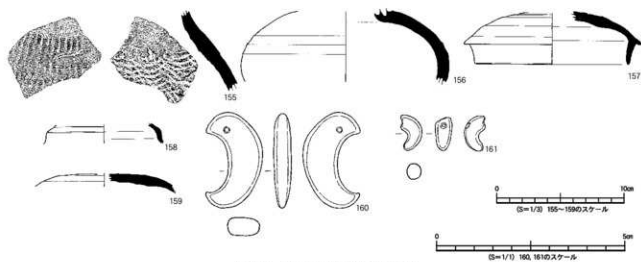
第72図 包含層出土遺物実測図⑧



第73图 包含層出土遺物実測図⑨



第74圖 包含層出土遺物実測図⑩



第75図 包含層出土遺物実測図①



図版32 竪穴住居跡検出状況

第4章 古代の調査

第1節 概要

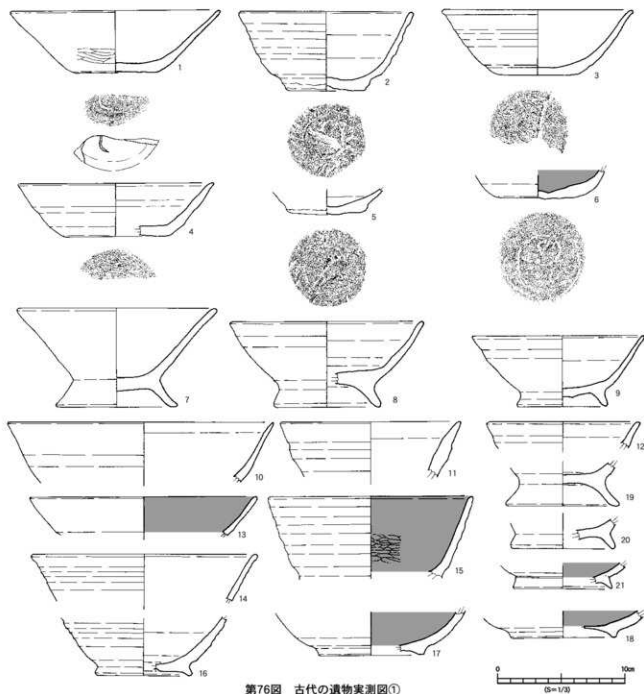
調査対象となる層位は、Ⅱ層、Ⅲa'層、Ⅲa層である。この中で最も遺物量が多いのはⅡ層である。

包含層での遺物出土状況は、Ⅱ層を中心として遺物の出土が見られた。出土状況としては、小破片が多い。これらに関しては、区一括で取り上げを行い、比較的大きめの破片に関しては番号を付けて取り上げを実施した。

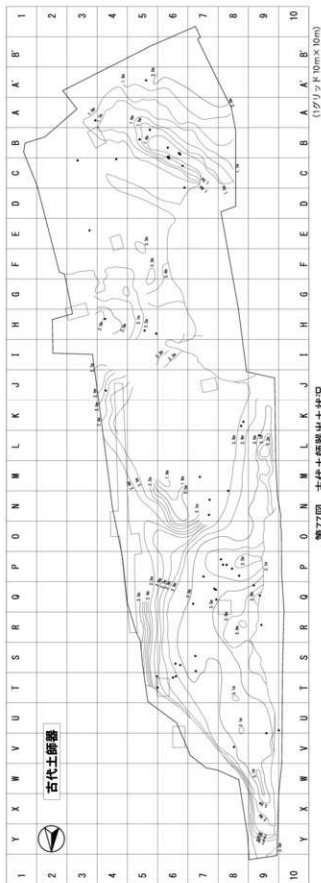
ここでは主に平安時代の遺物について、土師器・黒色土器・赤色土器を一括して口縁部から胴部、底部の順に掲載した。続いて須恵器についても同様の順に掲載した。

当該時期の明確な遺構は、検出されていない。しかしながら、包含層中からは、土師器・須恵器を中心とした遺物が相当量出土している。また、中岳山麓竪穴跡群がすぐ近くに立地するためか、その中でも須恵器の出土が多くみられた。次章で扱う大量のピットの中には古代に属する可能性のあるものが存在することも付け加えておく。

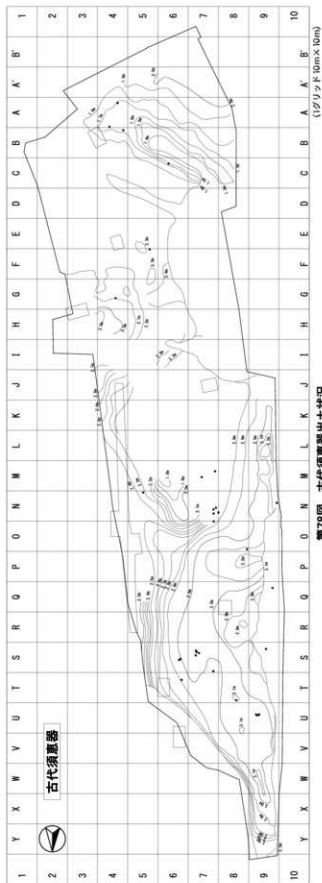
以上のほかに注目すべき遺物としては、東海系の灰輪陶器や緑輪陶器、削り出し高台の土師器碗などが確認された。1～6は坏、7～21は碗である。1は、7～8世紀の可能性のある坏である。赤色で外面にはミガキがみ



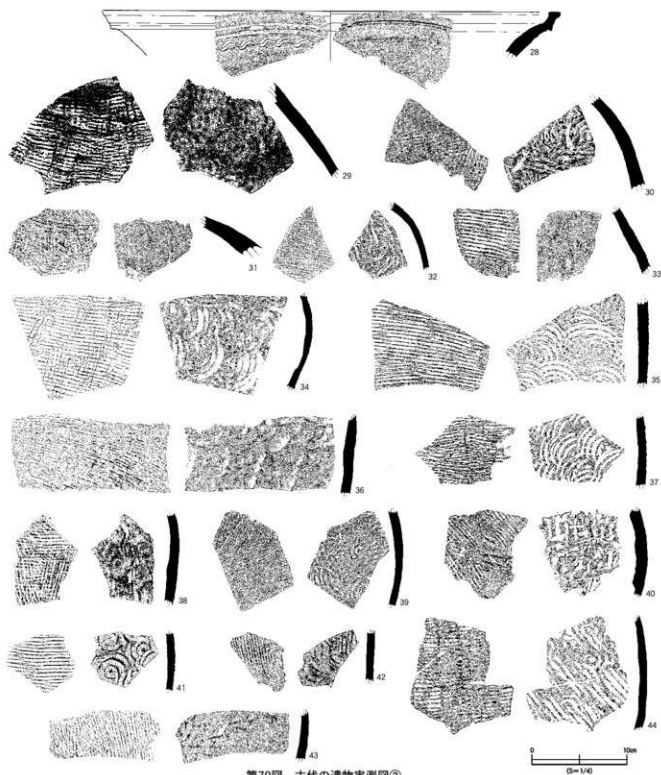
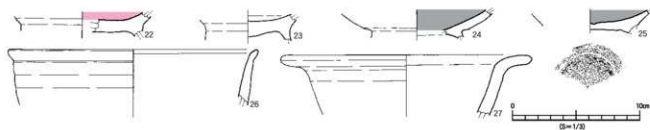
第76図 古代の遺物実測図①



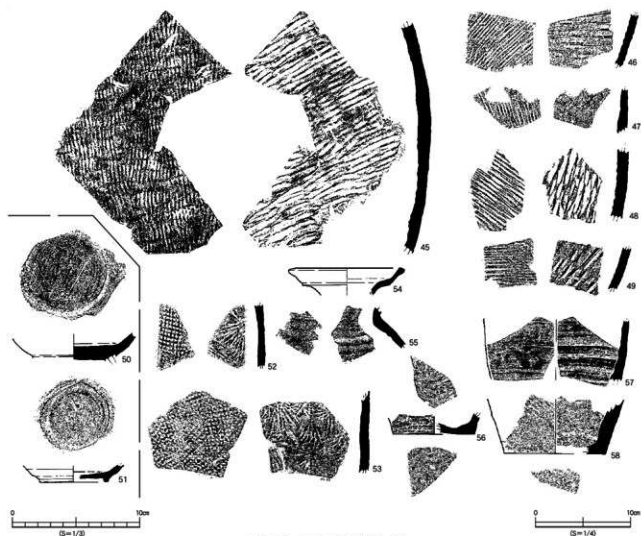
第77図 古代土師器出土状況



第78図 古代須恵器出土状況



第79図 古代の遺物実測図②



第80図 古代の遺物実測図③

られる。4は内面見込みにヘラ書きのある坏である。どのような文字かは明らかではない。15は黒色土器でA類(内黒土師器)である。内面にミガキがみられる。21は11世紀以降の可能性があるが、ここでは古代として扱った。

26・27は鉢形であると考えられるものである。28～58は須恵器である。甕が大半をしめる。その他には壺(瓶)・筒がある。

第5章 中・近世(遺構)の調査

第1節 概要

ここでは平安時代末の遺物についても中世の遺物として取り扱う。また、本来であれば、中世と近世について詳細な分類を行い、中世と近世の遺構・遺物は別個に報告するのが正当であるが、本遺跡では時期区分が困難であった。そのため、中世から近世までの遺構・遺物を一括して取り扱った。

中世の遺物としては、土師器・国産陶器(常滑・備前・

東播磨系須恵器・棒万丈・南島産類須恵器【カムイヤキ】など・輸入陶磁器(青磁・白磁など)などがみられた。

中世末～近世前半(特に17世紀後半～18世紀初頭頃まで)の遺物としては、土器(瓦質土器を含む)・国産陶磁器(肥前系・東海系・薩摩焼など)・輸入陶磁器(景德鎮窯青花・州窯系青花)などがみられた。この中にはベトナム産長胴壺や徳化窯産白磁などの他の遺跡でも類例の少ないものが含まれている。また、薩摩焼には堂平窯(日置市東市東町)産とみられるものと、朝鮮産

の可能性のあるもの、加治木・始良系などが含まれている。中でも堂平窯産とみられる薩摩焼は、生産地と消費地のありかたを考えるうえで重要な資料である。

大溝をはじめとして、31基の掘立柱建物跡、2基の竪穴建物跡、19基の炉状遺構、6基の大型土坑、18基の土坑墓、集石状遺構、34条の溝状遺構など多くの遺構が検出された。特に、掘立柱建物を構成していたと考えられる柱穴状遺構（ピット）が数千個検出されており、何度も建て替えがあったことが想定される。

遺構内には、主に16～17世紀頃を中心とした遺物が入っていたが、中には縄文時代前期以降の遺物も混入していた。また、前章の概要でも触れたが、遺跡から近い場所に立地する中岳山麓窯跡群で生産されたとみられる古代の須恵器が多く含まれていた。

鉄器も比較的多く出土している。釘がほとんどであるが、性格不明のものも多く、今後の検討課題である。

古銭も、土坑墓を中心として出土している。他の遺跡と比較して（池畑2006）加治木銭の証である背面に「治」と銘のある洪武通宝が多く出土しており、遺跡の性格を考えさせる資料である。

第2節 出土遺物の分類

1 器種分類

基本的には、以下のように遺物の分類を行う

- ・食器類 椀・杯・皿・大皿
- ・調度具 合子・瓶・水注・小壺
- ・貯蔵具 壺・有耳壺・須恵器甕
- ・煮炊具 鍋・釜・土師器甕
- ・その他 以上のものにはいないもの。
器種が特定できないもの。

2 中近世の遺物分類

土師器

碗・杯・皿・蓋（・壺）

須恵器

片口鉢・甕・壺・小壺・瓶

瓦質土器（中近世にまたがるもの含む）

摺鉢・羽釜・火鉢

陶磁器

青磁分類は、基本的に上田分類（上田秀夫1982）

と、大宰府分類（横田・森田1978、太宰府市教育委員会【山本信夫】2000ほか）を参考として、森村分類（森村健一2005）を加味した。

白磁分類は、基本的に森田分類（森田勉1982）と、大宰府分類（横田・森田1978、太宰府市教育委員会【山本信夫】2000ほか）を参考とした。また、一部に森村氏による指導内容を加味した。

基本的には、碗・皿・口折皿・瓶・壺・鉢・盤・

合子・その他に分類した・

陶器類

甕・壺・碗・皿・鉢

その他

類須恵器（南島須恵器・カムイヤキ）

ベトナム産長胴甕

3 近世の遺物分類

土器

皿・焙烙・火鉢（火舎）・蓋・その他

陶器

碗類・皿類・鉢類・甕類・壺類・瓶類（・水注類）

・器台類・蓋類・その他

磁器

碗類・皿類・鉢類・壺類・瓶類（・水注類）・器台類・

その他

輸入陶磁器（中世から近世をまたぐもの含む）

徳化窯産の白磁

景德鎮窯系青花

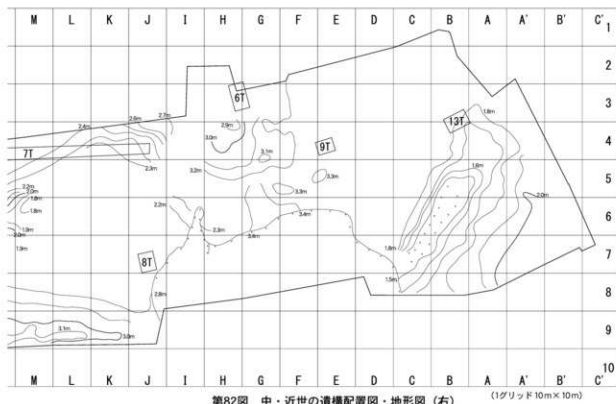
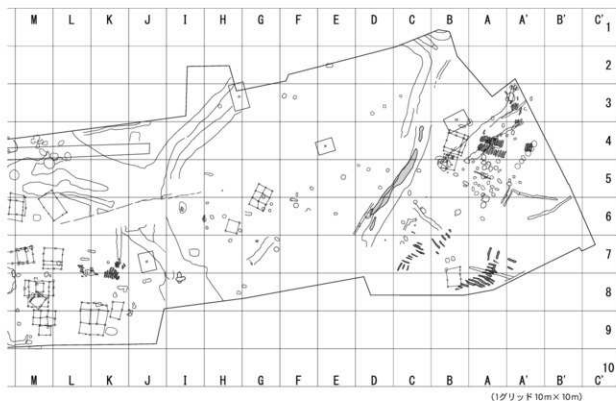
漳州窯系青花

その他

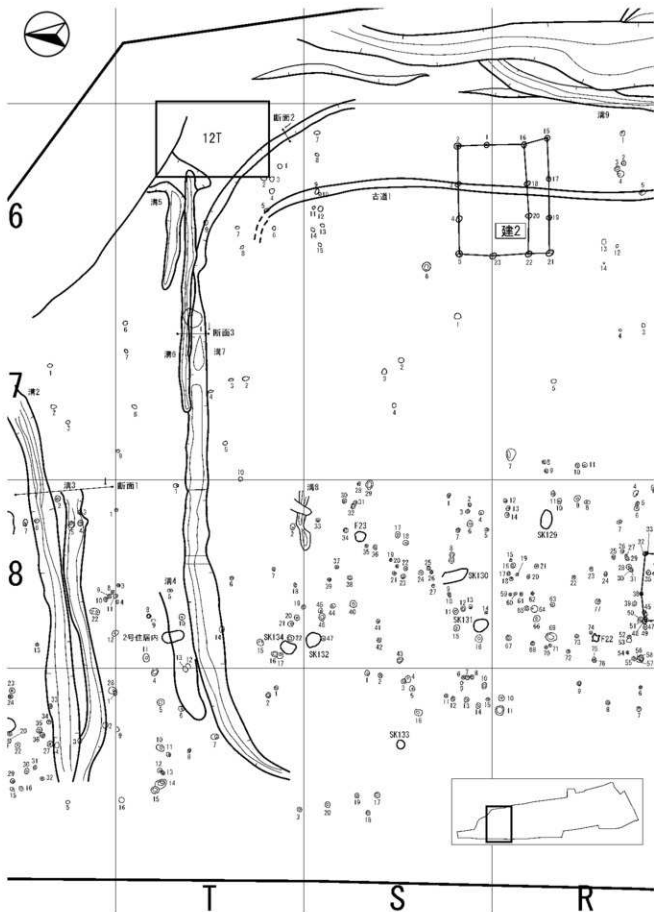
近世以降の陶磁器の器種・器形などの分類は、「江戸遺跡検出のやきもの分類」（新宿区四谷三丁目遺跡調査団1991）、『九州陶磁の編年』（九州近世陶磁学会2000）、『雪山・猿引遺跡』（鹿児島県立埋蔵文化財センター2003）、『垂水・宮之城島津家屋敷跡』（鹿児島県立埋蔵文化財センター2003）、『堂平窯跡』（鹿児島県立埋蔵文化財センター2007）および「鹿児島県地域における16～19世紀の陶磁器出土様相」（橋口亘2002）等を参考にした。

参考文献

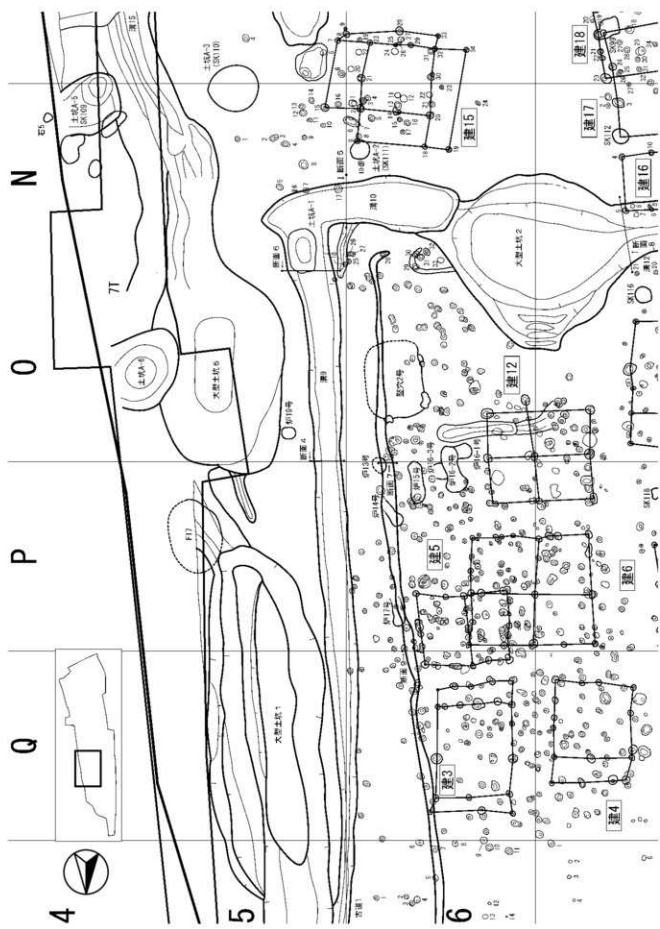
池畑耕一 2006「南九州における中世出土銭の特質」『平成18年度 鹿児島考古学会研究発表会』レジュメ



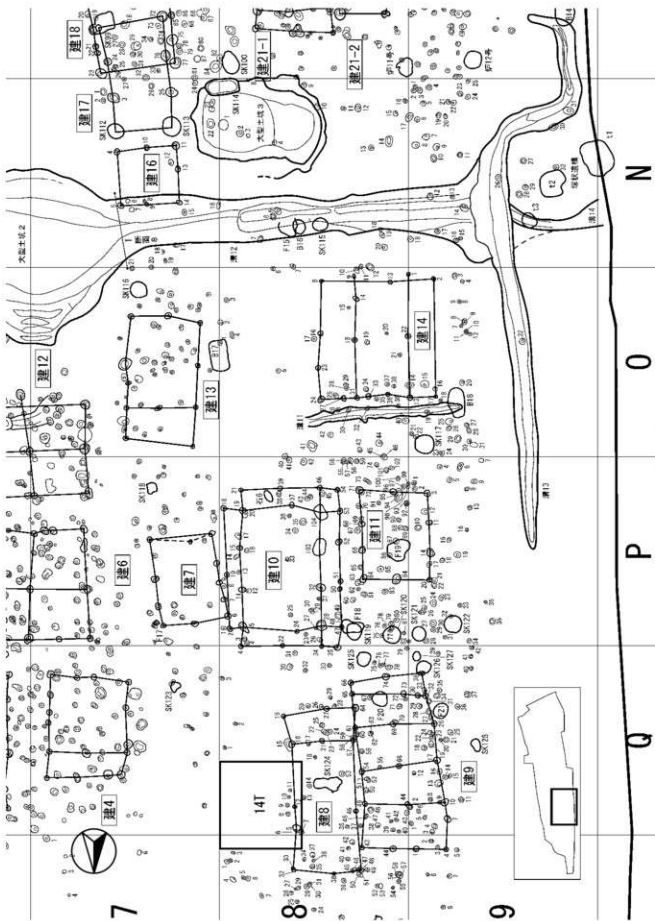
第82図 中・近世の遺構配置図・地形図(右)



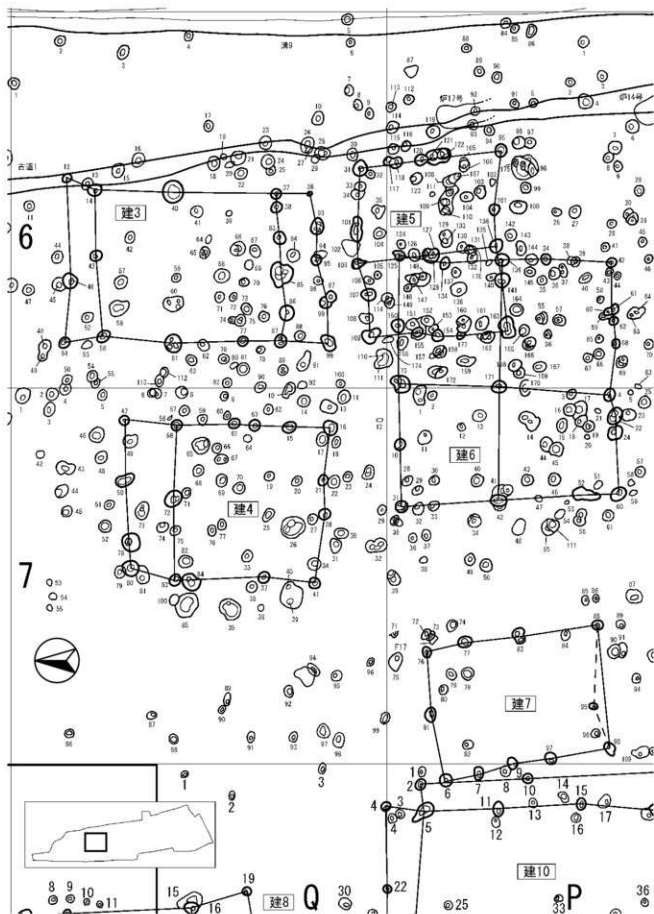
第84図 中・近世の遺構配置図②



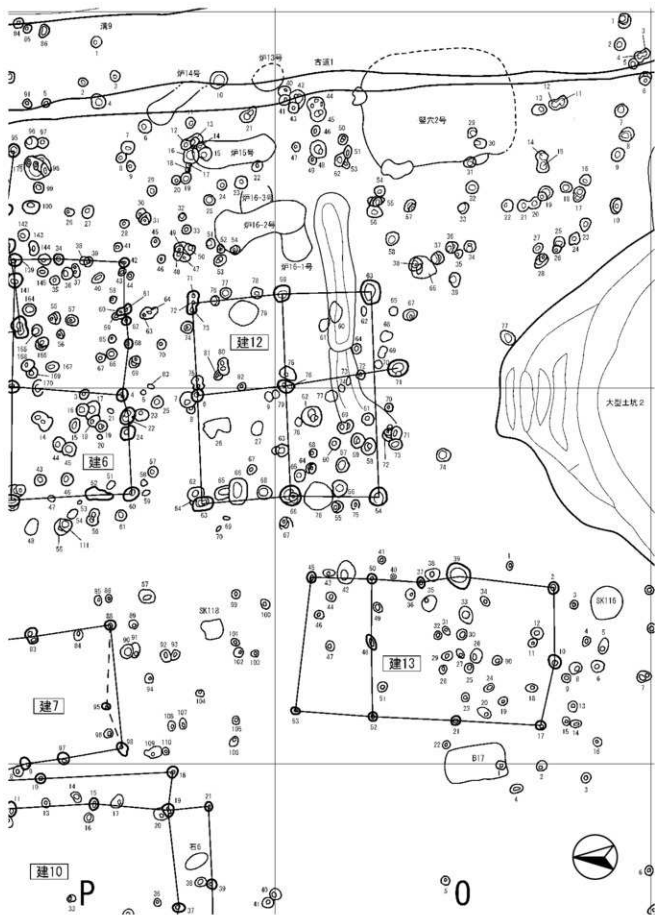
第85図 中・近世の遺構配置図③



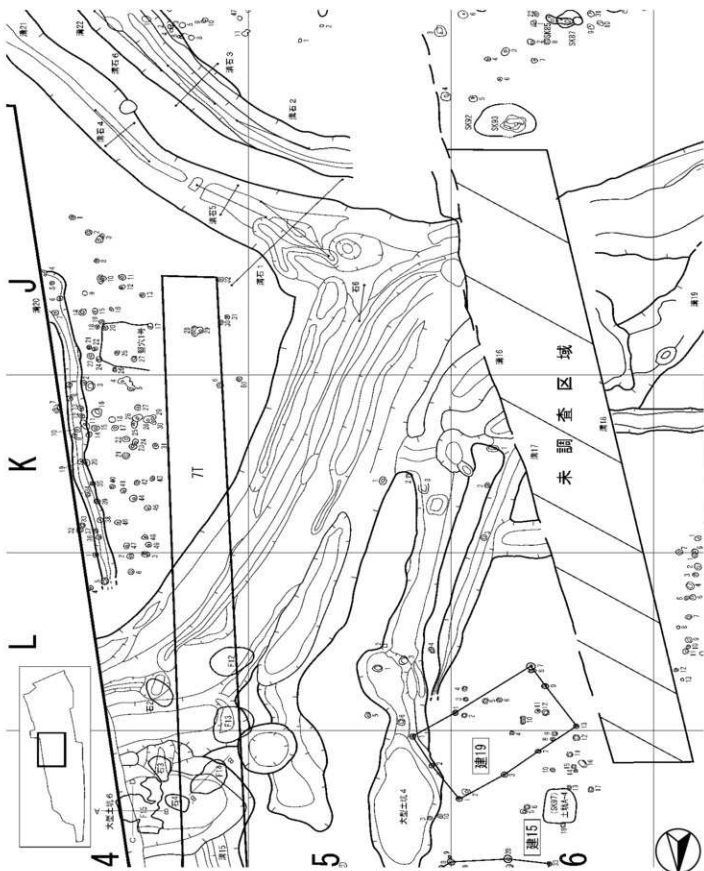
第86図 中・近世の遺構配置図④



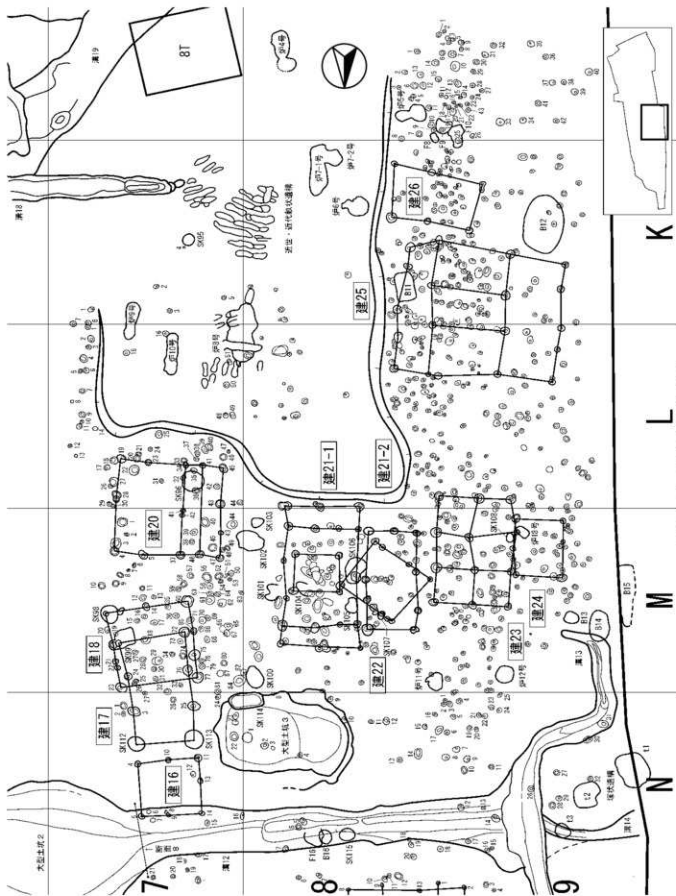
第87図 中・近世の遺構配置図⑤



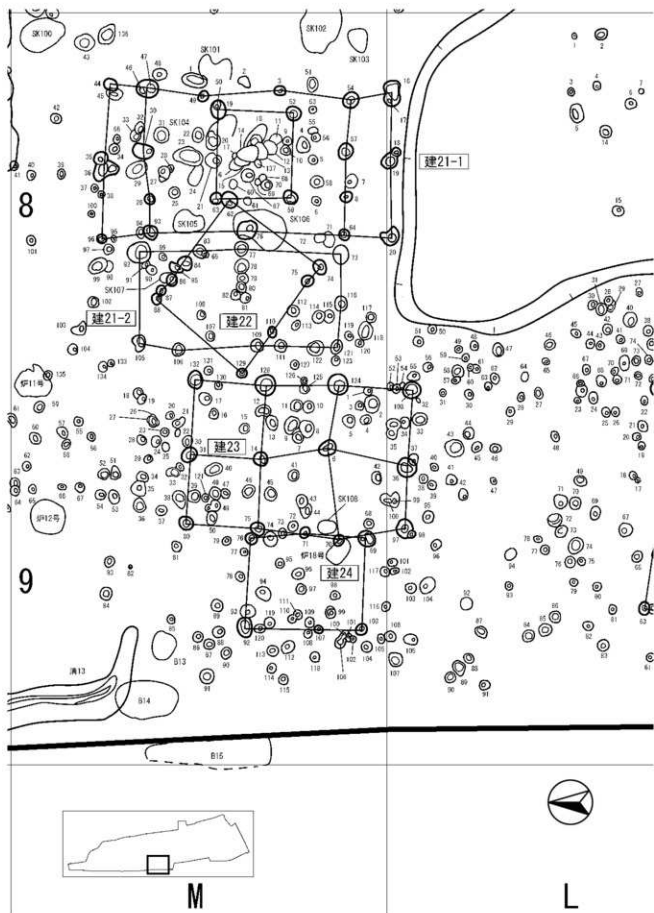
第88図 中・近世の遺構配置図⑥



第89図 中・近世の遺構配置図⑦



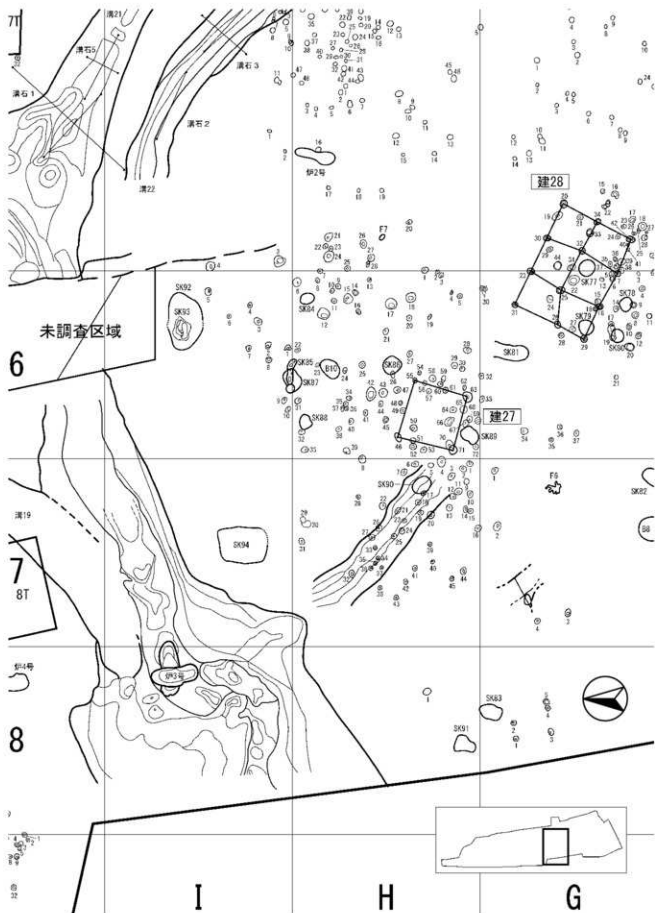
第90図 中・近世の遺構配置図⑧



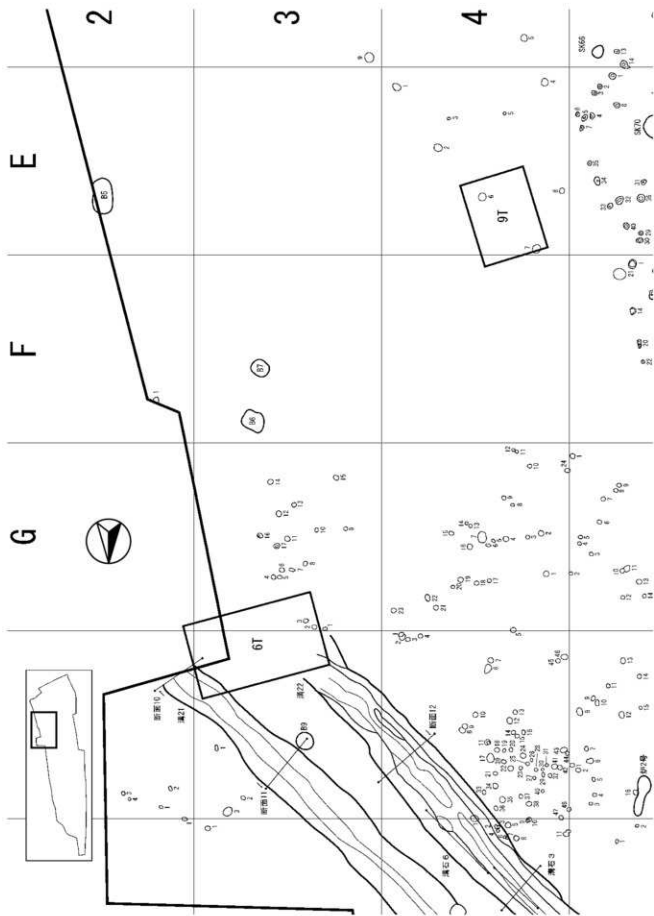
第91図 中・近世の遺構配置図⑨



第92図 中・近世の遺構配置図⑩



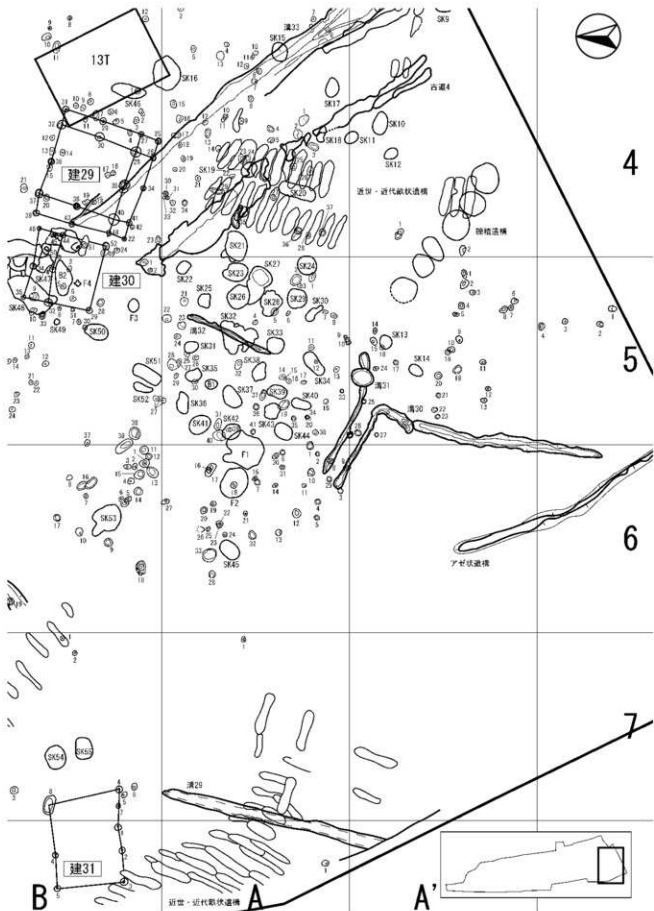
第93図 中・近世の遺構配置図①



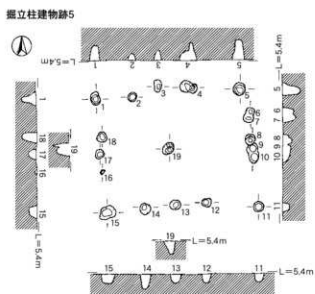
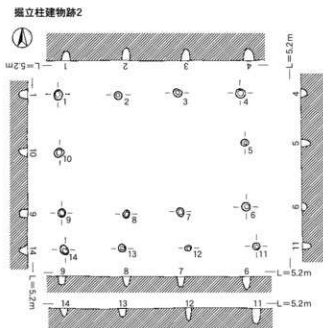
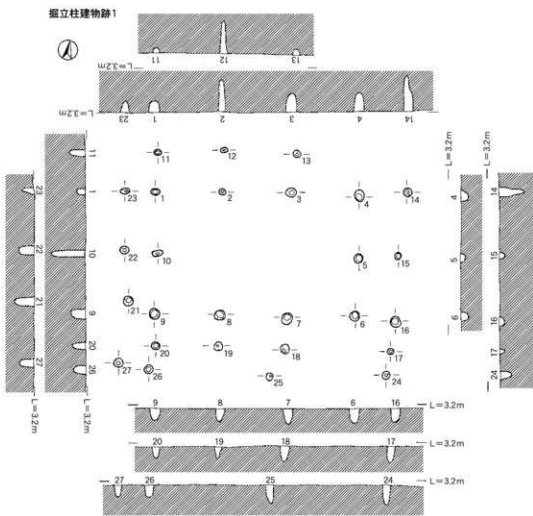
第94図 中・近世の道筋配置図②



第95図 中・近世の遺構配置図④

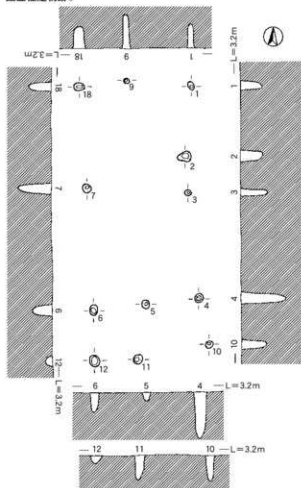


第97図 中・近世の遺構配置図⑮

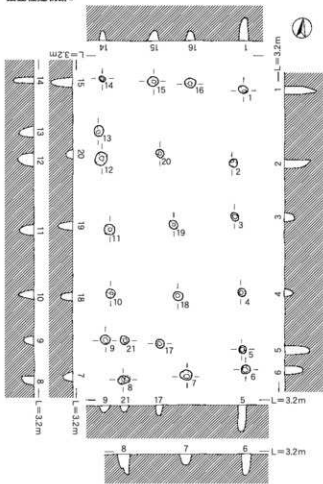


第98図 掘立柱建物跡①

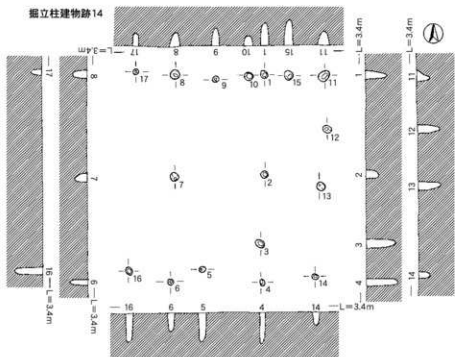
掘立柱建物跡8



掘立柱建物跡9

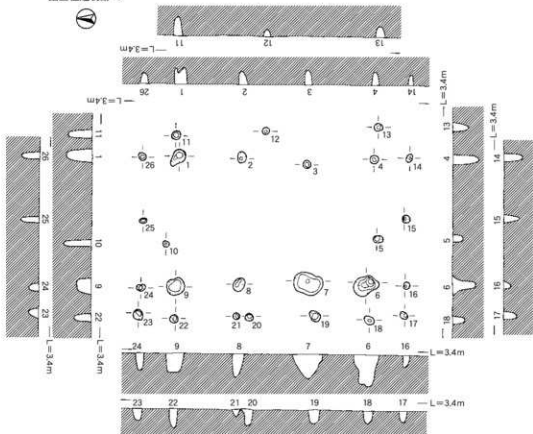


掘立柱建物跡14

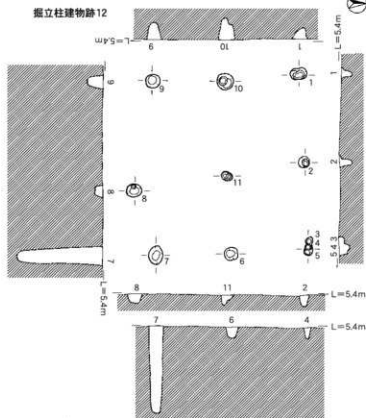


第100図 掘立柱建物跡③

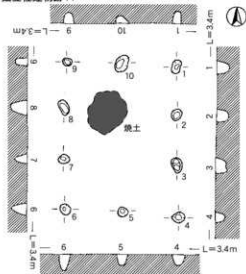
掘立柱建物跡10



掘立柱建物跡12

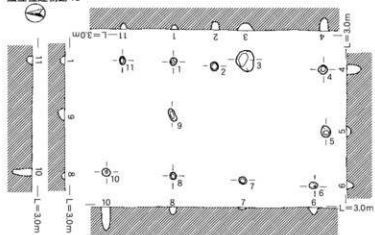


掘立柱建物跡11

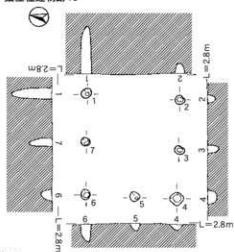


第101図 掘立柱建物跡④

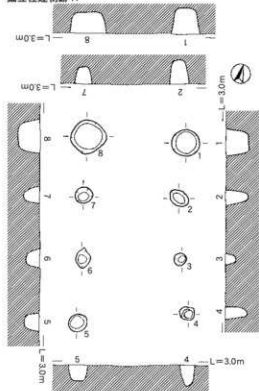
掘立柱建物跡13



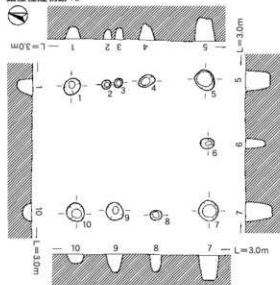
掘立柱建物跡16



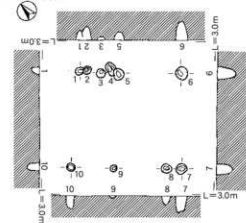
掘立柱建物跡17



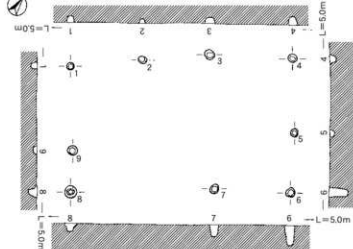
掘立柱建物跡18



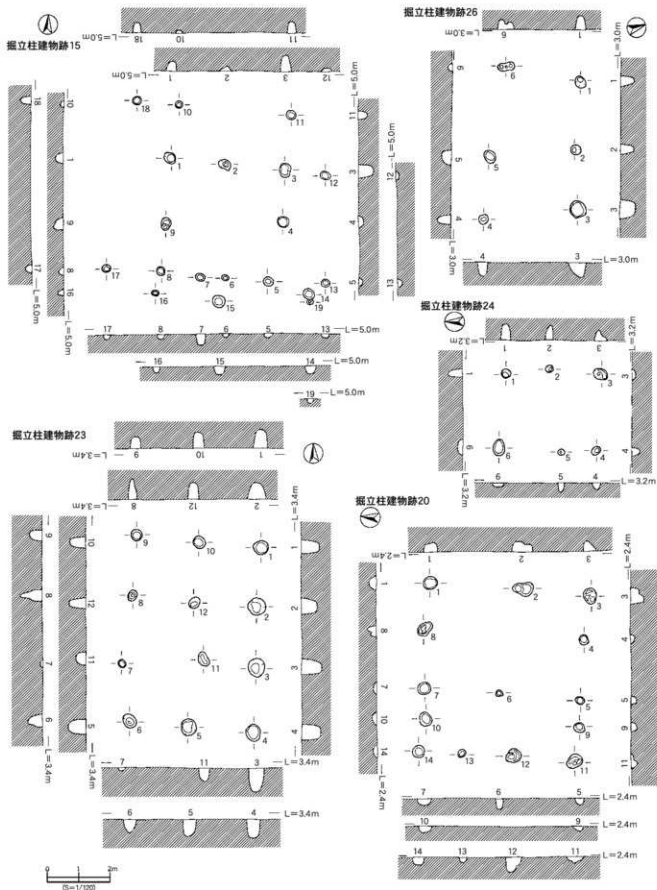
掘立柱建物跡22



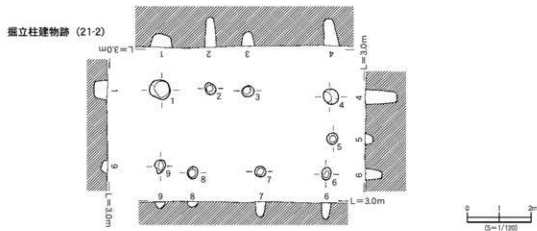
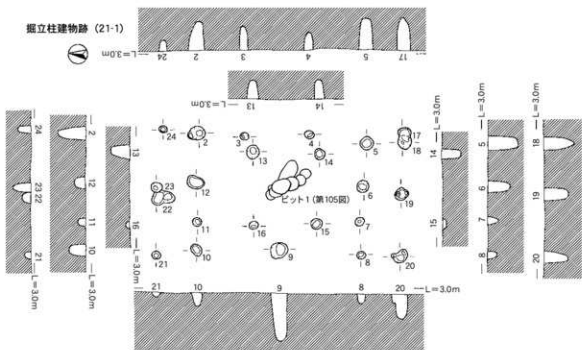
掘立柱建物跡19



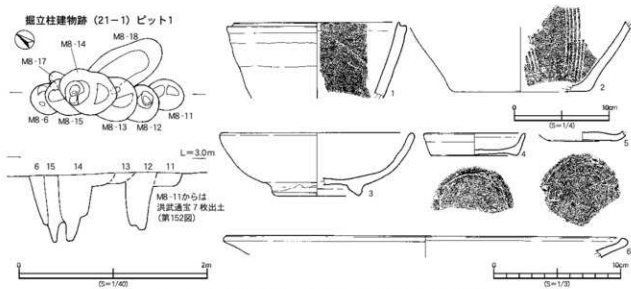
第102図 掘立柱建物跡⑤



第103図 振立柱建物跡⑥

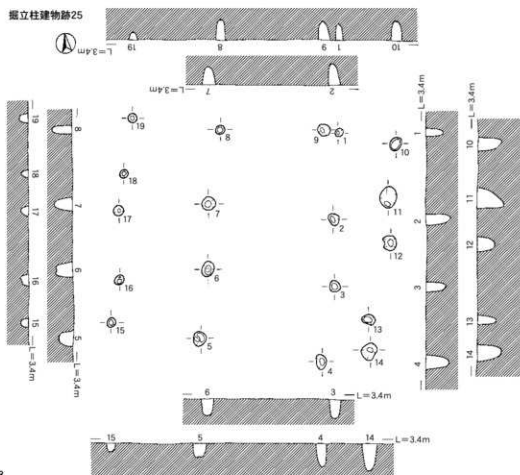


第104図 掘立柱建物跡⑦

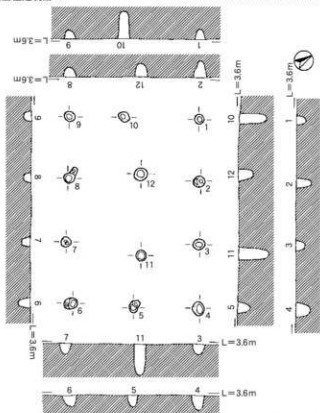


第105図 掘立柱建物跡21-1検出ピット・各ピット内出土遺物

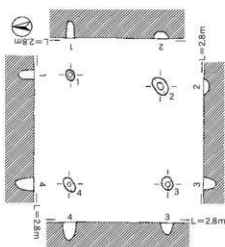
掘立柱建物跡25



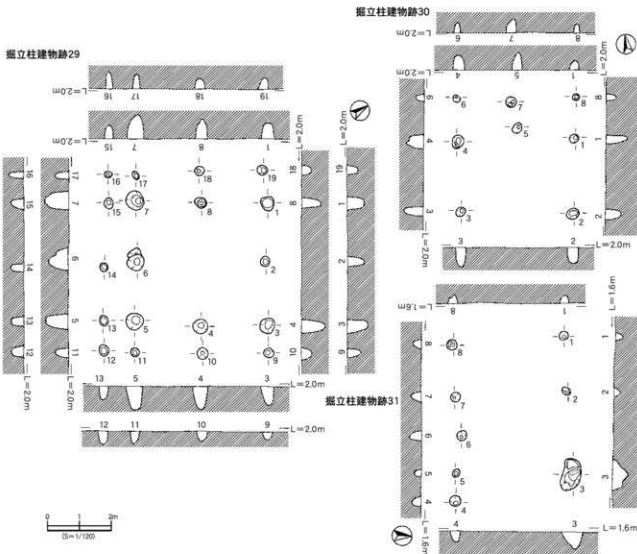
掘立柱建物跡28



掘立柱建物跡27



第106図 掘立柱建物跡③



第107図 掘立柱建物跡⑨

第3節 遺構

(1) 掘立柱建物跡

計32棟の建物が復元された。内訳は、側柱建物26棟、総柱建物6棟である。このうちおおよそ12棟がほぼ東西南北に沿っている。

この中で、特に掘立柱建物21については2棟の建物が関連すると考えられたので一連のものとして扱う。

ピット自体はまだまだ多く存在するので、さらに多くの建物があつた可能性も高い。また、ここでは中近世として扱うが、古墳時代および古代の建物が混在している可能性もあることを付記しておく。

(2) 竪穴建物跡

J-4区とO・P-6区において検出された。

竪穴建物跡1は、O・P-6区においてII層上面で検

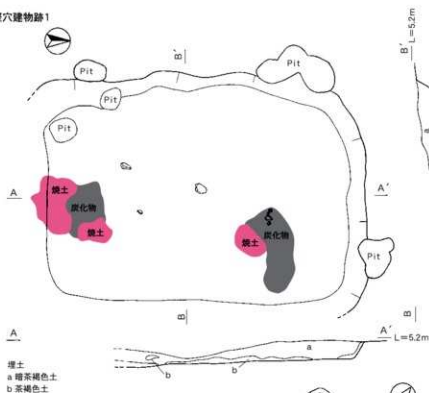
出された。平面プランは、3.2m×3.0mで深さは検出面から30cmであつた。検出面で既に北東側で焼土がみられたが、床面ではこれとは別に南側で焼土が検出された。このことから、検出面での焼土は遺構とは関係がない可能性も考えられる。遺構内からは、古代の土師器（ヘラ切り底部）片と青磁片などが出土した。

竪穴建物跡2は、J-4区においてII層上面で検出された。平面プランは、2.2m×2.2mで深さは検出面から90cmであつた。埋土はほとんどが混ざり土であり、人為的に埋め戻されたような状態である。床面では、ほぼ中央部から焼土が検出された。7トレンチによって西側が切られている。

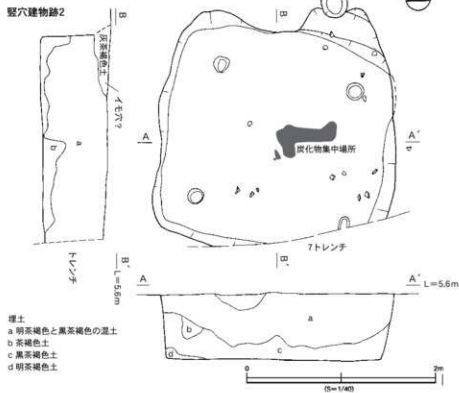
表3 掘立柱建物跡観察表(1)

掘立柱建物跡1			掘立柱建物跡4			掘立柱建物跡8			掘立柱建物跡11		
建物ピット No. 区別	柱間心面層計表 No. 柱間	No. 柱間	建物ピット No. 区別	柱間心面層計表 No. 柱間	No. 柱間	建物ピット No. 区別	柱間心面層計表 No. 柱間	No. 柱間	建物ピット No. 区別	柱間心面層計表 No. 柱間	No. 柱間
1. VP-10	1~2	212	1. Q2-58	1~2	194	1. PB-53	1~2	220	1. PB-64	1~2	150
2. VP-2	2~3	220	2. Q2-61	2~3	81	2. PB-54	2~3	118	2. PB-66	2~3	135
3. VP-2	3~4	212	3. Q2-63	3~4	92	3. PB-12	3~4	340	3. PB-68	3~4	166
4. VP-4	●1~4	644	4. Q2-15	4~5	113	4. QB-16	●1~4	676	4. PB-71	●1~4	471
5. VP-3	●1~3	215	5. Q2-16	●1~3	400	5. QB-21	●1~3	268	5. PB-96	●1~3	138
6. VP-18	7~8	214	6. Q2-21	8~9	138	6. QB-26	●1~8	318	6. PB-98	●1~3	159
7. UB-19	8~9	208	7. Q2-28	8~10	192	7. QB-45	●8~8	708	7. PB-11	●8~9	145
8. UB-7	●8~9	637	8. Q2-41	10~11	44	8. PB-48	4~10	146	8. PB-14	●10~9	463
9. UB-9	●9~10	210	9. Q2-32	●12~8	332	9. PB-38	●12~8	456	9. PB-20	●10~1	178
10. VP-12	12~13	230	10. Q2-84	11~13	125	10. QB-19	4~5	168	10. PB-84	●5~6	184
11. VP-8	●11~13	440	11. Q2-83	16~1	137	11. QB-27	●3~5	166	●11~8	●6~8	363
12. VP-9	●14~14	447	12. Q2-72	15~2	356	12. QB-84	●10~11	234	●11~8	●10~1	166
13. VP-1	16~8	127	13. Q2-85	●6~7	95	●8~9	●8~9	148	●10~1	●10~1	346
14. VP-1	9~21	90	14. Q2-78	7~8	191	●10~11	●10~11	356	●11~8	●11~8	300
15. VP-2	23~1	95	15. Q2-80	●12~1	421	11~12	11~12	132	●12~10	●12~10	322
16. VP-14	17~18	205	16. Q2-47	12~1	193	●11~1	●11~1	408	●12~10	●12~10	322
17. UB-15	18~19	206	●17~20	12~1	193	13~14	13~14	148	●13~12	●13~12	322
18. UB-20	19~20	197	●17~20	12~1	193	15~16	15~16	111	●14~13	●14~13	322
19. UB-8	●17~20	728	●17~20	12~1	193	16~18	16~18	160	●15~14	●15~14	322
20. UB-10	24~25	365	●17~20	12~1	193	●17~18	●17~18	322	●16~15	●16~15	322
21. UB-11	25~26	368	●17~20	12~1	193	●18~19	●18~19	322	●17~16	●17~16	322
22. VP-13	●24~26	753	●17~20	12~1	193	●19~20	●19~20	322	●18~17	●18~17	322
23. VP-11	27~27	97	●17~20	12~1	193	●20~21	●20~21	322	●19~18	●19~18	322
24. UB-16	4~5	162	●17~20	12~1	193	●21~22	●21~22	322	●20~19	●20~19	322
25. UB-21	5~6	186	●17~20	12~1	193	●22~23	●22~23	322	●21~20	●21~20	322
26. VP-25	●4~6	718	●17~20	12~1	193	●23~24	●23~24	322	●22~21	●22~21	322
27. VP-26	9~10	184	●17~20	12~1	193	●24~25	●24~25	322	●23~22	●23~22	322
●10~1	183		●17~20	12~1	193	●25~26	●25~26	322	●24~23	●24~23	322
●9~1	367		●17~20	12~1	193	●26~27	●26~27	322	●25~24	●25~24	322
●1~11	125		●17~20	12~1	193	●27~28	●27~28	322	●26~25	●26~25	322
13~3	125		●17~20	12~1	193	●28~29	●28~29	322	●27~26	●27~26	322
14~15	204		●17~20	12~1	193	●29~30	●29~30	322	●28~27	●28~27	322
●14~18	412		●17~20	12~1	193	●30~31	●30~31	322	●29~28	●29~28	322
18~17	97		●17~20	12~1	193	●31~32	●31~32	322	●30~29	●30~29	322
●17~24	96		●17~20	12~1	193	●32~33	●32~33	322	●31~30	●31~30	322
●16~18	173		●17~20	12~1	193	●33~34	●33~34	322	●32~31	●32~31	322
28~20	78		●17~20	12~1	193	●34~35	●34~35	322	●33~32	●33~32	322
20~8	103		●17~20	12~1	193	●35~36	●35~36	322	●34~33	●34~33	322
●25~9	259		●17~20	12~1	193	●36~37	●36~37	322	●35~34	●35~34	322
27~21	202		●17~20	12~1	193	●37~38	●37~38	322	●36~35	●36~35	322
21~22	157		●17~20	12~1	193	●38~39	●38~39	322	●37~36	●37~36	322
22~22	167		●17~20	12~1	193	●39~40	●39~40	322	●38~37	●38~37	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●40~41	●40~41	322	●39~38	●39~38	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●41~42	●41~42	322	●40~39	●40~39	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●42~43	●42~43	322	●41~40	●41~40	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●43~44	●43~44	322	●42~41	●42~41	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●44~45	●44~45	322	●43~42	●43~42	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●45~46	●45~46	322	●44~43	●44~43	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●46~47	●46~47	322	●45~44	●45~44	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●47~48	●47~48	322	●46~45	●46~45	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●48~49	●48~49	322	●47~46	●47~46	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●49~50	●49~50	322	●48~47	●48~47	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●50~51	●50~51	322	●49~48	●49~48	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●51~52	●51~52	322	●50~49	●50~49	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●52~53	●52~53	322	●51~50	●51~50	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●53~54	●53~54	322	●52~51	●52~51	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●54~55	●54~55	322	●53~52	●53~52	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●55~56	●55~56	322	●54~53	●54~53	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●56~57	●56~57	322	●55~54	●55~54	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●57~58	●57~58	322	●56~55	●56~55	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●58~59	●58~59	322	●57~56	●57~56	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●59~60	●59~60	322	●58~57	●58~57	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●60~61	●60~61	322	●59~58	●59~58	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●61~62	●61~62	322	●60~59	●60~59	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●62~63	●62~63	322	●61~60	●61~60	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●63~64	●63~64	322	●62~61	●62~61	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●64~65	●64~65	322	●63~62	●63~62	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●65~66	●65~66	322	●64~63	●64~63	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●66~67	●66~67	322	●65~64	●65~64	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●67~68	●67~68	322	●66~65	●66~65	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●68~69	●68~69	322	●67~66	●67~66	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●69~70	●69~70	322	●68~67	●68~67	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●70~71	●70~71	322	●69~68	●69~68	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●71~72	●71~72	322	●70~69	●70~69	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●72~73	●72~73	322	●71~70	●71~70	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●73~74	●73~74	322	●72~71	●72~71	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●74~75	●74~75	322	●73~72	●73~72	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●75~76	●75~76	322	●74~73	●74~73	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●76~77	●76~77	322	●75~74	●75~74	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●77~78	●77~78	322	●76~75	●76~75	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●78~79	●78~79	322	●77~76	●77~76	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●79~80	●79~80	322	●78~77	●78~77	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●80~81	●80~81	322	●79~78	●79~78	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●81~82	●81~82	322	●80~79	●80~79	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●82~83	●82~83	322	●81~80	●81~80	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●83~84	●83~84	322	●82~81	●82~81	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●84~85	●84~85	322	●83~82	●83~82	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●85~86	●85~86	322	●84~83	●84~83	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●86~87	●86~87	322	●85~84	●85~84	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●87~88	●87~88	322	●86~85	●86~85	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●88~89	●88~89	322	●87~86	●87~86	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●89~90	●89~90	322	●88~87	●88~87	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●90~91	●90~91	322	●89~88	●89~88	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●91~92	●91~92	322	●90~89	●90~89	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●92~93	●92~93	322	●91~90	●91~90	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●93~94	●93~94	322	●92~91	●92~91	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●94~95	●94~95	322	●93~92	●93~92	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●95~96	●95~96	322	●94~93	●94~93	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●96~97	●96~97	322	●95~94	●95~94	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●97~98	●97~98	322	●96~95	●96~95	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●98~99	●98~99	322	●97~96	●97~96	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●99~100	●99~100	322	●98~97	●98~97	322
●27~23	347		●17~20	12~1	193	●100~101	●100~101	322	●99~98	●99~98	322

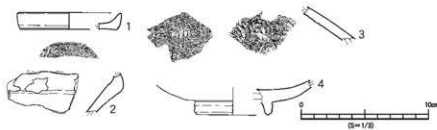
竪穴建物跡1



竪穴建物跡2



第108図 竪穴住居跡



第109図 竪穴住居跡出土遺物実測図

(3) 炉状遺構

炉状遺構は全部で19基が確認された。ただし、このうち3基で切り合いが確認されているのでこれを含めると実際には23基が存在していたことになる。

これらは、中世から近世にかけて使用されていたものと考えられる。いずれも鉄滓や鍛造剥片等の金属質剥片が確認されなかったので、基本的には鍛冶炉としてよりも、カマドとして使用されたものがほとんどであると捉えたい。ただし、12号については鍛冶炉の可能性が、18号・19号については開炉裏の可能性が考えられるが、形態から考慮して炉状遺構として扱った。

1号炉状遺構 (第110図)

D-6区のII層において検出された。溝27に燃焼部と掻き出し部の一部が切られている。燃焼部は橙色でC字状の炉壁を持ち、焚き口の両側は袖石の役割をはずたず礫がそれぞれ数個ずつ使われており、礫の間には、粘土が目地の役割で貼り付けられ、補強されている。大きさは138cm×84cmである。床面は検出面より46cm下方にあり、硬化は見られない。燃焼部の断面を観察すると、垂直に近い角度で掘り込んで作っており、炉壁の厚さは最大で8cmを測る。この炉状遺構は煙道施設が付随している。燃焼部内の一番奥の壁の中央に床面から12cmの高さに推定直径16cmの穴がある、これが約30°の角度で斜上方にむかって開けられている。内部は一部崩落しているもの

の、粘土でパイプ状に作られており、周囲は高温にさらされたため、赤化している。燃焼部、掻き出し部共に崩落した炉壁の一部と見られる粘土塊がみられ、内部には炭化木や炭を含む埋土の堆積をみる。

2号炉状遺構(第111図)

I-5区のⅡ層において検出された。検出時に上部の殆どが削平されており、基礎部がわずかに残っている程度である。C字状の燃焼部の外周と焚き口付近は崩落した炉壁の一部と見られる粘土塊がみられ、内部には炭化木や炭を多く含む黒色土の堆積をみる。大きさは推定95cm×73cmである。掻き出し部の大きさは先端が削平されているので不明である。遺構内から土鍾とチャートのフレイクが出土している。

3号炉状遺構(第111図)

3-1・3-2号炉状遺構は、I-8区において大溝内で検出された。検出面は、大溝の床面より20cm程度上面である。このことから、大溝が若干埋まった段階で構築されたと言える。大きさは、3-1号が260cm×120cmで3-2号が285cm×110cmである。3-1号が3-2号を切っている。

ア 3-1号

3-1号の最大の特徴は、大型の礫を円形に配置して燃焼部を形成している点である。この礫は、2段に積み上げられ、それぞれの礫の平坦面が内側に来るように配置されている。さらに、上段の礫は内側へ傾けられ、断面形状がドーム形を呈する。また、各礫は内側が赤変している。これらの礫の間には、粘土が貼り付けられ、さながら目地の役割を果たす。そして、内部へ行くにしたがい熱により硬化している。粘土は、上段の礫の内側にも貼り付けられており、これが天井部に該当するものと思われる。この天井部から崩落したと思われる粘土塊が若干埋土中に認められた。埋土は、燃焼部床面は最大で厚さ5cmの炭化物層が広がっており、その上部は炭化物混じりの灰褐色砂層がかき出し部共に堆積している。この層は、厚さ約43cmであったが分層は出来なかった。

かき出し部は、162cm×110cmの楕円形を呈している。燃焼部とかき出し部との間には大型の礫を両側に伸石として配置しており、熱が逃げ出さないための工夫が認められる。

イ 3-2号について

3-2号は、大溝内にこれと並行するように構築されている。先に述べたように3-1号によって燃焼部とかき出し部が切られている。この遺構も、3-1号と同様に礫を組み合わせて燃焼部を構築している。ただし、3-1号との違いは、軽石の一部に用いている点であろう。この結果、軽石外部の砂層が赤化しており、熱が放出し

ていたものと思われる。粘土による目地も3-1号ほど緻密ではない。燃焼部には、最大で厚さ9cmの炭化物層が認められた。その上部には、炭化物混じりの灰褐色砂層が堆積している。遺物等は出土していない。

4号炉状遺構(第111図)

J-8区のⅣ層において検出されたが使用時期は周辺の炉状遺構とほぼ同時期であると考えられる。周囲より一段深く掘り込まれた場所に位置し、大きさは220cm×100cmである。検出時に3/4程度削平されており、基礎部がわずかに残っている程度である。燃焼部は赤褐色の炉壁を持ち、形状はC字状であると思われる。内部の埋土は上面に炭化物混じりのⅡ層土が堆積し、その下に炭化物の層が全面に堆積する。厚さは最大で7cmを測る。検出面から約15cm下に床面があるが硬化はみられない。焚き口は南南東側にありここから外側に向かって掻き出し部が楕円形に拡がる。埋土は明黄褐色で灰や炉壁や炭化物が混ざっている。燃焼部から採取した炭化物の分析を行った結果、樹種はアワブキ属で、放射性炭素年代は補正年代を換算すると西暦1,482±39年という結果が出ている。

5号炉状遺構(第112図)

J-8・9区のⅢa層において検出された。削平により基礎部がわずかに残る程度である。燃焼部の炉壁はC字状を呈している。大きさは97cm×82cmである。埋土は炭化物を含む。床面の焚き口付近は熱でわずかに赤化している。掻き出し部のプランは80cm×50cmで、少量の灰や炭化物を含む茶褐色土が堆積する。燃焼部の埋土中から採取した炭化物を分析した結果、樹種は広葉樹(散孔材)で、放射性炭素年代は補正年代を換算すると西暦1,350±38年という結果が出ている。

6号炉状遺構(第112図)

K-8区のⅢa層において検出された。7号と隣接している。燃焼部は赤褐色でC字状の炉壁を持ち、大きさは115cm×85cmである。燃焼部奥の壁はフラスコ状に折られ、若干オーバーハングしている。壁の断面の被熱による赤化部分は下に向かうほど薄くなっている。燃焼部内は焚き口から見て奥半分の床面が熱で硬化し、褐色を呈している。手前半分は硬化はみられず、にぶい赤褐色を呈している。炭化物が硬化した床面上に最大で3cmの厚さで堆積している。焚き口は東側にありここから外側に向かって炉壁の一部と見られる粘土塊が混入する灰質土が堆積するが、削平のため上部構造や掻き出し部のプランは確認できなかった。

燃焼部と掻き出し部の埋土から採取した炭化物を分析した結果、樹種はクスノキ科であり、放射性炭素年代は

補正年代を換算すると西暦1484±37年という結果が出ている。

7号炉状遺構 (第112図)

K-8区のⅢa層において検出された。大きさは、7-1号が275cm×105cmで、7-2号が90cm×80cmである。検出時より7-1号が7-2号の焚き口と掻き出し部を切っているのが観察された。双方とも検出面以上は削平されており、上部構造はわからない。

ア 7-1号

7-1号は焚き口の左右に大きい袖石を使い、燃焼部は102cm×92cmのC字形プランを呈しており、壁の残り具合も良好である。比較的頑丈に作られており、3号(イコウ2582)と同様に長期間の使用のために作られたものと考えられる。煙道は確認できない。検出面より約40cm下にはほぼ平坦な硬化していない床面があり、その上を炭化物層が覆う。これは燃焼部の奥にいくほど厚く堆積しており、最大で約10cm程を測る。炭化物層の上には崩落した炉壁の粘土が混ざる暗赤褐色の埋土があるが分層できなかった。燃焼部の壁は断面で見るとややプラスチック状である。また、床面から20~27cmまでは固く焼成されており、これより上の壁はやや脆かった。すなわち、下部をまず固く作った後、その上に粘土を積み上げているのがわかる。また、焚き口の袖石近くの粘土は特に上から下まで煉瓦状に固く焼成されており、指頭で掻き上げるなどして、ていねいに燃焼部の内面壁を整えている。袖石は二つとも床面より約13cm下まで突き刺すようにして据えている。燃焼部を検出時の周囲の土の焼け具合と密着具合からみて、炉壁の下位1/3~1/4程度は地上に露出せずに、地

下にあった可能性がある。北側のかき出し部は175cm×87cmの楕円形を呈する。上層に炉壁の粘土や炭化物が混ざる薄い層があり、その下にぶい黄褐色の埋土が堆積していた。最も深い所で検出面より35cmを測る。遺構内遺物は燃焼部内に青花碗片が、掻き出し部に瓦質土器の描鉢片がそれぞれ1点、床から若干浮いた位置で出土した。

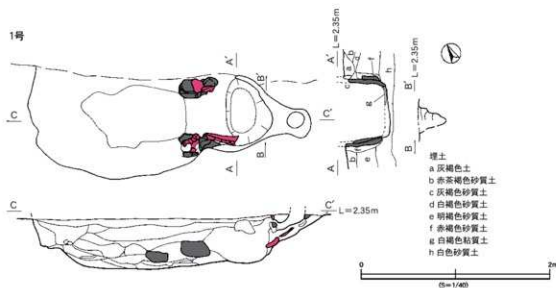
イ 7-2号

切り合いの関係から7-1号より前に作られた遺構であることが理解される。燃焼部内の埋土は褐色で崩落した炉壁の粘土と炭化物が混ざる。床面は7-1号より30cm近く高く、硬化は見られない。炉壁は袖石等も使用されており、残存状況も良好ではない。大きさは7-1号の燃焼部とほぼ同じであると思われる。焚き口と掻き出し部は切られている。

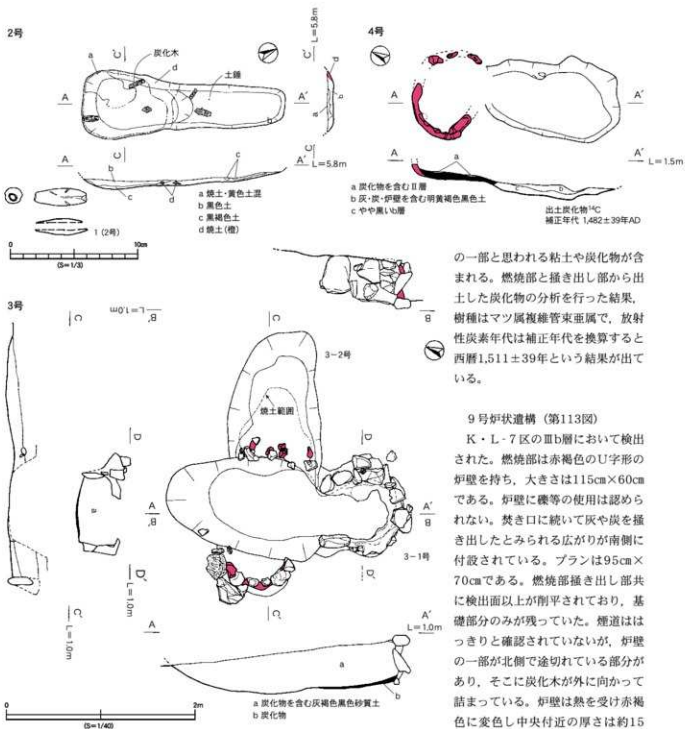
7-2号の遺構の残存状況の悪さから、何らかの理由で短期間しか使用されずに、その後長期使用を考えた丈夫な7-1号をすぐ横に作った可能性が考えられる。

8号炉状遺構 (第113図)

K・L-7・8区のⅢa層において検出され、10号より約3m西側にある。検出時に3/4程度が削平されており、基礎部がわずかに残っている程度である。燃焼部は溝状遺構によって南側が、ビットL8-7によって北西側がそれぞれ切られている。階段状の断面を持つビットの底は燃焼部の床面を貫いてさらに約47cm下に達している。赤褐色でU字形の炉壁を持つ燃焼部はプラスチック状に挟まれ、わずかにオーバーハングしている。大きさは推定で125cm×110cmである。炉壁に襷等の使用は認められない。内部の埋土は炭化物混じりの赤褐色で分層はできなかつ



第110図 炉状遺構①



第111図 炉状遺構②

た。検出面より約17m下に床面があるが、硬化は見られない。また、焚き口から見て燃焼部の右奥、床面から約7cm上の壁に11～15cm幅の穴が開いている。そこから外に向かい煤と地面の焼けた痕が約43cm延びているのが、検出時よりはっきりと確認できた。上部構造がわからないので明かではないが、煙道の可能性が考えられる。焚き口に続いて掻き出し口が南側に付設されている。大きさは203cm×160cmである。暗褐色の埋土中には炉壁

の一部と思われる粘土や炭化物が含まれる。燃焼部と掻き出し部から出土した炭化物の分析を行った結果、樹種はマツ属複雑管束亜属で、放射性炭素年代は補正年代を換算すると西暦1,511±39年という結果が出ている。

9号炉状遺構(第113図)

K・L・7区のⅢb層において検出された。燃焼部は赤褐色のU字形の炉壁を持ち、大きさは115cm×60cmである。炉壁に鑊等の使用は認められない。焚き口に続いて灰や炭を掻き出したとみられる広がり南側に付設されている。プランは95cm×70cmである。燃焼部掻き出し部共に検出面以上が削平されており、基礎部分のみが残っていた。煙道ははっきりと確認されていないが、炉壁の一部が北側で途切れている部分があり、そこに炭化木が外に向かって詰まっている。炉壁は熱を受け赤褐色に変色し中央付近の厚さは約15cmを計る。床面に赤化は見られない。

燃焼部の内側の埋土は黒褐色で、その下に厚さ4～6cmの炭化物層がほぼ全面的に堆積しているが、特に北側に厚く堆積している。炭化物はさらに掻き出し部の埋土の中にもブロック状に見られる。燃焼部と掻き出し部の埋土中から採取した炭化物を分析した結果、樹種はマツ属複雑管束亜属であり、放射性炭素年代は補正年代を換算すると西暦1,536±36年という結果が出ている。埋土中より近世と思われる炭物が1点出土している。また、埋土のウォーターフローテーションを行った結果、直径約4mmのガラス小玉が発見された。このガラス玉は分析

の結果、鉛ガラスであることが確認されている。

10号炉状遺構 (第113図)

L-7区のⅢb層において検出された。燃焼部は赤化したU字形の炉壁を持ち、大きさは100cm×70cmである。炉壁に礫等の使用は認められない。焚き口に続いて灰や炭を掻き出したと思われる広がりが南側に付設されている。

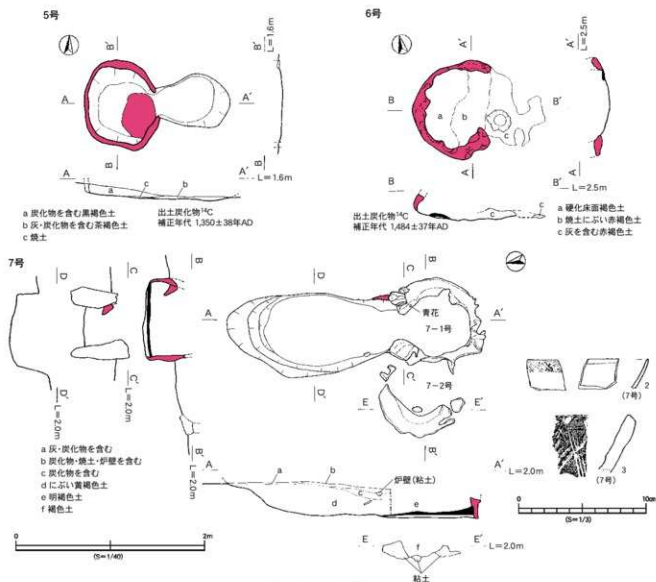
プランは130cm×55cmである。燃焼部掻き出し部共に検出面以上が削平されており、基礎部分のみが残っていた。燃焼部に煙道ははっきりと確認されていないが、炉壁の一部が東側で途切れており、ここより炭化物が外側にはみ出るように堆積していた。炉壁は熱を受け明赤褐色に変色し南側の焚き口付近ほど厚く、幅は約10cmを計る。燃焼部の北半分にはかまどの上部構造が崩落したと思われる粘土が堆積し、その下に厚さ4~5cmの炭化物層が堆積している。炭化物層の下部にある床面は熱により深さ3cmにわたって硬化しているが熱による赤化は見られ

ない。炭化物はさらに掻き出し部の褐色の埋土の中にもブロック状に見られる。燃焼部の焚き口付近からは炭化種子(桃核)が床面から約8cm浮いた位置で出土している。また、輸入陶器も出土した。

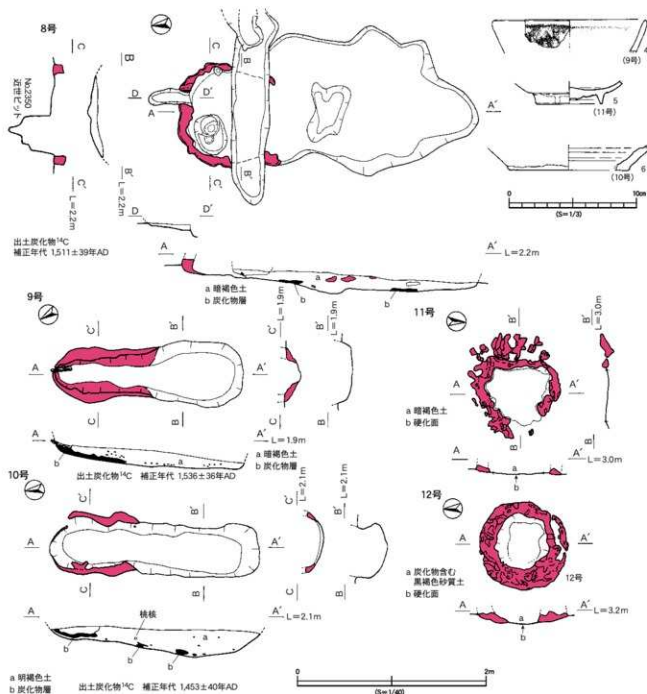
燃焼部と掻き出し部から採取した炭化物を分析した結果、樹種はコナラ属アカガシ亜属であり、放射性炭素年代は補正年代を換算すると西暦1,452±40年という結果が出ている。また、土壌サンプルの分析を行ったところ、栽培植物のオオムギが検出された。

11号炉状遺構 (第113図)

M-8・9区のⅢa'層において検出された。12号から約2.5m東側にある。燃焼部は橙色のC字状の炉壁を持ち、大きさは100cm×85cmである。検出面以上が削平されており、上部構造はわからない。したがって、12号のようにリング状であったのかは不明である。灰や炭を掻き出したとみられる広がりも同様に確認できなかった。炉壁は被



第112図 炉状遺構③



第113図 炉状遺構④

熱で堅くなっており機等の使用はない。燃焼部の外の西側に炉壁の上部が崩落した粘土塊がひろがっていた。燃焼部の中には黒褐色の埋土がみられる。検出面から約8cm下にある中央の床面は硬化しているが、炭化物等の出土はみられなかった。遺構から白磁碗の底部が出土した。

12号炉状遺構 (第113図)

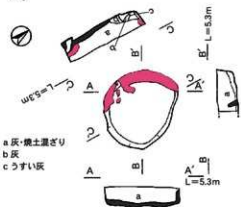
M-9区のⅢa'層において検出された。この炉状遺構のみ他の遺構と形態が異なり、直径95cmの円形を呈する。炉状ではあるが、焚き口や煙道が見られない。被熱により硬化した橙色の炉壁がリング状に囲み、中央部が窪ん

でいる。検出面から約12cm下にある中央の床面は硬化しており、その上に黒褐色でわずかに炭を含む埋土がみられる。埋土中から弥生土器の口縁部が1個出土したが、外部から入り込んだものであると考えられる。炉壁の上部が崩落したと思われる粘土塊、まとまった炭化物や鉄滓や鍛造剥片等の金属質剥片も確認されなかった。

13号炉状遺構 (第114図)

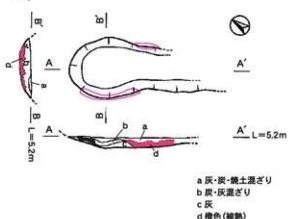
P-6区のⅡ層において検出された。検出面以上が削平されており、燃焼部を構成するオレンジ色の炉壁の一部のみが残っている。燃焼部の推定直径は87cm。

13号



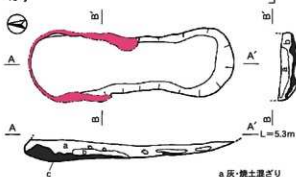
a 灰・焼土混ざり
b 灰
c うすい灰

14号



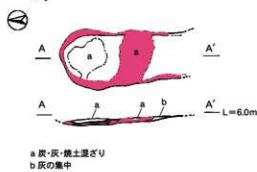
a 灰・焼土混ざり
b 灰・灰混ざり
c 灰
d 橙色(被熱)

15号



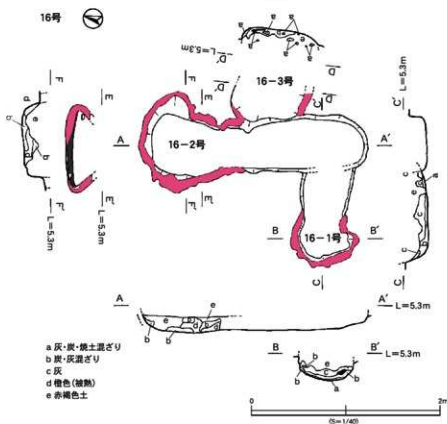
a 灰・焼土混ざり
b 灰・灰・焼土混ざり
c 炭化物

17号

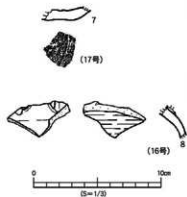


a 灰・灰・焼土混ざり
b 灰の集中

16号



a 灰・灰・焼土混ざり
b 灰・灰混ざり
c 灰
d 橙色(被熱)
e 赤褐色土



第114図 炉状遺構⑤

14号炉状遺構 (第114図)

P-6区のⅡ層において検出された。検出時に上部の殆どが削平されており、燃焼部と掻き出し部の一部がわずかに残っている程度である。燃焼部は橙色でC字状の炉壁を持ち、大きさは85cm×72cmである。床面は硬化せず、埋土は概ねレンズ状の堆積を見る。

15号炉状遺構 (第114図)

P-6区のⅡ層において検出された。主軸はほぼ南北である。燃焼部は橙色でC字状の炉壁を持ち、プランは90cm×76cmである。床面には炭化物層が奥に行くほど厚く堆積しており、最大で13cmを測る。その上に崩落した炉壁の一部と見られる粘土塊や、炭化物の混ざった灰褐色土がある。煙道は確認できない。焚き口に続いて灰や炭を掻き出したと思われる広がりや南側に付設されている。大きさは130cm×73cmである。

16号炉状遺構 (第114図)

P-6区のⅢa層の上面において検出された。検出面以上が削平されており、上部構造はわからない。検出時より16-1(E)と16-3(G)が16-2(F)によって切られており、16-2(F)が一番後に使用されたのがわかるが、16-1(E)と16-3(G)の新旧関係は確認することができなかった。16-2号の主軸はほぼ南北であり、16-1号・16-3号の主軸は並行しておりほぼ東西である。

ア 16-1号

16-2号により掻き出し部の約半分が切られている。燃焼部は橙色でC字状の炉壁を持ち、プランは78cm×73cmである。埋土は炭化物や崩落した炉壁の一部と見られる粘土塊を含む茶褐色土である。検出面より約23cm下に床面があり、北側の一部が硬化している。掻き出し部の最大幅は55cmで焚き口から約40cmのところまで切られている。

イ 16-2号

燃焼部は橙色でC字状の炉壁を持ち、プランは117cm×90cmである。内部の埋土は崩落した炉壁の一部と見られる粘土塊や、炭化物の混ざった茶褐色土である。検出面より約25cm下に床面があるが、硬化はみられない。また、焚き口より20cm奥の炉壁の断面は、フラスコ状を呈しているのが明瞭に観察され、炭化物の層が床面の上に最大で5cm堆積している。炭化物の堆積は奥に行くほど薄くなり、炉壁は床面に近づくほど薄くなっている。焚き口より南側に向かって掻き出し部が楕円状に広がる。プランは165cm×63cmである。埋土は粘土塊や、炭化物の混ざった茶褐色土で、分層はできなかった。約1.5cmの滑石片と耳壺と思われる白磁片(8)が遺構内より出土した。

ウ 16-3号

16-2号と削平により、レンガ色に変色した燃焼部の壁のごく一部分しか残っていない。埋土には炭化物や崩落した炉壁の一部と見られる粘土塊が混ざる。床面に硬化はみられない。推定される燃焼部の横幅は約80cmである。

17号炉状遺構 (第114図)

Q-6区のⅡ層において検出された。検出時に上部の殆どが削平されており、基礎部がわずかに残っている程度である。主軸はほぼ南北であり、北側に炭化物やリング状があり、その中に灰や焼土等が混ざった埋土が見られるため、ここにC字状の燃焼部があったと思われる。焚き口と思われる付近には崩落した炉壁の一部と見られる粘土がみられる。南側に灰が集中しているため、ここが掻き出し部であると思われる。掻き出し部の先端も削平されているのでプランは不明である。糸切り底の土師器(7)が床着で出土し、他に親指大の焼けた粘土塊が1点出土した。

18号炉状遺構 (第115図)

M-9区のⅢa'層において検出されたもので、主軸方向がほぼ北西-南東の長方形の土坑である。側面と下面が被熱によって赤色化している。埋土には炭化物が多くみられたが、中央部にはほぼそのままの状態の炭化木が残存していた。大きさは66×36cmで、検出面からの深さは5cmである。西側の角付近は、ビット(イコウ3113)に切られている。

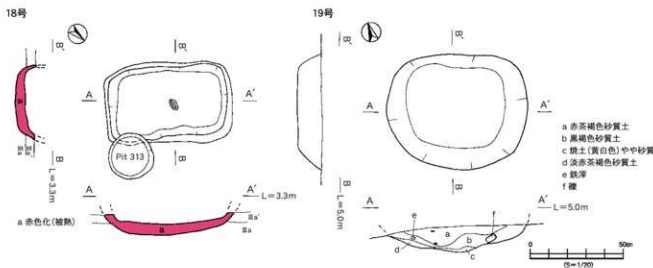
19号炉状遺構 (第115図)

O-5区において検出された。大きさは60×75cmで、主軸方向がほぼ南北-東西の方形である。埋土は全体的に砂質で概ねレンズ状堆積を見る。中に礫、炭化物、鉄滓、焼土粒を含む。壁面、底面及び遺構の周辺も熱を受けやや硬化している。

※8号・9号・10号の3基はお互いの距離が近く、軸がほぼ南北であり、焚き口が南を向いている。検出面の高さも概ね一致している。また3基とも燃焼部の右奥の壁に煙道の可能性のある穴があり、その中には炭化物や煤が多量に見られた。これらのことから同一時代か、極めて近い時期に使用されたと考えられる。

(4) 土坑墓

18基の土坑墓が検出された。これらについては、人骨・副葬品などが発見されているものを中心とした。ただし、人骨が発見されず、明確に「墓」と断定できないものについても、土坑の形態の類似性から「墓」の可能性のあ



第115図 炉状遺構⑥

あるものはここに含んだ。平面が長方形で深さ50cm以下のものは基本的には「木棺墓」、平面形が円形あるいは方形で比較的掘り込みの深いものは「桶墓」とみられる。ただし、長方形でも掘り込みの深いものは「桶墓」である可能性がある。なお、土坑墓は頭にBをつけて、B1～B18としている。

1号土坑墓 (第116図)

小型の土坑であるが、鉄製品が出土しているので、墓の可能性があるためここで取り上げた。

24は鉄器である。ヘラと考えられるが、用途不明である。

2号土坑墓 (第116図)

不定形に見えるが、敵に切られているためである。骨が風化したとみられる乳灰白色粘土と炭化物が出土している。

3号土坑墓 (第116図)

C-6区のⅡ層上面で、人骨が土壌化したとみられる粉状の白色土部分と粘質土部分が長さ90cm、幅30cmの範囲で検出された。もともとは土坑墓であった可能性があるが、人骨の痕跡のみの検出であるので明確でない。遺物の出土はなかった。

4号土坑墓 (第116図)

D-5区のⅢa'層上面で検出された。平面形は、ほぼ隅丸長方形を呈する。平面形が90×80cmで、深さ190cmの深い土坑である。底面から数cm浮いた状態で完形の土師器小皿(2)が出土している。また、土師器皿も出土し

た。人骨の出土はみられなかったが、形態から桶墓の可能性の高いものとして取り上げた。

5号土坑墓 (第116図)

E-2区のⅡ層上面で検出された。平面形は長方形で、遺構内からは釘が30～40本出土した。明確な人骨は検出されなかったが、人骨が土壌化したものとみられる白色の粘質土などが埋土中に混在していた。

6号土坑墓 (第117図)

F-3区のⅡ層上面で検出された。平面形は長方形で、遺構内からは古銭の破片・土器片などが出土した。人骨細片・人骨が土壌化したものとみられる白色の粘質土などが埋土中に混在していた。

7号土坑墓 (第117図)

F-3区のⅡ層上面で検出された。平面形は長方形で、遺構内からは釘・土器などが出土した。明確な人骨は検出されなかったが、人骨が土壌化したものとみられる白色の粘質土などが埋土中に混在していた。

8号土坑墓 (第117図)

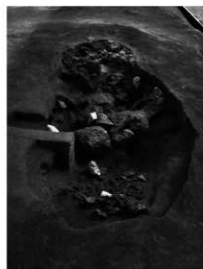
G-7区で検出された。遺構内からは襪などが出土した。明確な人骨は検出されなかったが、人骨が土壌化したものとみられる白色の粘質土などが埋土中に混在していた。

9号土坑墓 (第117図)

H-3区のⅡ層上面で検出された。平面形は長方形で、遺構内からは遺物の出土はなかった。明確な人骨は検出されなかったが、人骨が土壌化したものとみられる白色

表5 上水流遺跡 炉状遺構観察表

遺構番号	遺構名	区	検出層	主軸	燃焼部(cm)	抜き出し部(cm)	遺構内遺物	備考	形態	
1号	D-6区カマド	D-6	Ⅱ	S63°E	138×84	不明	—	煙道、袖石の使用	C字形炉壁	
2号	I-5区カマド	I-5	Ⅱ	N22°E	95×73	不明	土鏝、チャートフレイク	—	C字形炉壁	
3-1号	イコウ2582-1	I-8	大溝内	S13°E	107×95	182×110	—	ドーム状断面、礫の多用、粘土による自地による自地、切り合い	C字形炉壁	
3-2号	イコウ2582-2	I-8	大溝内	N92°W	不明	不明	—	礫、軽石の多用、粘土による自地、切り合い	C字形炉壁	
4号	イコウ2213	J-8	Ⅳ	N17°W	92×73	149×92	—	—	C字形炉壁	
5号	イコウ2416	J-8-9	Ⅲa	N90°W	97×82	80×50	—	床面礫化	C字形炉壁	
6号	イコウ1199	K-8	Ⅲa	N85°W	115×85	不明	—	床面半分礫化	C字形炉壁	
7-1号	イコウ2210-1	K-8	Ⅲa	S8°W	102×92	175×87	青花、瓦質備群	袖石の使用	C字形炉壁	
7-2号	イコウ2210-2	K-8	Ⅲa	N71°W	不明	不明	—	切り合い	C字形炉壁?	
8号	イコウ2185	K-L-7-8	Ⅲa'	N7°E	125×110	203×160	—	プラスチック状断面	C字形炉壁	
9号	イコウ1889	K-L-7	Ⅲb	N31°E	115×60	95×70	—	梁付	C字形炉壁	
10号	イコウ1888	L-8	Ⅲb	N6°E	100×70	130×55	炭化種子	床面礫化	C字形炉壁	
11号	イコウ1194	M-8-9	Ⅲa'	N85°E	100×85	不明	—	床面礫化	C字形炉壁?	
12号	イコウ1193	M-9	Ⅲa'	—	95×84	なし	弥生土器	床面礫化	円形	
13号	中世カマドA	P-6	Ⅱ	N70°W	直径約87	不明	—	—	C字形炉壁	
14号	中世カマドB	P-6	Ⅱ	N37°W	85×72	不明	—	床面礫化	C字形炉壁	
15号	中世カマドC	P-6	Ⅱ	N2°E	90×76	130×73	—	—	C字形炉壁	
16-1号	中世カマドE	P-6	Ⅲa	N101°E	78×73	不明	—	切り合い	C字形炉壁	
16-2号	中世カマドF	P-6	Ⅲa	N9°E	117×90	165×63	白磁、滑石	プラスチック状断面	C字形炉壁	
16-3号	中世カマドG	P-6	Ⅲa	N89°E	直径約80	不明	—	切り合い	C字形炉壁?	
17号	中世カマドD	Q-6	Ⅱ	N6°E	不明	不明	土師器(床着)、粘土塊	—	C字形炉壁	
18号	イコウ3073	M-6	Ⅲa'	N45°W	66×36	—	—	—	圓炉裏か? 長方形	
19号	近世焼土遺構	O-5	Ⅲa'	N30°W	60×75	—	—	—	—	圓炉裏か? 長方形



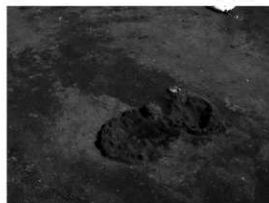
1号



3-1号



3-1号 燃焼部確配置

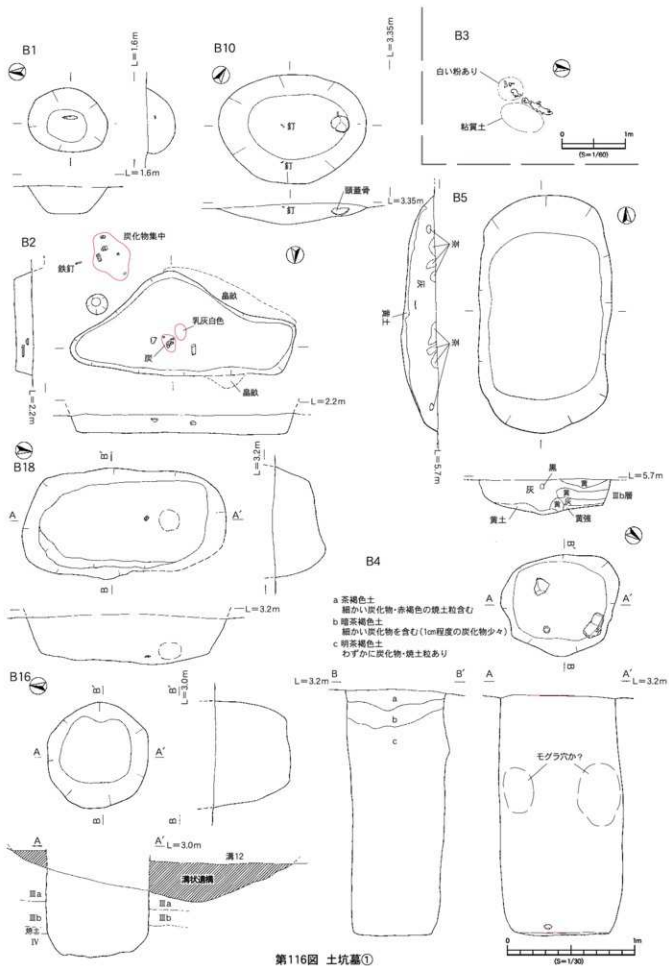


7号

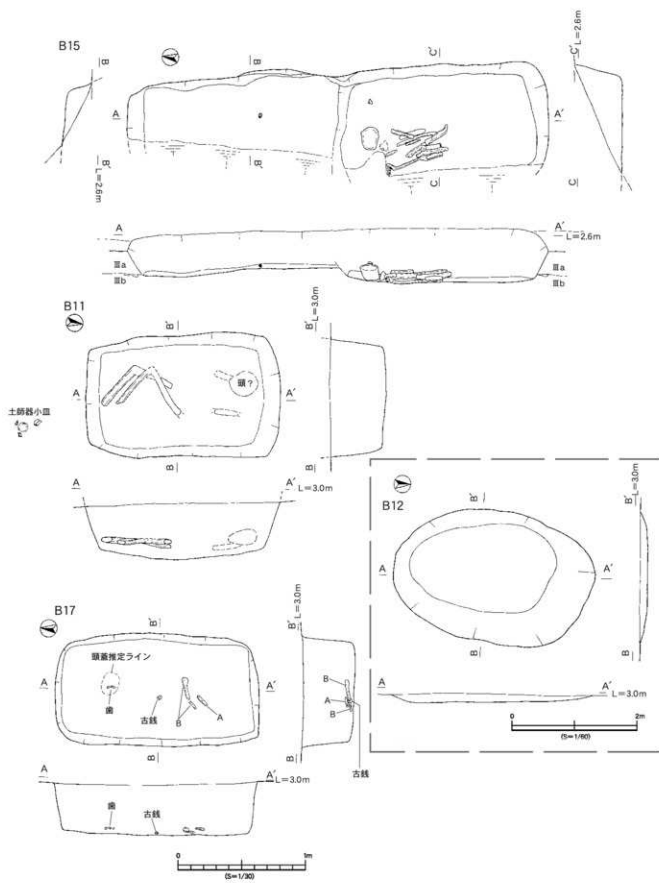


12号

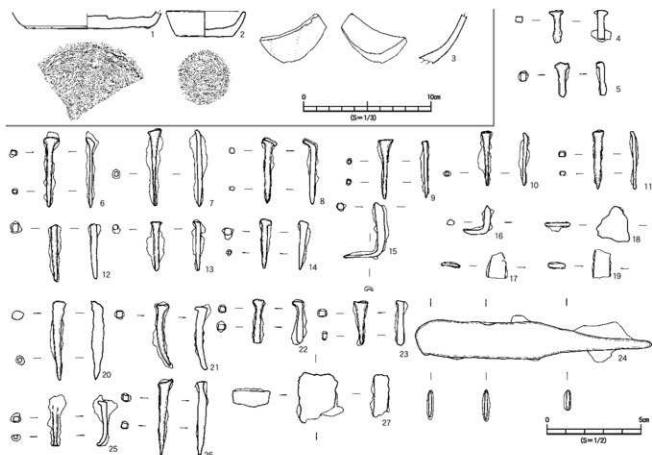
図版33 炉状遺構検出状況



第116図 土坑墓①



第118図 土坑墓③



第119図 土坑墓出土遺物実測図

の粘質土などが埋土中の上部にみられた。

10号土坑墓（第116図）

H-6区のⅢa'層上面で検出された。平面形はほぼ長楕円形状を呈している。釘・頭骨が出土した。頭骨は北側で発見されている。頭骨の横には板が見つかっており、木棺の痕跡である可能性がある。釘は、検出面付近で2点出土した。

11号土坑墓（第118図）

K-8区のⅢa層上面で検出された。釘、頭部の痕跡、四肢骨などが出土した。痕跡とみられる白色の硬化した部分を取り上げて後日クリーニングを行ったところ、脳頭蓋の右半分の残存が確認された。特に下顎は良好な残存状態である。骨は四肢骨であると考えられ、残りは悪いが大腿・脛骨・腓骨などの脚部の骨である可能性が高い。検出状況から、膝を曲げた状態で埋葬されたとみられる。西向き合掌葬であろうか。釘は、検出面から底面付近までおよそ100点が出土した。古銭は出土していない。

遺構と直接関係ない可能性もあるが、遺構から60cm南で小銅器小皿が出土している。

12号土坑墓（第118図）

他の土坑墓よりもひとまわり大きい。青磁碗（第119図3）が出土した。人骨などは確認されていない。

13号土坑墓（第122図）

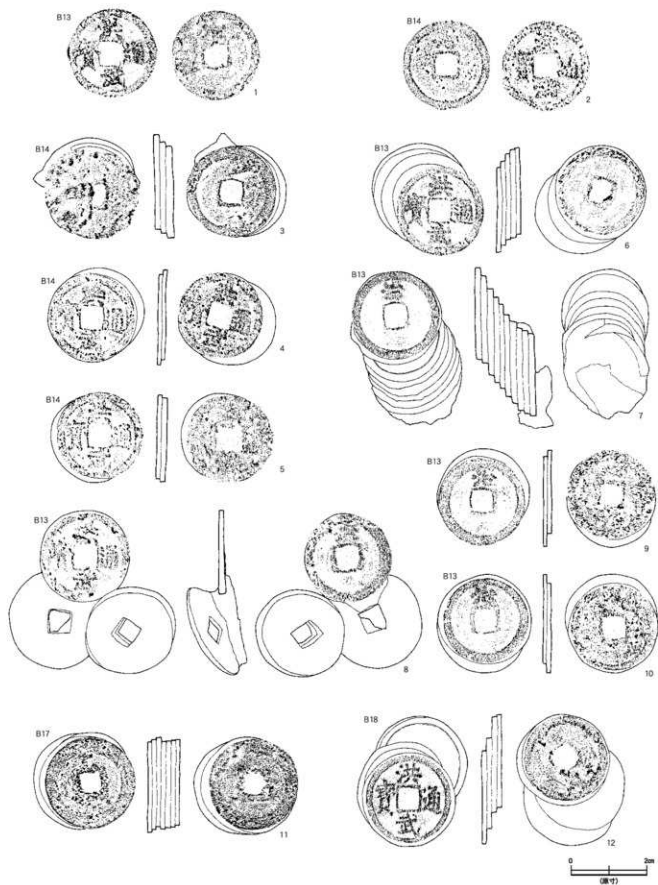
M-9区のⅢa'層上面で検出された。ただし、検出した時点ですでに底面のみになっていたため、およその平面形しかつかめなかった。深さは不明である。

古銭が24枚（第120図6～10）・釘（第119図4～19）が出土した。古銭は数枚重なった状態のものが5つあり、洪武通寶の加治木銭が表にみえるものがあるが、重なりをばらしていないのでは確認していない。

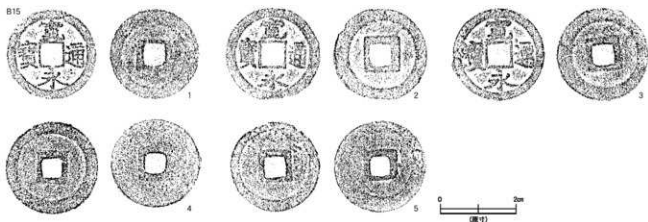
14号土坑墓（第122図・206図）

M-9区のⅢa'層上面で検出された。

古銭が8枚（第120図2～5）・釘（第119図20～23・



第120图 土坑墓出土古钱①



第121図 土坑墓出土古銭②

25・26)が出土した。古銭は洪武通寶の加治木銭が表にみえるが、中は確認していない。

15号土坑墓(第118図)

M・9区のⅢa'層上面で検出された。西側は、昭和初期の河川工事によって切られている。一見するとひとつの遺構にみえるが、底面の状況から2基の切り合いであることが理解される。北側土坑を南側土坑が切っており、かつどちらからも古銭が出土している。このうち南側土坑からは人骨が発見されている。

膝を強く曲げたきつめの屈葬であり、埋葬姿勢からみると中世的である。ただし、副葬されていた古銭は寛永通寶であるので、時期は近世である。当遺跡で発見された人骨の中では、比較的残存状況がよく、四肢骨などはある程度特定が可能である。また、頭部の保存も比較的良く、右半分が残っている。

南側土坑の古銭は、頭部付近の底面からわずかに浮いた状態で寛永通寶3枚(第121図 1~3・5)が出土し、紐が付着している。また2枚重ねでもう一組出土したが、上下ともに裏面を向いた状態であるので、詳細は不明である。出土頭部の下に古銭を置いた可能性がある。

北側土坑からは、古銭のみの出土であった。古銭は3枚重ねて出土したが、上下ともに裏面を向いた状態であるので詳細は不明である(第121図 1~4)。

土坑墓 b16(第116図)

N・8区の溝12の底面で発見された。骨や遺物などは確認されていない。他の土坑墓と比較して、比較的深さが浅い。ここでは形態の類似性から土坑墓としてとりあげたが、墓ではない可能性もあることを付記しておく。

17号土坑墓(第118図)

O・7・8区のⅢa'層上面で検出された。釘・古銭・歯・四肢骨が底面付近で出土した。頭骨は残っていないが、痕跡とみられる白色の硬化した部分が発見された。その中に、歯が残っていた。骨は四肢骨であると考えられ、残りは悪いが大腿・脛骨・腓骨などの脚部の骨である可能性が高い。

遺構中からは古銭も出土した。紐が付着しており、床面から7枚重なった状態で出土した。この古銭は上下とも裏面を向いているので詳細は不明である。

18号土坑墓(第116図)

O・9区のⅢa'層上面で検出された。検出面には炭化物がわずかにみられたが、埋土中にはみられなかった。古銭・頭部の痕跡が発見された。痕跡とみられる白色の硬化した部分を取り上げて後日クリーニングを行ったところ、右側頭部の残存が確認された。古銭は洪武通寶が4枚重なった状態で、底面から少し浮いて検出された。洪武通寶は加治木銭である。

(5) 塚状遺構及び関連遺構 (第122図)

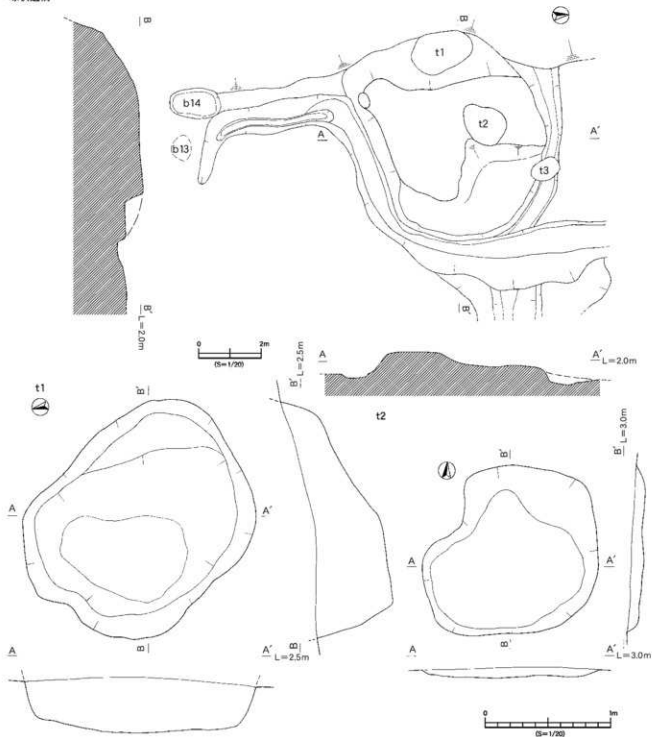
塚状遺構はM・N・9・10区で発見された。重機によって表土を除去する際に周辺と土の硬さや色調の違いがみられたので精査を行ったところ発見された。ただし、重機による表土除去はある程度進んでいたため、若干破壊してしまった部分がある。また、本来はもっと高さがあったと考えられる。形状は、周辺から盛り上がった部分とその周りに巡る溝状遺構からなる。また、塚の頂上と

溝の周辺には、土坑 (t-1・2・3) 及び土坑墓 b13・b14が確認された。

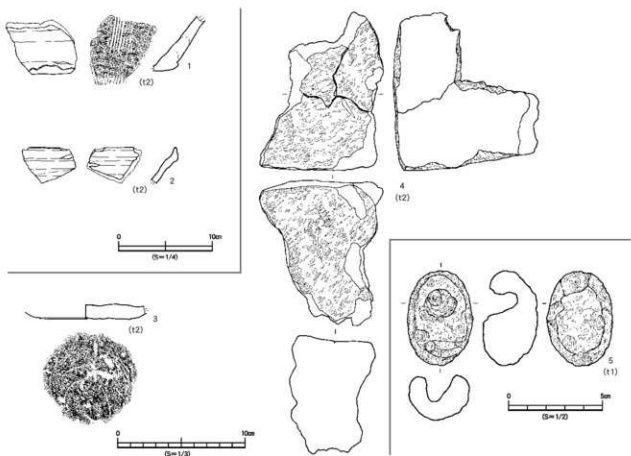
t-1は、N・9・10区の塚状遺構上の西側で検出された。軽石製品が出土している (第123図5)。

t-2は、N-9区の塚状遺構上ほぼ中央で検出された。備前焼の播鉢、東播磨系須恵器片口鉢、軽石製品が出土している (第123図1・2・4)。

塚状遺構



第122図 塚状遺構及び関連遺構



第123図 塚状遺構出土遺物実測図

t-3は、溝14を切った状態で塚状遺構の北東側で検出された。糸切り底部の土師器環が出土している。ピットの可能性があることも付記しておく。

(5) 大型土坑

大型土坑1 (第124図・126図)

P・Q・R-5区でⅡ層およびⅢa'層上面で検出された。平面プランは、19m×5.1mで深さは検出面から1.6mであった。西側から礫が入り込んでいる状況が観察される。鉄溝6につながっている。遺構の一部は、確認調査時のトレンチに切られている。また、遺構の東側隅の上部には、古道とみられる帯状硬化面がみられる。遺構がある程度埋まった時点で、遺構の隅を通路として使用していた可能性がある。P～T-5区付近では溝状になっている。青磁・青花・東播磨系須恵器片口鉢などとともに、鉄器と不明銅器が出土している。

17・18は薩摩焼である。17は、内面に同心円状のあて具跡が残る。底部外面に目跡がある。18は、片口の注ぎ部である。口縁部は端部で外側に折り、さらに内側に折り返して丸くおさめる。口縁部直下に、半円形の粘土板を貼り付けて注ぎ口をつくる。内面から横方向の切れ込みを入れ、切り口の下部は外側に、上半分は外側上方に折り曲げて接合する。片口外面には貼り付ける際

のナデつけた痕が残る。口唇部には目跡が残る。

大型土坑2 (第125図・127図)

N・O-6・7区でⅡ層およびⅢa'層上面で検出された。平面プランは、8.8m×9.44mで深さは検出面から1mであった。遺構北側には、上り下り用とみられる階段状の施設がみられる。遺構内からは、礫・土器・陶器等が出土した。これらは南側から流れ込んだような状況で検出されているので、徐々に埋まっていったというよりも、何らかの作用でいっきに埋まった可能性が高い。周辺に目を向けると、東側で溝9・10と大型土坑2はつながっていることが理解される。さらに、西側では溝1068とつながっていることが理解される。

26は、薩摩焼の播鉢である。口縁部は外側に折り返して肥厚させ、2条の突帯をつくる。口縁部の端部がわずかに外反し、口唇部は幅広く平坦である。内面にナデ調整の痕が看取される。浅い掘り目を下位から上位へ施している。口唇部の軸は、拭き取られている。

大型土坑3 (第125図・127図・128図)

N-7・8区で検出された。東半分をはじめに検出したが、当初はやや掘りすぎた状況で検出された。西半分については、東半分で遺構の続きがあることが認識され